

Tomita Tetsunosuke and Studying in America in the late 1860s to the early 1870s

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 秀悦 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24174

幕末維新のアメリカ留学と富田鐵之助

～「海舟日記」に見る「忘れられた元日銀總裁」富田鐵之助(5)～

高橋秀悦*

1 はじめに

明治20年代に日銀總裁や東京府知事を務める富田鐵之助（仙台藩士）は、文久3（1863）年に勝海舟の「水解塾」塾生となったが、海舟の長男の小鹿のアメリカ留学に伴い、高木三郎（庄内藩士）とともに、小鹿の監督・同伴者に選ばれ、慶應3（1867）年7月25日、コロラド号で横浜からアメリカに向けて出発した。このとき、仙台藩は、通弁修行・富田の従者の名目で、高橋是清（後の日本銀行總裁・大蔵大臣・内閣総理大臣）と鈴木知雄（後の旧制第一高等学校教授・日本銀行出納局長）もコロラド号に乗船させ渡米させた。

富田と高木は、日本国内の急変を憂慮し、横井小楠の甥2人に小鹿の後見を託し、ほぼ半年をかけて、明治元（1869）年11月18日に帰国するものの、海舟に諭されて、1か月後の12月19日、横浜から再びアメリカに渡り、翌年2月にニューヨークに着く。

小鹿はもともと私費留学であり、富田と高木は、それぞれの藩の費用での留学であったが、明治政府の積極的な留学生政策の推進と海舟の尽力によって、明治2年7月には、3人ともに官費留学（1年につき600メキシコ・ドルの学資給付）に切り替わる。

高橋（2014a）や（2014b）では、上の事項を詳細に考察しているが、本稿は、この続編であり、富田とその関係者のアメリカ留學生活に焦点をあて考察する（これと関連する日本のグローバル化の始まりについては、高橋（2015a）や（2015b）を参照のこと）。

第1章は、初期の留學生の多くがアメリカ・プロテスタント諸教会（とりわけオランダ改革派教会）と関わりをもち、アメリカ留学を実現していることから、受け入れ側のアメリカ諸教会の海外宣教について考察する。小鹿・富田・高木のアメリカ留学の開始時においては、彼らとプロテスタント諸教会との直接的な関係は見られないが、留学後にオランダ改革派教会と関わりをもつことによって、アメリカ留學生活も軌道に乗る。この点からもアメリカ諸教会の海外宣教政策を考察することが重要になるのである。

第2章は、ニュージャージー州ニューブランズウィックでの留學生活を中心にして、富田鐵之助の交流を見ていく。すなわち、第1に、上で述べた緊急一時帰国前のニューブランズウィックでの交流を考察する。第2に、富田と高木は、緊急一時帰国に際して、横井兄弟（前述の横井小楠の甥2人）に小鹿の後見を託したことから、海舟と横井小楠・横井兄弟との間に何らかの人的関係があることが想定されるので、この人的関係を明らかにする。第3に、その横井兄弟は、オランダ改革派教会と密接な関係をもって、ニューブランズウィックに到着した最初の日本人留學生

*本稿を作成するにあたり英文文書の判読にご協力をいただいたWilson Alley教授（東北学院大学経済学部）に対して厚く感謝申し上げます。また、大童家文書の閲覧・整理に関して、仙台市博物館、大童敬郎氏（元学校法人東北学院理事・法人事務局長）、水野沙織氏（仙台市博物館学芸員）、仁昌寺正一教授（東北学院大学経済学部）及び雲然祥子氏のご配慮・ご協力をいただきました。厚く感謝申し上げます。

生であることから、彼らの留学生生活を考察することによって、当時の留学事情を知る手がかりとする。この第2章の貢献は、大童文書（仙台市博物館寄託文書）によって富田・高木・小鹿の下宿先を特定したこと、また、これにより横井兄弟、日下部太郎、薩摩藩第1次留学生の畠山・松村・吉田との交流を考察したことにある。

第3章では、富田が15か月の留学生生活を送ったニューブランズウィック近郊のニュージャージー州ミルストーンでのコーウィン牧師（オランダ改革派教会牧師）との関係や、日本人留学生との交流・別離について考察する。この第3章の貢献は、アメリカの1870年人口センサスから、富田鐵之助とコーウィン牧師、アメリカに一時帰国中のバラ、岩倉具視の子息（岩倉具定（変名：旭小太郎））等の個人記録を探し出したこと、特に富田がコーウィンの牧師館に住まいしたことは、Griffs (1916) において示唆されたころではあるが、1870年人口センサスからこの事実を確認したことにある。

明治政府の積極的な留学生政策によりアメリカ留学生も、明治3年以降に急増する。第4章は、明治3年のアメリカ留学生（とりわけ、ニューブランズウィック留学生）について概観する。多くの先行研究は『男爵目賀田種太郎』に依拠しているが、この章では、『男爵目賀田種太郎』自体が、目賀田種太郎とともに渡米した松本壮一郎の「亜行日記」に基づいていることを論考する。

第5章は、富田のアメリカ留学生生活の締めくくりとして、ニュージャージー州ニューアークの「ブライアント・ストラットン・アンド・ホイットニー・ビジネス・カレッジ (Bryant, Stratton and Whitney Business College)」での留学生生活について考察する。校長のホイットニーは、富田と森有禮の商業教育に対する思いを具現して設立された「商法講習所（一橋大学の前身）」教師として、明治8年に東京に招へいされることになることから、重要な考察となる。この章では、アメリカ1870年人口センサスからホイットニー一家を抽出し紹介するとともに、商法講習所関連資料からビジネス・カレッジのカリキュラムを推論する。

第6章と第7章は、「海舟日記」を紹介である。第6章は、海舟の視点から明治3年のアメリカ留学者（主としてニューブランズウィック留学生）を捉え直し、第7章は、ニューブランズウィックのラトガース・カレッジ卒業後に来日したグリフィスやクラークと海舟との関係を論考する。これに加えて、第7章では、「海舟日記」の「富田が福沢江之書状等頼む」の記載から、富田鐵之助と福澤諭吉との交流がこの時期から始まったものと推測できる論拠を示す。

岩倉具視特命全権大使から「官費留学規則取調」やニューヨーク領事心得に任ぜられることで、富田鐵之助のアメリカ留学は終わる。第8章は、この「官費留学規則取調」の役割とその人的関係についての考察にあてられる。「官費留学規則取調」は、1987年に犬塚孝明によって翻刻された「杉浦弘蔵ノート」によるものであるが、本稿では、岩倉具視に出されて「勅旨」との関連でこの役割を考察するとともに、これ以後に富田鐵之助と深い関わりをもつ人々との人的関係を考察している。

本稿の内容は、関連分野の専門家にはとっては周知のことかもしれない。例えば、第1章の内容は、一部の日本キリスト教史の研究者にとって、また、第5章の内容は、「一橋大学校史」に関心を持つ関係者にとっては、周知のことかもしれない。第2章や第3章で言及した薩摩藩関連資料

も、薩摩藩留学生に関心を持つ関係者にとっては、周知のことかもしれないが、研究の中心は、あくまでも薩摩藩留学生であり、反維新軍・仙台藩の富田との交流は、まったく視野に入っていない。例えば、薩摩藩留学生の吉田清成を考察の中心にすえた研究論文である田中（1996）では、小鹿・富田・高木が、吉田書簡にその名前が記載された単なる留学生としてのみ位置づけられており（p.9）、ニューブランズウィックですぐ隣に住まいしたことは、まったく把握されていない。また、旧制第三高等学校校長の折田彦市の研究書である巖（2008）では、森有禮少辨務使に随行し渡米した者の名前を英文資料から起こしているが、そのひとは、何故か、「あらいつねのしん」と平仮名表記になっており（p.77）、「新井常之進（新井奥邃）」には思いが至っていない。

本稿で取り上げた各事項は、それぞれの分野の研究者にとっては周知の事項が多いが、本稿において富田（あるいは間接的に勝海舟）に焦点をあてて考察することによって、既存研究の事実誤認を指摘し、これまで等閑視されていた事項が浮かび上がらせる。本稿は、こうしたことを通して、従来の研究を連結する役割、すなわち、これまでの狭い専門分野に焦点をあてた研究をつなぐネットワーク的役割を果たすことを大きな目的にしている。

第1章 アメリカ・プロテスタントと日本での宣教拡大活動

1 アメリカ・プロテスタントと海外伝道

18世紀後半から19世紀前半にかけて欧米のキリスト教世界（プロテスタント世界）では、キリスト教の既成宗教化に対する反発から、信仰復興運動（リバイバル）が起こった¹⁾。この時期のプロテスタントの海外伝道も、この信仰復興運動の影響を受けて新しい展開を見せた。また、世界史的に見ると、この時期は、欧米（キリスト教世界）が非キリスト教世界に対する軍事的・政治的（外交的）優位性を確立し、経済的利得と経済的優位性を確保する時期であり、キリスト教の海外伝道は、こうした状況に呼応し、キリスト教それ自体の宣教とともに、欧米の価値観を広める文化的活動の役割（軍事的・政治的（外交的）側面を後方から支援する役割）を果たすこととなったのである²⁾。すなわち、経済的利得・優位性の確保に向けた軍事・政治（外交）・キリスト教伝道の三位一体の展開である。

1792年、イギリスでは、プロテスタント福音主義教派による海外伝道のため連合体組織として「ロンドン宣教会（London Missionary Society）」がつくられた³⁾。この非教派主義の海外伝道の考えは、アメリカのオランダ改革派、長老派、組合派（会衆派）に継承され⁴⁾、1810年、こ

1) 『東北学院百年史』, p.11及び土肥（1980）, p.10

2) 土肥（1980）, p.10及び大江（2000）, p.152を参照のこと。

3) このパラグラフは、本多（1991）のpp.22-98を中心に整理したものであるが、各機関の名称は、塩野（2005）等に従い、一般的に用いられている英語及び日本語訳に改めている。

4) 土肥（1980）を参考にしてアメリカ・プロテスタント諸教会について簡単に整理すると次のようになる（pp.27-29）。すなわち、「改革派（オランダ系・ドイツ系）」は、カルヴァン主義に立つ教会で、神の主権を重んじ、神の言葉によって改革された教会であろうとする教会であり、この考え方の教会は、スコットランド・イングランドでは「長老派」と呼ばれていた。イギリス国教会（イギリス聖公会）

の3つ派の外国伝道機関として「アメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions)」が組織される。アメリカン・ボードは、国内のチェロキー等のネイティブ・アメリカンに対する伝道を手始めに、国外ではマルタ、シリア、トルコでの伝道、ハワイ諸島での伝道に続き、タイや清国等での伝道も行っていたが⁵⁾、社会意識の変化、教会組織の変更、世界情勢の変化等から、1831年には、「長老教会外国伝道局 (Board of Foreign Missions of the Presbyterian Church in the USA)」, 翌1832年には、「オランダ改革派教会外国伝道局 (Board of Foreign Missions of the Reformed Dutch Church)」がつくられる状況となった。一方、ドイツ改革派教会は⁶⁾、1838年になって外国伝道局 (the Foreign Missionary Board of the German Reformed Church in the United States) を設置し、同年、アメリカン・ボードにも参加する状況になっていた。アメリカのプロテスタント福音主義各派の外国伝道局の設置は、非教派主義の海外宣教の中で、自派の独自色を出そうとする試みであったが、1857年、オランダ改革派外国伝道局は、アメリカン・ボードから分離独立し⁷⁾、他派も、1870年までには分離独立し、1870年以降、アメリカン・ボードは、事実上、組合派 (会衆派) の外国伝道機関となっていく。

2 アメリカ・プロテスタント諸教会による拡大宣教活動

幕末の軍事・政治 (外交) ・キリスト教伝道の三位一体の展開は、「ペリー提督の軍事による日本の開国, アメリカ総領事ハリスの外交による日米通商の開始, ヘボン (長老派) ・フルベッキ (オランダ改革派) 等による知識の開窓」として要約できるであろう⁸⁾。

ペリーの日本開国の動機は、日本との通商、難破した捕鯨船員の扱いの改善、カリフォルニア・チャイナ間の太平洋航路の寄港地等である⁹⁾。しかしながら、これまで主目的については研究者間で意見の相違があったが、近年では、「明白な神意 (Manifest Destiny)」の信念も有力な考え方になっている (三谷 (2003), pp.82-93)。すなわち、アメリカは、19世紀中葉のオレゴン紛争

は、イギリスの宗教改革の中で生まれたが、アメリカで新たな活動は「アメリカ聖公会 (監督派教会)」によって行われていた。また、「組合派 (会衆派)」は、イギリス国教会や長老派と対峙しながらも、カルヴァン主義の伝統を継承し、アメリカのニューイングランドの主要教派となっていたのである。

- 5) 塩野 (2005) には、これらの地域を文明別・宗教別に類型化し分析を行っている (p.41)。
- 6) 1776年頃のペンシルヴェニア州の白人移民の3分の1がドイツ系であり、そのほぼ半数の宗教的バックグラウンドが「改革派」であったことから、ドイツ系移民を改革派教会の翼のもとに統合し組織化する動きが現れ、4人の牧師と28人の長老 (10数か所の教会の代表) から組織された「中会 (Coetus)」を「オランダ」の改革派国教会の監督のもとに置き、ドイツ改革派教会がスタートする (『東北学院百年史』, pp.8-10)。
- 7) Corwin (1902) では、1832～1857年をアメリカン・ボードとオランダ改革派が協働 (co-operation) した期間と位置付けている (pp.241-243)。1857年のアメリカン・ボードからの分離に際して、清国の厦門 (Amoy) やインドに派遣されていた宣教師等もオランダ改革派に転籍し、翌年には不動産等の返却もされている (p.246)。なお、後述のブラウンも、一時期、(人員の関係で派遣はされなかったが) アメリカン・ボードの宣教団に加わっていた (p.344)。
- 8) 片沢 (1957) は、グリフィス (W.E. Griffis) からの引用として、これと同じ趣旨を記載している (p.14)。これに該当するグリフィスの文献は未確認のままである。
- 9) ペリーの日本開国の関するこの3つの動機は、例えば、*The Illustrated London News*の1853年5月7日号の特集記事 '*The United States Expedition to Japan*' の中にも掲載されている。

の解決、テキサス併合、カリフォルニア編入等により、太平洋に長大な海岸線をもつ国家となった。アメリカの急速な領土の拡大・膨張は、「明白な神意」の結果であり、さらに、太平洋を越えチャイナに進む信念にもなったのである。日本は、チャイナへの道の経由地(とくに石炭補給地)であった。ペリー自身も、アメリカ聖公会(監督派教会)に属し¹⁰⁾、「信仰厚く、航海中も毎日聖書を読むのを欠かさず、日本開国の命をもって、日本宣教の門戸を開く機会となる光荣ある使命¹¹⁾」として受け取っていたのである。結果は、第1次日本遠征(1853年7月(嘉永6年5・6月)につづく、第2次日本遠征における日米和親条約の調印(1854年3月31日(嘉永7年3月3日))であった。

ハリスは、1856年8月、下田に着任し、総領事館(柿崎村・玉泉寺)を開設し、日米修好通商条約交渉に着手した。翌1857年12月には、江戸に入府し¹²⁾、將軍徳川家定に拝謁し、国書を呈し、1858年7月29日(安政5年6月19日)には、日米修好通商条約が調印されるに至った。キリスト教的には、この条約の第8条が重要である。すなわち、

「日本に在る亞米利加人自ら其の國の宗法を念し禮拜堂を居留場の内に置も障りなし
並に其建物を破壊し亞米利加人宗法を自ら念するを妨る事なし・・・・

日本長崎役所に於て踏繪の仕來は既に廢せり

American in Japan shall be allowed the free exercise of their religion, and for this purpose shall have the right, to erect suitable places of worship. No injury shall be done to such buildings, nor any insult be offered to the religious worship of the Americans.・・・・

The government of Japan has already abolished the practice of trampling on religious emblems.」

である¹³⁾。この第8条に対して、「幕府が何ら難色を示さず疑問ももたなかった」ことは、「聖公会会員のハリスにとって非常な驚きであり。感謝であった」¹⁴⁾。これにより、「宣教の拡大活動」すなわち、医療・英語教育・社会教育を通じて、居留地に出入りする日本人とキリスト教との関わりができるのである¹⁵⁾。この視点から、ハリスは、上海の聖公会宣教師に対して

「日本宣教の将来の成功は派遣される初代宣教師の性行、態度、人格によるものである。
・・・学校を興し、英語を教え、貧民に施療することなどが有益である。従って日米通商条約は

10) Morrison (1967) のp.3及びp.287 (日本語訳)。Pineau (1868) のp.490 (日本語訳)。

11) 海老沢 (1959), p.32による。なお、ペリーの第1次日本遠征(1853年7月8日、浦賀来航)の最初の日曜日(7月10日)の朝10時30分に、旗艦サスケハナにおいて、従軍牧師ジョーンズによって日本来航後の最初のキリスト教の正式の礼拝が執り行われた(海老沢 (1959), pp.32-33及びMorrison (1967) のp.149 (日本語訳)。礼拝開始時間は、Williams (1910) のp.98 (日本語訳) による。)

12) 將軍拝謁の前日が日曜日であったことから、ハリスは、通訳のヒュースケンとともに、アメリカ聖公会の儀式に従った礼拝を行っている(海老沢 (1959), pp.35-37)。

13) 『舊條約彙纂 第一卷第一部』による。

14) 『指路教会の百年の歩み』, p.20。

15) アメリカン・ボードの中には、「本来の目的-福音宣教」に加え、「教育」、「医療活動」、「社会活動」を「宣教の拡大活動」として捉える考え方があることから(塩野 (2005), p.7), このハリス書簡もこれとほぼ同じ立場にあるものと見てよいであろう。なお、塩野 (2005) では、「伝道」活動と「宣教」活動の違いはあいまいで、両者を明確に区別することは困難であるが、前者を直接的なキリスト教活動、後者を教育、医療等の広義のキリスト教的活動としている (p.11)。

貿易の開始ばかりでなく、キリスト教の開教第一歩である」

と書簡を送っているのである¹⁶⁾。

日米修好通商条約が調印された2か月後の9月、長崎に碇泊中のアメリカ商船ミネソタ号に、日本来航時のペリー艦隊の首席通訳官をつとめたS.W.ウィリアムズ、上海・水兵館付き司祭の「アメリカ聖公会（監督派教会）」のE.W.サイル、アメリカ海軍（ポーハタン号）従軍牧師の「オランダ改革派」のH.C.ウッドが集まり、日本宣教問題を論じた結果、3人の連署で、アメリカ聖公会、アメリカ長老教会、アメリカのオランダ改革派教会の外国伝道局に対して宣教師の日本への派遣要請するに至った¹⁷⁾。S.W.ウィリアムズは、「アメリカン・ボード」から清国に派遣された宣教師（日本漂流民を乗せたモリソン号乗船や通訳として2度にわたるペリー艦隊乗船の経験をもつ宣教師）であったが、本来は、「長老派」の宣教師であった¹⁸⁾（すでに述べたように、長老派やオランダ改革派は、アメリカン・ボードに加わりながら、1830年代初めに、それぞれの外国伝道局も設置しているのである）。

これに応じて、アメリカ聖公会は、1859年5月に清国派遣宣教師J.リギンスを、さらに、6月には清国派遣宣教師C.M. ウィリアムズを長崎に送った¹⁹⁾。この1859年は、アメリカ聖公会にとっては、10年来の懸案事項（イギリス聖公会との間の清国ミッションの管轄権）も、イギリス国教会（聖公会）が浙江省、アメリカ聖公会が江蘇省（上海を含む）で決着した年でもあった²⁰⁾。同年10月には、長老派のヘボンが宣教師として夫人とともに横浜に到着し、11月には、オランダ改革派のブラウン夫妻とシモンズ夫妻が横浜に、新婚のフルベッキ夫妻が長崎に到着した²¹⁾。Cary (1909) の評価では、彼らは「日本におけるプロテスタント宣教師団の活動開始の榮譽を担う6名の宣教師（日本語訳、p.71）」であった。さらに、翌1860年4月にはアメリカバプテスト自由伝道協会からゴープル夫妻も横浜に到着する²²⁾。中国では、外交で列強を制したイギリスがキリスト教宣教でも主

16) 『指路教会の百年の歩み』, p.20。

17) 各人の身分・宗派等は、『東北学院百年史』, p.52, 『指路教会の百年の歩み』, p.21, 『ヘボン在日書簡全集』, p.19及び杉井 (1984), p.133により整理した。ただし、杉井 (1984) では、S.W.ウィリアムズがアメリカ聖公会（監督派教会）、E.W.サイルが長老派とし、海老沢・大内 (1970) も、S.W.ウィリアムズを「監督教会宣教師 (p.148)」としている。しかしながら、アメリカ聖公会との関連でC.M. ウィリアムズを研究した大江 (2000) では、S.W.ウィリアムズを「元アメリカン・ボード派遣宣教師 (p.133)」, E.W.サイルを「米国聖公会派清宣教師 (p.137)」としている。なお、本文中の「3人の連署で」は、『ヘボン在日書簡全集』, p.19及び『ヘボン書簡集』, p.4に依拠するが、『東北学院百年史』, p.53は、「アメリカン・ボード」から派遣されたS.W.ウィリアムズは本来の所属である「長老派」の外国伝道局に、また他の2人はそれぞれの海外伝道組織に要請したとの立場をとっている。

18) S.W.ウィリアムズが「アメリカン・ボード」から派遣された宣教師であることは、上記の大江 (2000) のほか、『東北学院百年史』, p.39, 『ヘボン在日書簡全集』, p.19及び海老沢 (1959), p.23による。

19) アメリカの各教会（各派）が日本派遣した宣教師等の人名・日本到着日等については、海老沢 (1959), pp.43-64, 杉井 (1984) p.133及び『指路教会の百年の歩み』, p.21を参照のこと。

20) 大江 (2000), p.122。

21) フルベッキについては、次節を参照のこと。また、宣教の拡大活動（英語教育）開始直後から明治維新までの間のフルベッキ以外のアメリカ人宣教師等の活動については、海老沢 (1959), pp.43-60及び杉井 (1984), pp.134-136を参照のこと。

22) 川島 (1988), pp.11-12による。ゴープルには、例えば、脅迫罪による収監、刑務所での皮靴の製法の習得と横浜での皮靴製法の伝授、日本伝道の予備調査のために海兵隊員となりペリー艦隊に乗船、

導権を握ったが、このように日本では、対日外交で主導権を握るアメリカが宣教をもリードしたのである²³⁾。

J.リギンスは、病気のために10か月後に帰国するものの、ヘボン (J.C.ヘップバーン, James Curtis Hepburn) 等は、その後も日本にとどまり大きな活躍をする。すなわち、ヘボンは、西洋医学による治療と医学教育の推進、キリスト教的医療社会事業の展開、ヘボン式ローマ字の考案、『和英語林集成』の刊行等の活動を展開し、S.R.ブラウンも、『日英会話篇』の刊行や福音書等の翻訳を行い、(明治5年のキリスト教禁令高札の撤去以降は) 本来のキリスト教宣教活動の中心人物となっている。

さらに「宣教の拡大活動(教育)」に関連して言えば、現在の立教大学は、アメリカ聖公会のC.M.ウィリアムズが開設した私塾に始まる。長老派のヘボンは、英学塾を開き、これをオランダ改革派のバラ(1862年、横浜に着任)が継承した。その後、幾多の経緯を経て、これが明治学院の創立につながる(ヘボンは、明治22年に明治学院初代総理、フルベッキは、明治21年に明治学院理事員会議長となる)。幕末最初の「宣教の拡大活動(教育)」は、最終的には、このように結実するが、こうした中であって、宣教の拡大活動開始直後から明治維新までの間に、明治政府を担う人材の育成やアメリカへの留学生派遣の観点から最も大きな影響を及ぼしたのは、長崎時代のフルベッキの活動であった。

3 フルベッキ

フルベッキは、1830年1月23日、オランダのユトレヒト近郊のザイスト(Zeist)において誕生した。もともとの名前は、「Guido Herman Fridolin Verbeek」であった(Griffis (1900), p.33)。その後、アメリカに移住し、アメリカ流に「Verbeck (ヴァーベック)」と改めていたが²⁴⁾、日本では、「オランダ語音によって、フルベッキと呼ばれて」いたのである²⁵⁾。

ここでザイストでのいくつかのエピソードを紹介する²⁶⁾。フルベッキの父は、ドイツ生まれではあったが、父系統は、オランダ系であった。親戚の多くもルター派の信仰をもっていたが、当時、ザイストには、まだルター派の教会が無かったことから、フルベッキの一族はモラビア派の

人力車の発明、アメリカへの帰国途中における岩倉使節団との遭遇、バラとの間の領事裁判問題等、数多くのエピソードが残されている(詳細は、川島(1988)を参照のこと)。

23) 大江(2000), p.153による。なお、この時期のアメリカ以外のキリスト教活動としては、ローマ・カトリック教会による再布教とハリストス教会(ロシア正教)による箱館での活動があげられる(『東北学院百年史』, p.57及び海老沢・大内(1970), pp.120-122)。

24) Griffis (1900) のp.33とp.50による。フルベッキのミドル・ネームは、Griffis (1900) やCorwin (1902) の「Fridolin」に従っているが、『フルベッキ書簡集』の「略伝」では、何故か、「Friedrin」と表記されている(p.9)。

25) このフレーズは、『フルベッキ書簡集』, p.9からの引用であるが、「Verbeck」と改めた経緯は、Griffis (1900), p.50が詳しい。

26) この節のフルベッキに関するエピソードは、Griffis (1900), pp.29-68による。

人々とともに礼拝を行い、フルベッキも、ザイストのモラビア派の学校に進むことになる²⁷⁾。モラビア派の人々は、1776年にドイツからオランダのザイストへ移民した人々であり、19世紀前半でも、そのほとんどがドイツ語を話していた。このため、フルベッキが聴きとるドイツ語も中途半端なものではなく、ドイツ語は、フルベッキにとってはheart languageであった。フルベッキは、モラビア派の学校では、オランダ語とドイツ語は当然のこととして、英語とフランス語も流暢に正確に使えるように教育されていく。これが、後の日本での教育活動の強みになる。

フルベッキは、ザイストのモラビア派の学校からユトレヒトのPolytechnic Instituteに進んだ後、ザイストの鋳物工場での短期の職務経験を経て、1852年9月2日にオランダを離れ、ニューヨークに渡る。翌年9月には、アーカンソー州ヘレナで、架橋工事の計画・作図・構造計算に従事するが、炎暑と激務で病気になる。これが、彼にとっての大きな転換点となる。すなわち、フルベッキは、病床において、もし病気を快復できたなら、その生涯を宣教に捧げると、神に誓う。そして、1856年には、ニューヨーク州のオーバン神学校に入学する。このオーバン神学校は、設立時から長老派とも関係が深く²⁸⁾、1937年には、「世界大恐慌」に起因する財政上の理由からコロンビア大学に隣接するユニオン神学校（本来的には長老派の聖職者養成のための神学校）敷地に移転し、その後は、ユニオン神学校とともに、長老派の財政的支援を受け運営されるに至っている。

このオーバン神学校近くのオワスコ・アウトレットには、S.R.ブラウンが牧師をつとめるオランダ改革派教会（サンド・ビーチ教会）があり、やがて、フルベッキも、この教会と関わりをもつようになる。ブラウンは、長年、清国でのキリスト教伝道に従事していたが、夫人の病気のために帰国し、この時期に教会の牧師をつとめていたのである。たまたま、この教会には、後にフルベッキ夫人となるマリア・マニオンやフェリス女学院の創立者となるメアリー・E・ギダーもいた。

前節で紹介したように、1858年9月、長崎に碇泊中のアメリカ商船ミネソタ号から、S.W.ウィリアムズ、E.W.サイル、H.C.ウッズの3名から、日本への宣教師派遣の要請の書簡が各教会の外

27) Corwin, Dubbs and Hamilton (1894) の『アメリカのオランダ改革派、ドイツ改革派及びモラビア派教会史』によれば、1516年、スイスでプロテスタンティズムが勃興したが、改革派はその中で生れた分派であった (p.1)。ルター派の教会とは、教義が異なるほか、長老組織による教会制度をとり、カルビンの指導の下で組織され発展してきた。「改革派」という名前は、主としてヨーロッパ大陸の教会に限定された用法であった。イギリスでは、宗教的迫害を逃れてスイスに渡った者もいたが、その中でジョン・ノックスが、長老主義の原理をスコットランドに持ち帰り、これが長老派の始まりとなった。他方、モラビア派も、多くのプロテスタント教会と同様に、個人的な経験的な信仰の復興に原点があった (p.431)。ルターの考えが、ボヘミアやモラビアの福音主義の教会に伝わると、ドイツやスイスの改革者たちとも同調するようになり、その教義も、ウィッテンベルグ、ジュネーブ、ストラズブルグで受け入れられるようになったのである (p.432)。なお、蛇足ながら付言すると、この著書のドイツ改革派教会史の外国伝道に関する記述のほとんどは、「東北学院」に関するものである (pp.408-409)。

28) 岡部 (2015) に従えば、オーバン神学校は、第一長老派教会牧師D.C.ランシングの呼びかけを契機に、会衆派(組合派)が発足させた神学校であったが、Corwin (1869) のp.390やCorwin (1879) のp.145では、フルベッキを「オーバンの長老派の神学校の生徒」と表現しているのである。蛇足ながら、出村剛東北学院第4代院長 (1946～1949) も、1915年のオーバン神学校卒業である (出村が院長を務めた時の東北学院理事長は、杉山元治郎と鈴木義男である)。

国伝道局に出された。書簡を受理したオランダ改革派では、宣教医1名と聖職者2名の派遣（3名のうち1名は、「アメリカナイズされたオランダ人」とすること）を決定した。フルベッキは、これをオーバンの第一長老派教会牧師から聞き、これに志願した。

フルベッキは、1859年、オーバン神学校卒業とともに、第二長老派教会で「按手礼」をうけ、長老派教会の聖職者となるが、その翌日（3月23日）には、オランダ改革派教会へ転籍する²⁹⁾。4月には、フィラデルフィアでマリア・マニオンと結婚式を挙げ、新婚のフルベッキ夫妻は、5月7日に、オランダ改革派のブラウン夫妻や（宣教師としての）シモンズ夫妻とともに、日本に向けニューヨークを出帆する。

1859年11月、ブラウン夫妻とシモンズ夫妻は横浜に到着し、フルベッキ夫妻は長崎に到着する。その後の数年間、自分自身の日本語の修得や日本人への英語教育等に精力をそそぐ。1863年8月（文久3年6月）、イギリス艦隊の鹿児島砲撃事件が起こり、1864年9月（元治元年8月）、英仏蘭米の4か国艦隊の下関砲撃事件が起こるが、1864年8月には、長崎奉行管轄の英語所（後の「済美館」）の校長（兼）教師となっている（週5日・1日2時間の授業で年1,200ドルの報酬を受けることから、派遣宣教師から自給宣教師へ身分を切り替えることになる）³⁰⁾。

1866年には、佐賀藩が長崎に開いた「致遠館」の教師も務めることになるが、ここでは、大隈重信や副島種臣をはじめとして、後に明治政府の要職に就くことになる多くの若手の教育にも関係する。フルベッキは、長崎で堪能な語学（英、蘭、独、仏）の教授に加え、政治、天文、科学、機関、築城、兵事等も教授したほか、蒸気船の購入等も依頼されていたのである（杉井（1984）、pp.140-141）。このためか、高杉晋作、坂本龍馬、木戸孝充、伊藤博文、井上馨、小松帯刀、西郷隆盛兄弟等も、フルベッキのところに出入りしていたのである（『フルベッキ書簡集』の「解説」の項（p.372）を参照のこと）。

『フルベッキ書簡集』の「年譜」によれば、フルベッキは、明治2年には、東京に出て開成校教師や明治政府顧問となり、明治3年には、（開成校を改称した）大学南校教頭に推薦されている。明治7年ごろからは、明治政府との関わりも弱くなり、明治10年には、明治政府の役職から完全に外れるが、この間の功労が認められ勲三等旭日章が授与される。明治20年、明治学院の設立とともに、教授に就任し、翌年、明治学院理事員会議長となっている。

フルベッキの略歴・エピソードの紹介が、いくぶん長くなったが、本稿との関係は、フルベッキが長崎滞在中にアメリカ留学の労をとった横井佐平太・大平兄弟や日下部太郎と富田鐵之助・高木三郎・勝小鹿とがニュージャージー州ニューブランズウィックにおいて濃密な交友関係をもつ点にある。

29) 『フルベッキ書簡集』, p.11による。Griffis(1900)では、第二長老派教会においてevangelistに任じられ、翌日、オランダ改革派教会の一員として受け入れられたという表現がなされている（p.63）。Corwin（1902）のp.876やCorwin（1922）のp.570も、これとほぼ同文である。

30) 『フルベッキ書簡集』のp.91では、「校長」であるが、杉井（1984）のp.140では、「教頭」としている。英語所の俸給は、Corwin（1902）のp.877及び『フルベッキ書簡集』のp.92による。また、Corwin（1902）によれば、フルベッキは、1878年まで自給宣教師（self-supporting missionary）であった。

『フルベッキ書簡集』の「フルベッキ略伝」の項には (p.12), 「明治になって, 岩倉具視の二子, 旭麿 (岩倉具定), 龍麿 (具経), 勝海州の長男, 勝小鹿, 薩摩藩, 長州藩など米国に留学するものほとんどすべて, フルベッキの手を煩わした」とあるように, アメリカ留学生の多くは, 確かにフルベッキの手によるものである。例えば, 岩倉具視の二子である旭麿 (岩倉具定)・龍麿 (岩倉具経) の兄弟は, 1868年に長崎でフルベッキに学び, 1870年3月にフルベッキの紹介状をもって渡米し, ニューブランズウィックで学んでいる。岩倉兄弟に同行した折田彦市・服部一三・山本重輔についても, ほぼ同様である。また, 1870年9月には, 華頂宮博経と同行者の柳本直太郎・土倉正彦のほか, 白峰駿馬, 江木高遠, 松本壮一郎, 目賀田種太郎, 長谷川雉郎, 香月桂五郎 (経五郎), 石橋宗九郎 (家九郎) のアメリカ留学の紹介の労もとっているのである³¹⁾。

しかしながら, 勝小鹿 (従って, 富田鐵之助・高木三郎) の留学は, 「フルベッキ略伝」のいう「明治になって」からではなく, 慶応3年の留学である。また, 「フルベッキの手を煩わした」こともなく, フルベッキとは別ルートからの留学である可能性が高い。しかしながら, この3人は, アメリカ留学中にフルベッキが留学の世話をした日本人留学生と交流を深め, 人的ネットワークを築いていくのである。

第2章 ニュージャージー州ニューブランズウィック

1 ニューブランズウィック

富田鐵之助と高木三郎は, 明治元年12月19日 (1869年1月31日), 横浜からチャイナ号で再びアメリカに渡り, 翌年2月12日 (3月25日) にニューヨークを経由して, ニュージャージー州ニューブランズウィックに至っている³²⁾。ここでは, 畠山義成の英文の手紙や松本壮一郎の「亜行日記」から判断すると³³⁾, 当時でもニューヨークから汽車で1時間半程度のところにあった。

このニュージャージー州ニューブランズウィック (New Brunswick) には, ラトガース大学 (Rutgers University, 当時の名称は, Rutgers College), その附属教育機関のグラマースクール (Grammar School), さらに上級教育機関である神学校 (New Brunswick Theological Seminary) があり, 幕末から明治期には, 多くの日本人留学生を受け入れていたのである³⁴⁾。ラ

31) 『フルベッキ書簡集』の「年譜」の項 (pp.393-395) による。ただし, 「年譜」において姓のみが記載され名前の記載がない場合は, 石附 (1992) の巻末の「明治第1期 (元~7年) の海外留学」及び犬塚 (1987a) の「明治維新海外留学生人名一覧」によって補正・修正した。ただし, 「年譜」の「白根, 高藤」や「長谷川喜四郎, 勝木」は, それぞれ, 本文にあるように「白峰駿馬, 江木高遠」や「長谷川雉郎, 香月桂五郎 (経五郎)」とした。

32) 吉野 (1974) は, 『高木三郎翁小傳』が「ボストンに赴き直ちにニウブルンズウキッキに至りぬ (p.34)」としていることを踏襲し, 「ボストンを経てニウブルンズウキッキに至り (p.24)」としている。しかしながら, 小鹿のいるニューブランズウィックは, ニューヨークの南西60キロに位置し, 当時, 汽車で1時間半のところにあることから, ボストンを経由する必要性は, まったくない。

33) 畠山義成の英文の手紙 (日付・宛先は不明) は, 犬塚 (1987b) に採録されている。また, 松本壮一郎の「亜行日記」は, 明治3 (1870) 年の渡米時の日記であり, 瀬戸口 (2010) に所収されている。

34) Griffis (1916) には, (短期滞在中も含めた) ラトガースに関係した47名の日本人留学生の名前が記載されている (pp.21-27)。

トガース・カレッジは、前身のクイーンズ・カレッジの創立以来（1766年にアメリカで8番目の大学として創立以来）、オランダ改革派教会の影響下にあった大学であるが、第2次世界大戦後、復員兵援護法（the GI Bill）の趣旨に従い多くの有能な学生に門戸を開くために、私立大学からニュージャージーの州立大学に転換したのである。

ところで、最初にこのニューブランズウィックに来た日本人留学生は、慶應2（1866）年秋の横井佐平太・大平兄弟である。高橋（2014a）でも紹介したように、富田は、最初の渡米から半年後の慶應4年1月3日（1868年1月27日）に「江戸芝愛宕下 仙台藩中屋敷」の大童信太夫宛に書状を出している。この書状は、「合衆国ニーセルシー・ニープリンズウキキ」から発信されたものであるが、慶應4年12月27日夜にボストンを引き払い、翌日にニープリンズウキキへ着いたこと³⁵⁾、ここはニューヨークから「亜里三十里程南方」にあること³⁶⁾、横井平四郎（小楠）の子息2名と越前藩士1名がいること、横浜在住のバラもニープリンズウキキで学んだこと等が書かれていたのである³⁷⁾。この横井佐平太・大平兄弟については、後で詳述する。

横井兄弟の次にニューブランズウィックに居住したのは、慶應3（1867）年の日下部太郎（越前（福井）藩士）である。日下部は、（幕府の海外渡航解禁後の）福井藩からの正式の留学生である。慶應3年7月13日（1867年8月12日）にニューヨークに着き、9月の新学期からラトガース・カレッジで学んでいる（高木（2006））。日下部について、前述の富田の書状には、「肥藩横井平四郎倅兩人越藩一人一昨年分・・・」と記載されているが、日下部は、「一昨年」よりではなく、実際には半年前からニューブランズウィックにいたのである。

3番手は、上述の1867年12月の勝小鹿・富田鐵之助・高木三郎である。しかしながら、富田鐵之助と高木三郎は、すでに述べたように、日本国内の急変を憂慮し、横井小楠の甥の横井佐平太・大平兄弟に小鹿の後見を託し帰国する。すなわち、慶應4年6月20日（1868年8月8日）、ニューヨークを出航し、サンフランシスコ・香港経由で、明治元年11月17日（1869年12月30日）に横浜に着く。しかし、海舟に諭され、横浜から再びアメリカに渡り、明治2（1869）年2月にニューブランズウィックに戻る。

35) 当時のニューヨークとボストン間の所要時間は、10時間程度である。例えば、「仁礼景範日記」（犬塚（1985）に所収）の慶應2年10月20日条では、朝8時にニューヨーク発、夕方6時ボストン着、その翌日は、昼2時にボストン発、12時にニューヨーク着の旨がある。

36) 大童信太夫宛の書状（慶應4年1月3日（1868年1月27日））の「亜里三十里程南方」は、ニューブランズウィックがニューヨークの南30マイル（およそ48キロ）の意味であるが、実際Google等でルート検索を行うと、南西にはほぼ60キロになる。しかしながら、巖（2008）では、なぜか、「ニューヨークから西南へ20キロほど（p.25）」と記している。

37) 実際、バラは1857年のラトガース・カレッジの卒業である（Griffis(1916), p.19）。福澤諭吉は、前年9月、大童の痔疾を心配し加療に専念されたい旨の書状を大童宛に出し（『福澤諭吉書簡集 第1巻』, p.49に所収）、大童信太夫は、慶應2年6月3日、横浜の（長老派の宣教医）ヘボンによって、当時としては極めて珍しい痔疾の手術を受けている（坂井（2000））。仙台藩江戸留守居役の大童信太夫は、富田の従者・通弁修行の名目で、高橋是清と鈴木知雄をサンフランシスコまで同行させたが、年少の2人は、それに先立ち慶応年間に、横浜において、当初はヘボン夫人に、後にはバラ夫人に英語を学んでいたのである（『高橋是清自傳』, p.19）。こうしたこともあって、大童は、当時の横浜の状況やオランダ改革派の宣教師のバラの名前を知っていたのである。

このときの再会の様子について、『仙臺先哲偉人録』は、「翌年二月十二日朝紐育着。汽車にてニューフランスウーキに至りて、小麓、伊勢、沼川、日下部、吉田、大原、長江、松村、杉浦等に會つて互ひに無事を祝した (p.389)」と記している³⁸⁾。この小麓は「勝小鹿 (かつころく)」、伊勢 (佐太郎) は「横井佐平太」、沼川 (三郎) は「横井大平」のことであり、また、吉田、松村、杉浦は、吉田清成 (変名は永井五百介)、松村淳蔵、杉浦弘蔵 (本名：畠山義成) のことである³⁹⁾。

畠山義成・吉田清成・松村淳蔵のニューブランズウィック来着は、4番手であり、勝小鹿・富田鐵之助・高木三郎よりも、半年ほど遅れる。彼らは、いずれも (幕府の海外渡航解禁前の) 慶応元 (1865) 年に薩摩藩第1次留学生としてイギリスに渡った後、アメリカに渡り、新興教団の「ハリス教団」のコロニーにいた。このコロニーで暮らす中、この教団の教義に疑問を持ち始めるようになる。そして畠山義成は、1868年6月、ニューヨークに出てフォッグ (Fogg) に面談したのち、ラトガースの横井兄弟と日下部に会い学校の様子を懇切に教えられ、後述のJ.M.フェリスとも相談の結果、ラトガースで学ぶことを決めたのである。すなわち、1868年6月26日付の畠山義成から花房義質宛の書状が示すように、

「吉田 (種子島敬輔)、工藤 (湯地定基) 同道ニ而新克約 (ニューヨーク) 江參越シ金許Mr. Fogg 江両氏ヨリ談判ニ及ヒ・・・

翌十九日爰許江參着當学校之形勢も委細横井両生并日野部 (ママ) 等々承り三兄も至而懇切ニ何角之事教ヘラレ・・・

夫々翌々二十一日又々新克約江參越Dr. Ferris ト云人物江見舞teacher之世話ナド相頼申候処、・・・New Brunswick 滞学ト決定シ・・・」

である (この書状は犬塚 (1990) に採録)。永井五百介 (吉田清成) も6月28日に来着し、松村淳蔵は、これよりも少し遅れる (犬塚 (1987a), p.222)。

上のように、薩摩藩第1次留学生の畠山は、第2次留学生の種子島と湯地を介して、フォッグやオランダ改革派教会のフェリスと面会し、日本への帰国も含めて今後の対処を相談しているが、この事実は、アメリカ留学を目的とした第2次留学生が、当初からオランダ改革派と密接な関係をもって留学したことを示唆するものでもある。

第2次留学生の大原令之助 (吉原重俊) は、横浜でオランダ改革派のブラウンに英語を学んでいた (吉原 (2013))。木藤市助もここで英語の手ほどきを受け、最年長の仁礼景範は、第2次留

38) 松村淳蔵の本名は、市来勘十郎であるが、明治以後も松村淳蔵を名乗る。また、吉田清成は、当時、永井五百介 (助) の変名を使っていたので、『仙臺先哲偉人録』の「長江」は、「永井」と混同している可能性がある。「大原」は、大原令之助 (本名：吉原重俊、後の日本銀行初代総裁) の可能性もあるが、ニューブランズウィックでの一時滞在はともかくも、長期滞在は考えにくい。石附 (1992) の「幕末の海外留学生」では、多数の者が「NBW (ニューブランズウィック)」に滞在したとしているが、本稿の考察に従えば、この点は信頼性に欠ける。また、石附 (1992) では、吉原重俊について「NBW」と注記されているが、大原令之助と吉原重俊とを別人として扱っており、この点も信頼性に欠ける。

39) 後述するように、再会した横井大平は、この年の7月に日本へ帰国し、秋には横井佐平太と松村淳蔵は、アナポリスの海軍兵学校に入学する。

学生の第1陣として、フルベッキの紹介状を携えて渡米する（犬塚（1987a），pp.134-161）。慶応2年11月（1866年12月），仁礼景範・江夏蘇助・湯地定基・種子島敬輔・吉原重俊・木藤市助の6人は、マサチューセッツ州ボストンの西90キロにあるモンソン・アカデミーに入学する。モンソン・アカデミーは、ブラウンが卒業した中等教育のための学校であった。薩摩藩第2次留学生の中では、吉原が比較的語学が優れてはいたが、吉原以外は、第1次留学生と異なり「武芸に秀でた反面、彼らは全くといってよいほど語学力がなかった（犬塚（1987a），p.143）」のである。

第2次留学生は、慶応2（1866）年3月26日に長崎を出航し、9月27日ニューヨークに到着している。イギリス経由であったことから、9月7日から10日間ほどロンドンに滞在し、第1次留学生の畠山義成・吉田清成・森有禮・町田久成等と再会し交遊を深めてからのアメリカ到着であった（犬塚（1985）に採録された「仁礼景範航米日記」の慶應2年9月7日～16日の条による）。従って、畠山や吉田は、すでに、この時点において第2次留学生の進学先やオランダ改革派教会との関係を把握していたと思われるのである。この後、第1次留学生はイギリスからアメリカに留学先を変更するが、アメリカでは相互の書簡の往復によって国内外の情報を共有する状況になったと思われるのである⁴⁰。こうしたことが、第1次留学生の畠山が、第2次留学生の種子島と湯地を介してオランダ改革派教会のフェリスと面会することに繋がっていくのである。

ニューブランズウィックに居住する日本人留学生の概略は、以上の通りであるが、その下宿先は、次のとおりである。

横井佐平太・大平兄弟の下宿先は、この分野の研究者にはよく知られているように、

「チャーチ ストリート 62」

のヴァン・アースデル夫人宅である。高木（2006）の調査では、ここに、日下部も、また下宿していたのである⁴¹。

富田鐵之助は、慶應4年1月26日（1868年2月19日）付の書状の中で、日本国内の激動に驚愕し、仙台藩江戸留守居役の大童信太夫に帰国の可否を問い合わせているが、この書状には返信用の小さな紙片（住所メモ）を添えられていたのである。すなわち、

「Isaac Bartle
N° 58 Church St.
New Brunswick
New Jersey 』

40) 例えば、次のような重要事項はアメリカ在留の第1次留学生にも共有されたものと推測される。すなわち、1867年6月21日、第2次留学生の木藤市助が自殺し、その葬儀が、横浜の大火にあいアメリカに一時帰国中のブラウンによって執り行われたこと、ブラウンは、この帰国に際して第2次留学生第3陣として位置づけられる谷元兵右衛門と野村一介を同伴していたこと等である。

41) 高木（2005）は、日下部がヴァン・アースデル夫人宛の手紙を出していることから、日下部が夫人宅に下宿していたと推定している（この推定は正しいと思われる）。さらに、この手紙を高木三郎に見せるように夫人に頼んでいることから、高木三郎も、アースデル夫人宅に下宿していたと推定しているが、この推定は誤りであろう。富田がアイザック・バートル宅に下宿していたことからすれば、高木も富田と下宿先が同じと判断した方が適切である。

である（大童家文書（仙台市博物館寄託）。このことから、富田鐵之助は当然のこととして、高木三郎と勝小鹿の2人も、ニューブランズウィックの「チャーチ ストリート58番地」のアイザック・パートル宅に、下宿していたと思われるのである。なお、上の「N°」は、「No.」, 「No」, 「no」等と同様に、「Number」の省略形である。

1870年のアメリカ人口センサスの個別データ（アメリカ国立公文書館マイクロフィルム版）から見ると、パートル夫妻は、20代でイングランドから移住し建設業を営んでいたのである。富田らが寄宿した時は、まだ30歳代後半であったが、ニューブランズウィック有数の資産家であった。夫妻には、ニュージャージー生まれの子供5人（二男三女）がおり、アイルランド出身の家政婦1人もここに住まいしていたのである。

他方、畠山義成から第2次留学生5名（連署）に宛てた1868年7月20日付の書状の住所は、「チャーチ ストリート55（55 Church st.）」であった（犬塚（1987b）を参照）。薩摩藩3人がニューブランズウィックに居住した直後であることから、畠山のみならず、他の薩摩藩2人も、ここに下宿していたと思われるのである⁴²⁾。

このように、「横井兄弟・日下部」, 「富田・高木・小鹿」, 「畠山・松村・吉田」は、まさに同じ「チャーチ ストリート」の目と鼻のところに下宿し、（富田を除き）近くのラトガース・カレッジやグラマースクールで学んでいたのであった。こうした状況から、富田と高木が、一時帰国からニューブランズウィックの「チャーチ ストリート」に戻ったとき、まさに「互ひに無事を祝した。」のである。

2 緊急一時帰国までの交流ほか

先に引用した『仙臺先哲偉人録』によれば、富田と高木が、勝小鹿を横井兄弟に託し、ニューヨークを経て帰国の途につくのは、「慶応4年6月20日（1868年8月8日）」のことである。薩摩藩の3人が、「西暦」6月下旬（もしくは7月上旬）に4番目にニューブランズウィックに到着したことからすれば、富田・高木と薩摩藩の3人は、ひと半月ほど、同じ「チャーチ ストリート」で交流を深めていたことになる。2人の再渡米により再会したことで、『仙臺先哲偉人録』の「會つて互ひに無事を祝した」の記述もより現実味を帯びてくるのである。

そこで、緊急一時帰国する前の富田・高木と薩摩藩の3人との交流の様子を紹介することにしよう。まず、杉浦弘蔵（畠山義成）から伊勢佐太郎（横井佐平太）宛の書状では、

「去ル十七日尊書一昨日相達忝謹テ早速拝誦然者・・・

幕府モ愈伏罪ニ相決シ前將軍ニモ上野之菩提寺ニ蟄居相成・・・

二賢ノ武徳ナカリセハ無罪之人民Godヨリ受得タルニタナキ最モ重寶ナル生命ヲ落ス□幾千万

42) 吉田清成について、田中（1996）は、「書簡をみれば、彼の居所が“Sommer St. 49”であったことが分かるが（p.22）」としているが、これまで刊行された『吉田清成関係文書一 書簡篇1』～『吉田清成関係文書四 書簡篇4』には、この住所記載は見い出せない。著者の田中智子は、「吉田清成関係文書研究会」のメンバーとして、書簡の解説・整理を担当していることから、この根拠が封筒記載の住所等による可能性もある。仮に田中（1996）が述べているように、吉田の居所が“Sommer St. 49”であったとしても、ここへの転居は、ニューブランズウィック到着から数か月後のことであろうと思われる。

ト云フニモ及ベシ數ヲ知ラサルベシ・・・・

近比不肖之僕等不及ナカラ何分比上ハ京師ヨリ関東之御所置モ至而寛大仁恕之取扱有之度遥ニ祈願罷在事御座候、丁度之折勝、高木之両賢生ハ去ル□ Monday 20th ニMountain 江御出ニ而貴兄之御報告ヲ彼方江送ランコトヲ欲トイヘトモ貴兄方ニモ御返翰旁相為在候へは、若ヤ急ニ御用之義モ難計如何ハセント富田先生江も咄合候処、同生之説ニ者高木ヨリ壺封ヲ□レ其中ニ右之報告ニ付而者貴兄方ハ大意ヲ承得タル事之由ニ而其御方江差上候様富生（富田）ハ承候間長々熟談雖有御返納申上候、俣御落掌可被下候」

である（犬塚（1987b）に採録）。この書状の日付や伊勢の滞在先は不明である。しかしながら、冒頭の徳川慶喜の上野寛永寺への蟄居や勝・西郷会談による江戸城無血開城に着目すれば、慶応4年（1868年）のことになる。また、「Monday 20th」は、西暦の7月20日（月）になる。このことから、杉浦弘蔵（畠山義成）は、「チャーチ ストリート」に引っ越してから、ひと月もしないうちに、伊勢佐太郎（横井佐平太）のみならず、富田、高木、勝とも親密な関係になっていたことがうかがえるのである。ニューブランズウィックでは、戊辰戦争の薩摩と奥羽列藩との激しい対立などはまったくなく、勝・西郷の絆を評価し大局的に物事を判断する関係にあったのである。さらに、（これ以外の）資料・書状からは、（後日になるが）互恵関係さえもうかがえるのである（犬塚（1987b）（1990））。

ここで、高橋（2014a）に戻ると、先に述べた「富田のニューブランズウィックの住所」が同封された慶應4年1月26日（1868年2月19日）付の大童信太夫宛の書状の本論では、ニューヨークの新聞が（サンフランシスコからの電信として）詳細に日本国内の状況を伝えた内容を書き記すとともに、国もとの衰興に関わることなので米国滞在は不本意であること、勝小鹿に随って来たので軽々に進退を決めることもできないこと、勝海舟にも書状を出したことを述べ、また、和暦3月11日（西暦4月3日）の書状では、大童信太夫と勝海舟のいずれからも返信がないので非常に失望したこと（「甚失望罷在候」）を書き送っている。この3月11日付の書状は、「海舟日記」の6月19日状（西暦8月7日状）の「太童江富田之書状而已入る」と想定されるので、発信から到着までにほぼ4か月を要したことになる（「海舟日記」の7月2日状（西暦8月19日状）には、アメリカからの4月12日（西暦5月4日）付の書状がこの日届いたとの記載があり、これも3か月半を要している）。これ対して、海舟は、6月21日（西暦8月9日）、8月30日（同10月14日）、9月25日（同11月9日）にアメリカに書状を出している。『勝海舟全集 別巻 来簡と資料』（講談社）には、「小鹿・（富田）鉄之助・（高木）三郎」宛の書状（慶應4年8月30日付、9月25日付ほか）が採録されている（pp.612-616）。宛名は、いずれも3名連名である。このうち、8月30日の書状は、戊辰戦争の状況（「海舟日記」に記載された戦乱の状況とほぼ同じ内容）を手紙の形に書き直して、3名に書き送ったものである。また、9月25日の書状は、その後の戦乱の様子、惨事、終結と（明治）改元を伝える内容のものであったが、海舟のこれらの書状は、帰国途上の富田・高木には届かなかったのである。

このように、富田鐵之助が日本国内の状況を心配し書き送った書状は、国内の混乱からか、届

くまでにはほぼ4か月を要した。心待ちにした返信も、半年以上も無い状態が続いていた。日本国内の状況を知ろうにも、新聞等や横井兄弟・日下部からの情報も限られている。このような時に、薩摩藩の畠山義成、吉田清成、松村淳蔵がニューブランズウィックに来着したことで、(上の書状で見るように)日本国内の詳細な情報が入手しやすくなったのである。

こうした中、富田と高木は、勝小鹿の後見を横井兄弟に託し、慶応4年6月20日(1868年8月8日)、ニューヨークからアラスカ号に乗船し、(パナマ運河開通前であったので)パナマを汽車で超え、太平洋側で別の船を乗り換え、7月16日(9月3日)にサンフランシスコに着く。サンフランシスコには、コロラド号と一緒に乗船してきた仙台藩の高橋是清と鈴木知雄が滞在していたが、是清がだまされて奴隷として売られていた。富田が一計を案じ救出したのは、この帰国の時である。

1868年9月9日、薩摩藩の仁礼景範は、江夏栄方や谷元道之とともに、ニューヨークからアラスカ号に乗船した。仁礼と江夏は、海舟日記(慶應2年1月21日)記載の種ヶ島・湯地・吉原とともに⁴³⁾、薩摩藩第2次留学生(第1陣)としてアメリカに渡り、2年間のアメリカ生活(モンソン・アカデミーでの勉強)を終えての帰国であった。アラスカ号乗船に先立って、9月4日、仁礼と江夏は、吉田清成の案内でニューヨークからニューブランズウィックへ行き、薩摩藩の畠山義成・松村淳蔵をはじめ、横井兄弟、日下部、勝小鹿に会う。その後、薩摩藩3人(仁礼・江夏・谷元)は、畠山義成と横井佐平太の見送りを受け、ニューヨーク出港のアラスカ号に乗船する。彼らのサンフランシスコ着は10月3日であった。直ちに日本行の船に乗り換えるための手続きをする事務所を探しているときに、杖をついた一人の老人から「富田が帰国したがっているが、日本は戦争中で横浜には敵側がいて上陸できずに、ここに留まっている」旨を聞かされ、このとき谷元道之も一緒だったので、「帰国を望むなら二人で尽力する」と答えたというのである。さらに、その後、事務所でも乗船手続きを終え船へ戻った時に富田と高木に会ったので、話を聞いたところ、「戦争がまだ終わっていないので、帰国を見合わせ、ここに滞在しているが、日本へは必ず帰国する」と答えたというのである。

この仁礼の話は、犬塚(1985)、(1986)に採録された「仁礼景範航米日記」及び「仁礼景範航米日記(その二)」に基づいている。日本を出発し帰国するまでを記載した仁礼の「仁礼景範航米日記」は、事実を淡々と記述することが多く、政治的な動向や主観的な感想は皆無に近い。こうした特徴をもつ「仁礼景範航米日記」の中では、上のエピソードの記載は極めて特異である。

仁礼の航海は、順風満帆であった。10月30日には、「朝夕富士山見ユ。峯ニは白雪降積り誠ニ景色言語ニ絶セリ」と仁礼としては異例の感情を込めた表現をしている。翌11月1日に「神戸」に入港している。日記も、この翌日から和暦に代わる⁴⁴⁾。そして、和暦9月21日(西暦11月6日)には、

43) 「海舟日記」の慶應2年1月21日条では、「薩藩国元江出立之由にて退塾四人、種ヶ島・湯地・吉原・桐野四人」である。また、3月14日条には、「湯地・種ヶ島より之来状、大坂より着」とある。これから間もない3月26日、薩摩藩第2次留学生(第1陣)は、長崎から出帆したのであった。

44) 10月21日条から26日条は、「この間頁一枚破れあり。」の編者の註があるので、正確なことは不明であるが、10月27日からの日付をたどると、仁礼の日記の日付(西暦)は、日米間の時差にともなう日付変更をしていない可能性がある。

「肥後藩横井平四郎（小楠）江見舞、彼之二子ハ書状并傳言ヲ達セリ。彼大ヒニ喜悅セリ」である。

この仁礼の順風満帆な航海に対して、富田と高木の航海は難渋する。『高木三郎翁小傳』の意を付度すれば（pp.28-30）、（戊辰戦争での反維新軍である仙台藩と庄内藩の藩士であることから）官軍等によって捕縛されずに安全に帰国可能か否かを見極めるための情報を得ようとして香港に向けて出発するのである。和暦9月17日（西暦11月2日）にサンフランシスコを出港し、途中、大きな台風にあい、九死に一生を得て46日目に香港に着く（『仙臺先哲偉人録』, p.388）。そして、「海舟日記」の（明治元年）11月18日の条では、「此夜、米利堅より富田・高木兩人帰国、々元之變動を聞て也、帰後に悔と云」となる。西暦では、1868年12月31日のことであった⁴⁵⁾。

3 横井兄弟の留学事始

(1) 海舟と横井兄弟

先に述べたように、ニューブランズウィックに来た最初の日本人留学生は、横井佐平太・大平兄弟である。本論からは、いくぶん逸脱するが、富田鐵之助と高木三郎の緊急帰国の際に、勝小鹿の留学の後見を託したのが、横井兄弟であったことから、この兄弟のアメリカ留学に敷衍しておく。この横井兄弟は、「おれは、今までに天下で恐ろしいものを二人みた。それは、横井小楠と西郷南洲とだ」で知られる横井小楠の甥であり⁴⁶⁾、しかも、この節で紹介するように、小楠と横井兄弟とは、海舟とも濃密な人間関係にあったのである。

横井兄弟の日本出発について、「海舟日記」には

〔慶應2（1866）年4月1日〕「肥後藩兼坂熊四郎・馬淵慎助来る、小楠之書翰持参、聞く、小楠之甥予か門横井佐平太・（ママ）之兩人、国侯命にて米国江留学、長崎より発船す」

と記載されている。しかし、実際には、横井佐平太・大平兄弟は、（幕府の海外渡航解禁前であったことから）藩の正式な許可を得ることができずに、横井小楠や親戚、小楠の門人等から経済的支援により⁴⁷⁾、西回りのジャワやケープ・タウン（喜望峰）経由でアメリカに着いたのであった。

横井兄弟のアメリカ留学については、杉井（1984）の第1章（pp.31-132）に詳細な研究成果が掲載されているので、ここでは、Griffis（1916）に基づき、2人のニューヨーク到着後の動向を紹介する。ただし、勝海舟と横井兄弟との関係については、『横井小楠関係史料 一』のコメントや杉井（1984）の第1章の日付の解釈に関して大きな誤りがあるので、Griffis（1916）を紹介する前に、（本筋から外れるが）これを訂正しておく。

勝海舟は、文久4年2月に長崎出張を命じられ、船で19日に熊本に着く。横井小楠は、「蒙罪知

45) 実際の横浜到着日は、高橋（2014a）で指摘したように、「海舟日記」の日付の前日、すなわち、明治元年11月17日（1868年12月30日）である。

46) 引用文は、『氷川清話』, p.68による。なお、横井兄弟は、小楠の兄（時明）の子であるが、兄が急逝したことから、小楠が横井家を継ぎ、佐平太を養子とする。同志社第3代社長（総長）の横井（伊勢）時雄は、小楠の長男である。

47) 『横井小楠関係史料 二』には、横井兄弟に対する送別の辞「送左・大二姪洋行」が所収されている（p.726）。

行被召放（海舟日記の文久4年1月25日条）」であったので、この日、熊本在住の横井のもとに「坂本龍馬」を遣し、見舞いと経済的援助を行ったのである（海舟日記の「横井先生へ龍馬子遣す」）。これに対して、小楠は、海舟宛ての元治元年（文久4年と同年）4月4日付の書状において、坂本龍馬を遣わしたと海舟の援助に対する感謝の意を述べた後、（坂本龍馬にも頼んだことだが）養子・横井佐平太、養弟・横井大平、肥後藩の岩男内蔵允の3人を航海修行に出したいので、海舟門下に加えてもらい、可能なら海舟の家来に召し抱えていただきたい旨を依頼しているのである（『横井小楠関係史料 一』、pp.441-442 に所収）。他方、海舟は、この4月4日、長崎を出港し、出張を終えての帰り船で（4月6日に）熊本に着く。このとき、横井兄弟と岩男の3人が、小楠の4月4日付の書状を携えて海舟のもとに来る、すなわち、海舟日記の「横井先生之親族三人入門、同行ス」である。これを受けて、海舟は、「龍馬を横井先生江遣す」のである。「海舟日記」では、「来ル」という表現は頻出するが、「同行ス」の記述は、ほとんど見られないことからすれば、海舟は、この3人を乗船させ同行したと解釈するのが妥当であろう。翌5月には、軍艦奉行並から軍艦奉行に昇進し、海舟が以前から上申していた「神戸海軍操練所」の開所が決まる。7月29日、海舟は、神戸海軍操練所の幕府軍艦観光丸の乗員として自分の門下生12人を推薦し、8月4日に許可される。この中には、横井佐平太、横井大平、岩男内蔵允も含まれており、3名は、「勝安房家来」の身分で「御雇手伝（1か月1両の手当）」として観光丸（観光船）に乗り組むことになる（『勝海舟全集9 海軍歴史 Ⅲ』、pp.393-395）。

『横井小楠関係史料 一』の註や杉井（1984）の第1章では、（海舟日記では4月6日と記載していると、断り書きをしながらも、日記の日付を誤記と解釈し）海舟の熊本着の日付を「3月とか3月6日」としているのである。「海舟日記」を追うと、熊本には2月19日と4月6日の2回立ち寄っており、小楠の書状等も勘案すれば、本稿で示したような解釈しかありえないのである。特に、『横井小楠関係史料 一』では、3月に1回だけ熊本に来たことを前提として、4月4日（書状の日付）の海舟の所在を「兵庫」とする誤りも見られるのである。これは、これら2つの文献が引用している「海舟日記」が、梶梅太郎（海舟三男）・巖本善治編の「海舟日記抄」に依拠していることによる（『海舟全集 第9巻』、改造社版に所収）。「海舟日記抄」では、2月10～22日は日記の空白期間であり、当然に2月19日の海舟の熊本着と「横井先生へ龍馬子遣す」の記載はなく、また、4月6日の2度目の熊本訪問に関する「横井先生之親族三人入門、同行ス」も記載がない（江戸東京博物館版「海舟日記」では、これが日記の「上覧」に記載されているのである）。

(2) ラトガス・グラマースクール

さて、Griffis (1916) は、グリフィスのラトガス・カレッジでの講演「日本のラトガス卒業生（1885年6月15日）」のほか、当時のいくつかの資料を付け加えて、講演からほぼ30年後のラトガス大学創立150年にあたる1916年に改定・出版されたものである。この書の中には、*How the Japanese came to New Brunswick*というタイトルの下に、1885年12月30日付のJ.M.フェリスの手紙が採録されている（pp.32-35）。これによると、1866年秋の午後の遅い時間に、横井兄弟

と中国人船長が、ファリスが主事を努めるオランダ改革派教会「外国伝道局」のオフィス（ニューヨーク・フルトンストリート103）を訪ねたことに始まる。横井兄弟は、長崎のオランダ改革派の宣教師フルベッキが校長（兼）教師をしていた学校（済美館）で、数か月間、英語を学んだことから、フルベッキの紹介状を携えて来たのであった⁴⁸⁾。ヨーロッパ列強から日本を守るために「大型船」や「大砲」を造る方法を学びたいという目的をもち、半年に渡る長い航海の末に、アメリカに着いたのである。所持金は（金貨）100ドルであった。

横井兄弟が、初めてJ.M.フェリスを訪問した日について、高木（2006）では、「11月（一説に10月）」としているので、ここで、前節で紹介した「仁礼景範航米日記」から「11月説」が正しいことを確認しておく。すなわち、この「日記」の慶応2年10月16日の条の

「夜七時頃肥後藩伊勢佐平太、沼川三郎兄弟也、横井平四郎子也。ト云昨十三日着相成候由ニテ被参一宿被致候。」

である。仁礼等の薩摩藩第2次留学生は、この年の3月末（和暦）に長崎を出港し、ロンドン経由で9月27日（和暦）にニューヨークに着いたのである。上の記載は、ニューヨークのホテル滞在中のことであった。従って、「仁礼景範航米日記」によれば、横井兄弟の（ケープ・タウン経由での）ニューヨーク着は、慶応2年10月13日（1866年11月19日）である。従って、横井兄弟が、仁礼等のホテルの一室に宿泊した慶応2年10月16日は、（西暦）11月22日にあたる。

翌日（慶応2年10月17日、（西暦）11月23日）の日記では、

「十時過右兩人種、湯（横井兄弟、種ヶ島啓輔、湯地定基）同道ニテ乗来候迄被差越四時比被帰候。」となっている。横井兄弟が持参したフルベッキの紹介状の「（オランダ改革派教会での）受付日」は、「11月23日」である。従って、この受付日が正しいものとすれば、横井兄弟は、仁礼、種ヶ島、湯地と分かれた後、中国人船長とともに、オランダ改革派教会「外国伝道局」のJ.M.フェリスを訪ねたのである。まさに、フェリスの言う「1866年秋の午後の遅い時間」であった⁴⁹⁾。

オランダ改革派教会「外国伝道局」は、フルベッキの紹介状を検討した結果、横井兄弟を、教会との関係が深いニューブランズウィックで学ばせることを決め、学校としてラトガースのグラマースクールを選び、その下宿先を探したのである。日本人が下宿することで、他の下宿人や 아일랜드人の使用人が逃げ出すことも危惧されたが、「チャーチストリート62」のヴァン・アースデル夫人は、ロメイン夫人（亡きロメイン牧師の妻）と相談の上、これを「主（the Master）」と「日本」のための重要な働きをする好機ととらえ、横井兄弟の下宿を引き受けたのである。

横井兄弟は、アースデル夫人宅に3年間下宿し、グラマースクールで学ぶことになるが、アースデル夫人もロメイン夫人も思いやりがある方々で実の二人を息子のように世話したようである（高木（2005）に採録された横井兄弟からアースデル夫人宛の4通の手紙を参照のこと）。

高木（2005）によれば、当時のラトガース・グラマースクールの課程は、初等部（6歳～12歳）、

48) このフルベッキの紹介状（長崎からの1866年6月10日付）の英語原文は、杉井（1984）のp.52に採録されている（日本語訳は、『フルベッキ書簡集』、p.103に掲載）。英語原文では、受付日が「11月23日」となっている。

49) Griffis（1916）、pp.32-35による。

第1学年次（4等クラス）、第2学年次（3等クラス）、第3学年次（2等クラス）、第4学年次（準1等クラス）、第5学年次（1等クラス）に分かれ、グラマースクールからカレッジの伝統的な古典コース（4年の教育課程）に進むためには、1等クラスまでを終えることが求められ、また、カレッジの科学コース（3年の教育課程）に進むためには、準1等クラスまでを終えることが求められていたのである⁵⁰⁾。

カレッジにおいてどの教育課程をとるかによって、グラマースクールの3等～準1等クラスのカリキュラムも異なっている。大まかに言えば、科学部門（Scientific）を目指すコースでは、古典部門（Classical）の「ラテン語」や「ギリシア語」等に代わり、「簿記（Bryant, Strattonのテキスト）」、「アメリカ憲法」、「暗算」、「幾何」、「化学」、「植物学」、「製図」等を履修することになっていたのである（詳細は、高木（2005）を参照のこと）。なお、「Bryant, Stratton」については、第5章で再び言及する。

1866年のグラマースクールの学生数は、112名（うち21名がラトガース・カレッジに進学）であった（高木（2006））。しかしながら、横井兄弟がニューブランズウィックに滞在した時期は、南北戦争（1861～1865年）後の復興期に入り、東部での工業化と都市化が進んだ時期でもあり、ニューブランズウィックの人口も、約1万5千人となっていた。これを反映して、グラマースクールの学生も増加し、1869年には、1万5千ドルをかけて、校舎も全面的に再建され、学生寮も200人収容の広々とした家具付きの寮となった（Corwin（1879）, p.96）。

1866年11月23日（慶応2年10月17日）、オランダ改革派教会外国伝道局のフェリスに会った横井兄弟は、その世話でニューブランズウィックのアースデル夫人宅に下宿し、グラマースクールで学ぶが、英語力不足を補うために、同時に校長の個人指導を受けていた⁵¹⁾。3年後の1869年7月には、弟・大平が肺結核のために、日本に帰国し、12月には、兄・佐平太は、高橋（2014b）で紹介したように、アナポリスの海軍兵学校に入学し、ニューブランズウィックを離れる。

この節を終わるにあたり、いくぶん余談になるが、横井兄弟以外の日本人留学生とラトガース・カレッジやグラマースクールとの関係を紹介しよう。勝海舟の長男・小鹿は、横井佐平太の進路と同じく、グラマースクールで学んだ後、1871年6月にアナポリス海軍兵学校から入学を許可され10月に入学する。27歳で小鹿の監督者として渡米した高木三郎も、10歳も年下の生徒と席を並べて、グラマースクールで学ぶ。Griffis（1916）によれば、勤勉な生徒であった⁵²⁾。

1867年7月に（小鹿・富田・高木のほぼ半年前に）ニューブランズウィックに来た日下部太郎は、福井藩出身者であるが、長崎の済美館でフルベッキから英語をはじめとする洋学を学んでいる。日下部は、フルベッキが彼ほど明敏な日本人は数少ないと評価するほどの人物であり、渡米

50) Corwin（1902）によれば、1865年に新設された科学コース（3年の教育課程）は、ラトガース・カレッジの一部ではあるが、ニュージャージー州の公共用地の売却資金等を原資として設立されたことから、the State College とかScientific Schoolと呼ばれていたのである（pp.156-157）。

51) 校長による個人指導の件は、高木（2005）による。

52) Griffis（1916）, p.26の表現では、“Samro Takaki, a native of Sendai, was a diligent student at the Grammar School”である。ただし、高木は、仙台出身ではなく、庄内出身である。Griffisは、富田と高木が、ともに仙台出身であると誤って理解しているようである。

直後の9月から、(グラマースクールを飛ばして) ラトガース・カレッジに入学している⁵³⁾。

また、1868年6・7月に(小鹿・富田・高木のほぼ半年後に)、薩摩藩の松村淳蔵、畠山義成、吉田清成がニューブランズウィックに来る。1865(慶応元年)に薩摩藩第1次留学生として日本を出国した彼らの英米滞在は3年に及んでいたことから英語力・学識は高かった。松村淳蔵は、1年間で、ラトガース・カレッジに在籍した後、1869年12月に、横井佐平太と同期生として、アナポリス海軍兵学校に入学する。畠山義成と吉田清成も、1868年にラトガース・カレッジに入学する⁵⁴⁾。畠山は、1871年に科学コースを卒業するが、吉田清成は、1871年に日本に帰国し大蔵省に入る(詳細は、次章第4節を参照のこと)。

第3章 ニュージャージー州ミルストーン

1 富田鐵之助の英語力

仙台藩から富田鐵之助の従者・通弁修行の名目で派遣された高橋是清と鈴木知雄は、元治元年(1864年)、12歳の時から横浜の「英学修業」に出され、ヘボン夫人とバラ夫人に英語を習っていたが、慶応2(1866)年の横浜大火の後、高橋は、バンキング・コーポレーション・オブ・ロンドン・インディア・アンド・チャイナ(Banking Cooperation of London, India and China)の支配人宅の住み込みボーイとなり、英会話の熟達に努め、鈴木は、太田栄次郎について訳読を習っている⁵⁵⁾。これに対して、富田鐵之助が渡米前にどこで英語を学んだかは、今のところ分かっていない。

小鹿・富田・高木は、渡米直後、一時ボストンに住いする。これは、高橋(2014a)で述べたように、海舟がアメリカ人貿易商のT. ウォルシュ(ウォルシュ=ホール商会(横浜居留地2番区画: 亜米一商会)の経営者)を通じて、ウォルシュが懇意にしているボストンの「ホスベルス」を紹介されたことによる。ボストンでは、ノースロップについて英語の勉強をしたが⁵⁶⁾、その数か月後には、前章で述べたようにボストンを引き払ってニューブランズウィックに転居しており、ボストンで

53) 『フルベッキ書簡集』の表現では、「日下部ほど明敏なものは十人か十二人ぐらいしかいません(p.123)」である。日下部のラトガース・カレッジ入学は、高木(2006)及びGriffis(1916)のp.22による。

54) Griffis(1916), pp.22-23による。Griffis(1916)のp.22では、畠山のラトガース・カレッジ入学を1867年としているが、p.21の日本人学生リストでは、1868年である。この論文での考察からすれば、薩摩藩の3人のニューブランズウィック来着とラトガース・カレッジ入学は、1868年になる。

55) 『高橋是清自傳』, pp.17-19。『ヘボン在日書簡全集』に採録された1865年1月の書簡には、「妻は毎朝2時間、3人の少年を教えています(p.181)」とある。『高橋是清自傳』によれば、ヘボン夫人からバラ夫人へ替わった理由は、ヘボン夫妻の一時帰国のためである(p.19)。慶応2(1866)年の横浜大火の際、バラ宅が焼失しているが(Ballagh(2010), p.70)、このときのバラ夫人と高橋是清のエピソードについては、『高橋是清自傳』, p.19を参照のこと。なお、翌慶應3(1867)年には、ブラウン宅が焼失している。

56) 『高木三郎翁小傳』に記載された最初の渡米の際の「ボストンに到りノウソルップ氏に就き専心一意英語の研究に従ひける(p.26)」による。吉野(1974)では「ノーソルップ(p.22)」となっているが、ここでの「ノースロップ」の表記は、塩崎(2001), p.108による。なお、ノースロップの略歴・業績等は、内田(2015a)を参照のこと。

の英語習得は十分なものではなかった。転居の理由について、先に紹介した大童大童信太夫宛書簡には、ボストンでの物価高以外には記載されていない。しかしながら、ボストン近郊のモンソン・アカデミーに留学した薩摩藩第2次留学生の数人（海舟門下であった種子島と湯地を含む）は、1866年秋にニューヨークで横井兄弟に会っていることから、その後の横井兄弟の動向についても（オランダ改革派教会を通じて）十分に把握していたものと思われるものである。ここからは推測であるが、この情報をボストンのノースロップ等を通じて知った富田・高木は、日本国内の急変を憂慮し、小鹿の後見を海舟門下で縁が深い横井兄弟に託して帰国しようとして、ボストンでの英語習得を断念してニューブランズウィックに向かったと思われるのである。

富田鐵之助は、慶應4年1月3日（1868年1月27日）に「江戸芝愛宕下 仙台藩中屋敷」の大童信太夫宛にニューブランズウィックの転居先を記した書状を出しているが、この書状の存在が研究者に知られていないためか、吉野（1974）でさえも、『高木三郎翁小傳（p.26）』のあいまいな表現に引きずられ、彼らのボストン滞在を約1年と推論しているのである（p.22）。吉野（1974）については、やむを得ない面もあるが、塩崎（2001）に到っては、フルベッキがノースロップへ紹介したと推論するとか、富田と高木が、その緊急一時帰国の件を当時ボストンに滞在中の福岡藩の柘植や平賀に相談したとするなど、まったくありえない致命的な過ちをしている（pp.109-111）。

さて、ここで渡米当初の富田や高木の英語力について触れる。富田鐵之助に随行した高橋是清と鈴木知雄は、当初からの目的地であるサンフランシスコに留まる。そのサンフランシスコで、高橋は、奴隷として売買される契約書に署名する羽目になる。富田と高木が「緊急一時帰国」の際してサンフランシスコに戻った時、富田が（徳川幕府が囑託した）サンフランシスコの名誉領事ブルークスに契約書破棄を依頼し、相手方とも対決するが、「富田、一條両氏とも英語は十分に出来ない。高木がいくらかよく話せた」状況にあったのである⁵⁷⁾。その高木でも発音が拙いために、相手方がagreeをangryと聞き違い、交渉が難航するハプニングも起きていたのである。

当時、ニューブランズウィックに住まいしていた横井兄弟、日下部太郎や薩摩藩の松村淳蔵、畠山義成、吉田清成は、富田よりも10歳以上も年下であった。しかも、薩摩藩の3人は、英米滞在期間も長く、英語力や学識も大学入学レベルに達し、日下部は、米国滞在歴もほとんどないものの、フルベッキが日本人として最も明敏と評するレベルに達していた。彼らとの英語力の違いから再渡米後の富田は、年下の彼らとも親しく交わり、彼らを師として勉学に励み、とくに畠山義成（変名：杉浦弘蔵）からは英語の勉強を兼ねて、聖書を学ぶことになる⁵⁸⁾。すなわち、畠山から薩摩藩庁宛の書簡（1869年5月）の最末尾には、

57) 『高橋是清自傳』, p.64。

58) 畠山義成は、1870年にニューブランズウィックの第二改革派教会においてハートランフト（C.D.Hartranft）牧師から洗礼を受けている（Griffis（1916）, p.23）。また、吉原（2013）によれば、吉田清成は、1868年11月～翌年1月にニューブランズウィックのメソジスト教会においてティファニー（Tiffany）牧師から洗礼を受けている。後に日本銀行の初代総裁になる吉原重俊（薩摩藩第2次留学生）も、1869年1月10日、オワスコ・アウトレットのオランダ改革派教会において、アメリカに一時帰国中のS.R.ブラウンから洗礼を受けている。

「當分者爰許江勝子（勝小鹿）并越前生八木太郎（日下部太郎），肥後生横井兄弟，近比再渡航致候勝房（勝海舟）殿之門弟高木，富田モ同郷江罷在何れも大元氣ニ而勉学ニ而僕モ横井両生ニ於テハ海軍入校ノ御免許一日モ速ニ御達シ有之度と專ヲ希望にて滞学ナリ，何卒無滞右之御指圖到着之程，僕等も頻リニ奉待次第御坐候，・・・恐惶謹言」

と記載され，また，畠山から種子島敬輔宛の書簡（1869年8月2日付）の最末尾には，

「富田，高木生杯ハ前段之新聞者何も□年不致との事ニ御坐候，富田生ニハ當分Bible之勉学ニ而僕之所江隔日ニ御出ニ而者読書有之，乍不肖及丈ケハ日本語ニ而其意味ヲ説キ候處，精々志ヲ立道ヲ求メ未タ信用ハ不出来処ノ我ラニ耶蘇教之教ヲ理會セント甚タ切ニ宿問も有之，僕ニおひても至而大幸ニ覺へ度者先者理會之賦も成カシト一向祈願 all strength ヲ以テ御相手申事ニ御坐候，就者伊勢兄日下部兄ニ者當分未ダ帰宿無之候，先者右之形行迄遣以テ如比御坐候 頓首敬白」

である（書簡は，いずれも犬塚（1987b）に採録）。

『高木三郎翁小傳』によれば，渡米に際しての高木の希望は，「只管英文英語を學び自由に英字新聞を読み之を翻譯して以て日本に報道し得る學力」を身につけることことにあった（p.25）。これは，富田にも当てはまる英語習得の目的であった。まさに，これを達成しようと，畠山義成から英語の勉強を兼ねて聖書を学んだのであった。

英語が幾分できた高木三郎は，再渡米後に，ラトガース・グラマースクールに学ぶことになるが（Griffis（1916），p.26），富田鐵之助は，次節で紹介するように，ミルストーンの牧師館に居住し，コーウィン牧師から英語等を学ぶことになる⁵⁹⁾。翌1870（明治3）年には，天保12（1841）年生まれの高木三郎は数え30歳，天保6（1835）年生まれ富田鐵之助は数え36歳になる。3年のアメリカ生活で英語力は向上したものの，「正則の學校に入學すると能はず且つ米國の形勢より案ずるに實業に従ひ富國の道を計ると國家の爲め深く利益あるべきを信じ先君と富田氏は共に只管産業上の見聞を擴め經濟的智識の取得に力められぬ」である（『高木三郎翁小傳』，p.43）。富田の經濟的知識の修得は，ホイットニーが校長を務めるニューアークの「ブライアント・ストラットン・アンド・ホイットニー・ビジネス・カレッジ（Bryant, Stratton and Whitney Business College）」への入学である。これについては，第5章で論考する。

2 ミルストーン

高橋（2014b）で詳細に考察したように，明治2年2月（1869年3月）には，ニューブランズウィッ

59) 『高木三郎翁小傳』では，小鹿を監督する必要がなくなったことから，「先君（高木）と富田氏とは・・・或は學校に入り或は雇教師を聘して只管語學を學びける（p.43）」し，高木のラトガース・グラマースクール入学や富田がコーウィン牧師から英語等を学んだことを示唆している。なお，『高木三郎翁小傳』では，小鹿のアメリカ海軍兵学校入学年を明治3年初夏とし（p.43），また，『一橋大学百二十年史』も，この影響を受けてか，「1870（明治3）年，小鹿がアナポリス海軍兵学校に入学し，後見役を免れた富田はその年の11月，ニューアークの所業學校に入学した（pp.4-5）」しているが，小鹿の實際の兵学校入学は，高橋（2014b）で詳細に論考したように，1871（明治4）年10月であった。このように，小鹿の監督を免除された時期と兵学校入学との間には，1年のズレが見られるのである。

ク在住の横井兄弟，日下部，薩摩藩の3人（松村淳蔵，畠山義成，吉田清成）に対して，明治政府による年600メキシコ・ドルの学資給付が決定する⁶⁰⁾。これに続いて，同年7月（西暦8月）には，勝小鹿，富田鐵之助，高木三郎に対する学資給付も決定する。すなわち，

「明治二年七月 其方儀北亜米利加合衆國學校ニ於テ専ラ勉精勤學之旨相聞候ニ付
一ヶ年ニ付メキシカンドル六百枚爲學資被下候 外務省」

である（『東京府知事履歴書（富田鐵之助履歴）』）。

学資給付の理由は，「北亜米利加合衆國學校ニ於テ専ラ勉精勤學」である。明治2年（1869年）のこの段階では，日下部と薩摩藩の3人はラトガース・カレッジに在学し，横井兄弟はラトガース・グラマースクールに在学し，勝と高木も，在学の時期や期間は明確ではないが，ラトガース・グラマースクールに在学していた（Griffis (1916), pp.24-26）。

しかしながら，富田は，英語力と年齢の問題もあって，正規の学校に在学することなく，英語等の個人指導を受けていたのである。すなわち，富田は，学資給付の決定（明治2年7月（1869年8月））の前後から翌年秋までの15か月間，ミルストーン⁶¹⁾のヒルズボロウ・オランダ改革派教会（Hillsborough Reformed Church at Millstone, N.J.）の牧師館に居住し，E.T.コーウィン牧師の指導の下に，英語や聖書等を学んでいたのである。Griffis (1916) の原文によれば，

Tetsunosuke Tomita (his true name), a native of Sendai, born in 1855, made his home for fifteen months with Rev. E.T. Corwin, D.D.

である⁶²⁾。ただし，富田は，1855年生まれではなく，天保6（1835）年の生れである。

富田がこの牧師館に居住していたことは，1870年のアメリカ人口センサスの調査結果から明らかである。1870年6～8月に第9回アメリカ人口センサスが実施されたが，その調査結果は，第1表の形式で整理され，アメリカ国立公文書館マイクロフィルム版（National Archives Microfilm Publications, Microcopy No.593, Population Schedules of the Ninth Census of the United States 1870）に収められている。第1表は，1870年7月29日に実施されたニュージャージー州サマセット郡ヒルズボロウ・タウンシップの調査結果から抽出したものである。

この表を見ると，牧師館には，コーウィン牧師夫妻のほかに，2人の子供（一男一女）と家政婦1人も住んでいたのである。なお，富田の年齢は，本来は35歳であるが，この調査では31歳とされている。カラーは，「W：白人，B：黒人，M：ムラト（混血），C：チャイニーズ，I：インディアン」に区分することが調査の原則であったが，富田については，「Jap」の記載であった。

いくぶん余談になるが，この牧師館があるオランダ改革派教会の住所は，

60) この他に，薩摩藩の第1次留学生の長沢鼎と第2次留学生の大原令之助（吉原重俊の変名）・吉田伴七郎（種子島敬輔の変名）の学資給付も決定したが，実際の学資給付は，翌年になる。この間，横井大平は帰国し，日下部は逝去する。詳細は，高橋（2014b）を参照のこと。

61) ミルストーンは，ニューブランズウィックの10数キ西に位置する。南北戦争時にニューブランズウィックが南軍に占領されたときに，数日間，ワシントン将軍が北軍司令部を置いたことでも知られる。

62) この英文は，Griffis (1916) のp.22の引用であるが，富田が勝小鹿とともに渡米したためか，Griffis (1916) では，小鹿とほぼ同じ年齢の1855年生まれと記載されているのである。

第1表 1870年人口センサス：コーウィン牧師と富田鐵之助

家屋番号	世帯番号	氏名	年齢	性別	カラー	職業	出生地
511	524	Corwin Rev ET	36	M	W	Clergyman	New York
		Mary Esther	30	F	W	Keeping house	New York
		Euphemia K	7	F	W	At home	New Jersey
		Charles E	1	M	W	At home	New Jersey
		Vreeland Catharine	25	F	W	Domestic Sert.	New Jersey
		Tomita Tetsunoske	31	M	Jap	Student	Japan
512	525	Bennard Gershom (以下、省略)	74	M	W	Shoe maker	New Jersey

1 Amwell Rd. Hillsborough, NJ

であり、先の人口センサスもヒルズボロウ・タウンシップにおける人口調査として集計されている。しかしながら、この教会は、歴史的にはミルストーン地区に区分されており、教会の正式名称も、「ミルストーンのヒルズボロウ改革派教会（Hillsborough Reformed Church at Millstone）」である。この教会は、1828年の建立（教会の始まりは1766年）であり、現在では、南北戦争時にワシントン将軍の司令部となったVan Doren House等とともに、ミルストーン歴史地区（Millstone Historical District）の主要建造物になっている。ミルストーンは、1870年の人口センサスではヒルズボロウ・タウンシップに属していたが、1894年にこのタウンシップから分離している。ミルストーンは、2010年の人口センサスでは、人口400人ほどの小さな自治体であり、学校運営等はヒルズボロウ・タウンシップに依存している。

このように富田はミルストーンの牧師館でコーウィン牧師の個人指導を受けていたのである。明治政府からの学費給付を受けながら、正規の学校に入学せず個人教授を受けることは、現代的な視点からすれば、ずいぶん奇異に感じられるが、当時としては、十分にあり得たことであった。富田がその先鞭をつけたひとりということになる。巖（2008）において紹介された「折田日記」よれば、富田と入れ替りに牧師館に住まいし、コーウィン牧師から学ぶことになった折田彦市は、1871年12月から翌年2月までの10週間の下宿料・授業料として120ドルをコーウィン牧師に支払っているのである（p.30）。

この折田の下宿料・授業料は、1年間では600ドルほどになる。高橋（2014b）で紹介したように、富田から大童信太夫宛の書状（慶応4年1月26日付）には、1年間の留学費用の見積もりが添付されたいた。これによれば、1年間の食料・下宿料312ドル、教師謝礼150あるいは160ドル～300ドルであったから、コーウィン牧師への謝礼を最高額の300ドルとすれば、飲料・下宿料・教師謝礼で600ドルになる。従って、先の1年600ドルはほぼこれに相当する金額になる。ちなみに、正規の学校の学費は、初級クラスで100ドル、上級クラスでも200ドル以下であった。

富田も、折田と同様に、年600ドルをコーウィン牧師に支払っていたすれば、その支払い原資として想定していたものは、明治政府からの学資給付金の600メキシコ・ドルであろう。メキシコ・

ドル、アメリカ金ドル、アメリカ紙ドルの交換レートは、日々、変動するが、富田がミルストーンを離れる前後の明治3年10月25日（1870年11月18日）に、松本壮一郎がニューヨークで交換したレートは、「100メキシコ・ドル=105～106ドル（アメリカ金ドル）=117ドル（アメリカ紙ドル）」であった（高橋（2014b）を参照のこと）。従って、600メキシコ・ドルの学資給付を受け、下宿料・授業料として600ドル（アメリカ紙ドル）を支払うと、手元には100ドル（アメリカ紙ドル）ほどが残る。この残額は、おそらく衣服費、書籍代、小遣い等に充てられたことであろう。

富田がニューブランズウィックのオランダ改革派教会に通う中で、このコーウィン牧師と知り合いになり、ミルストーンに移った可能性は残るが、二人の橋渡しは、ラトガース・カレッジに在学し、英語力もあり、キリスト教に大きな関心をもっていった日本人学生、とりわけ畠山義成と日下部太郎であったように思われる。

畠山とコーウィン牧師等との交流を示唆するものとして、犬塚（1987b）に採録された畠山の英文の手紙や日本語の書簡を紹介しよう。まず、1869年8月11日の畠山の友人宛の英文の手紙（手紙には漢字で表記された人名があることから日本人の友人宛と推測される英文の手紙）は、「一昨日の午後にコーウィン牧師を訪問し、今日の午後にミルストーンから戻ったので、9日付のあなたからの歓迎の手紙にできる限り急いで応えています」という書き出しから始まり、「2泊したミルストーンでは、コーウィン牧師の招きがあり大変楽しく過ごしました。伊勢氏（漢字表記）から親切な短信を受け取りました。彼が元気であることを聞きうれしく思います。富田（漢字表記）は、一昨日、勝君（漢字表記）に付き添うために、レイク・ジョージに向けてミルストーンを立ちました⁶³⁾。日下部（漢字表記）の健康状態が良くないので、日下部が彼（勝）をレイク・ジョージに残すことを余儀なくされたからです。彼（日下部）は、ロング・アイランドのフラトブッシュ・アカデミーにいます」で結ばれている。

この日下部と勝の後日談は、畠山義成から横井佐平太宛ての8月24日付の書簡にも記載されている。すなわち、

「新克約（ニューヨーク）江出府致し翌Sunday者Plymouth Church江差越、夫々平理（フェリス）諸師之招キニ従ひbefore last Monday The 16th ニ爰許江参着致候處、勿論御存し通其時分者日下部先生（日下部太郎）御出ニ而當分ニ至る迄も御壮健ナリ、・・・

扱僕爰許ニ着雖直ニ可伺□□筈之處、日下部先生御口葉ニ而ハ大兄近此爰許江御来臨之要様承知仕先心得申上・・・

○勝君（勝小鹿）も先日Lake George へ御帰リニ而當分爰許江御滞留御榮なり、及び松村（松村淳蔵）ニも参り随分にぎにぎ敷甚愈快ヲ尽シ候次第御坐候・・・」

である。

犬塚（1987b）に採録された畠山の英文の手紙や日本語の書簡を整理し、これらの日付を追うと、1869年7月には、コーウィン牧師を訪ね、8月にはロング・アイランドのフラトブッシュ・アカデミー

63) 犬塚（1987b）に採録された地名は「Lage George」であるが、横井佐平太宛ての8月24日付の書簡では、「Lake George」とされていること等から、ここでは、「Lake George」として和訳した。

に、3週間滞在し（その途中、ニューブランズウィックに一時帰宅）、ニューブランズウィックに戻っているのである。上の手紙は、その文面からすれば、ロング・アイランドのフラトブッシュ・アカデミーにおいて書かれたものと推測される。従って、ここには、日下部のほかにも、富田がレイク・ジョージに迎えに行った勝小鹿も滞在していたし、さらに松村淳蔵もやって来て、随分と賑やかになったのである。

先の畠山がミルストーンでコーウィン牧師と会った要件と結果は、別の英文の手紙（日付は不明）からも確認できるが、この英文の手紙には、コーウィン牧師との件以外にも、オランダ改革派のスタウトが長崎で元気に到着し⁶⁴、フルベッキが居住していた大徳寺に居住していること、フルベッキが江戸へ行くことになったためにその替りにスタウトが英語の授業をすること、さらには、この日の午後に聞いたこととして、彼（横井大平）も7月27日に無事に横浜に着き、体調も良くなり食欲もあること等も書かれているのである。

さらに、これと別の英文の手紙（これも日付不明）には、オランダ改革派から横浜へ派遣されていた宣教師のバラ（アメリカに帰国中）からバラの父親宅に、数日、泊まるように言われたが、スタウト夫人宅を訪問する先約があったことから、謝辞を述べて断ったことも書かれている。

これらの畠山の英文の手紙からは、オランダ改革派の牧師や日本に派遣された宣教師と深い交わりをもっていたことが分かる。畠山が、富田をコーウィン牧師に紹介したか否かはともかくとして、1869年8月11日の手紙からは、少なくとも8月には富田がミルストーンにいたこと、勝小鹿は日下部とともにレイク・ジョージに滞在していたが、日下部の健康が思わしくなく、富田が小鹿を迎えに行ったことが判明するのである。

この節を終わるにあたり、上で言及したアメリカ帰国中のバラの家族構成を述べる。第2表は、1870年8月22日に実施されたニュージャージー州バーゲン郡ハッケンザック・タウンシップの人口センサスの調査結果から抽出したバラの父親宅の家族構成である。

第2表に従えば、ジェームズ・ハミルトン・バラ（James H. Ballagh）は、アイルランド出身の両親のもとにニューヨーク州で誕生している。バラは、1832年に「ニューヨーク州デラウエア郡ホバートの農家で生れる⁶⁵」とされているので、これと出生地は一致する。しかしながら、年

64) 長崎に派遣されたオランダ改革派のスタウト（Henry Stout）とブラウンの長男のロバート（Robert Morison Brown）は、ともに1865年のラトガース・カレッジ卒業である（Griffis（1916）, p.19）。スタウトの長崎到着は3月10日であったが、直ちに大徳寺でフルベッキと事務引継ぎを行い、フルベッキは4月上旬に東京に入る（『フルベッキ書簡集』の「年譜」, p.393）。

なお、高木（2005）によれば、横井大平は、肺結核のために、7月3日にサンフランシスコを出航しているが、「同月末横浜着の可能性大」とし横浜到着日は明確にされていなかった。この畠山の手紙によって「彼」の横浜着は7月27日であることが判明する。高橋（2014a）で紹介したように、横井大平は、明治2年7月13日（1869年8月20日）に、勝海舟を訪ね、小鹿の手紙を届けている。

65) Ballgh（2010）の『宣教師バラの初期伝道』の「年表」による（pp.70-71）。

第2表 1870年人口センサス：バラとその家族

家屋番号	世帯番号	氏名	年齢	性別	カラー	職業	出生地
726	814	Ballagh, John	69	M	W	Farmer	Ireland
		Anna P.	60	F	W	Keeping House	Ireland
		James H.	36	M	W	Clergyman	New York
		Maggie R.	30	F	W	Without Occupation	Vergina
		Carrie E.	8	F	W	Without Occupation	Japan
		Anna	6	F	W		Japan
		Margaret	30	F	W	Seamstress	New York
		Robert H.	21	M	W	Gas-pipe Fitter	New York
		Sarah	28	F	W	Without Occupation	New York
		Mary	26	F	W	Without Occupation	New York
		Anna	23	F	W	Without Occupation	New York
		Hoyt, Ralph.B.	25	M	W	Clergyman	New York

齢に関しては2歳の差異が見られる⁶⁶⁾。Corwin (1902), p.303やCorwin (1922), p.243でも、バラは、1832年9月7日生まれとされており、やはり差異が見られるのである。バラの両親は、その後、ニューヨーク州からニュージャージー州に移り、1870年には、バーゲン郡（ハッケンザック・タウンシップの）ティアフライで農業を営んでいたのである。実は、この人口センサスには、不動産価値に関する情報も附加されている。これによれば、バラの父ジョンは、（人口センサス記載の数字としては極めて大きな）8,000ドルの不動産を所有しているおり、大規模な農業を営む裕福な家庭であったことが分かる。バラは、ニューブランズウィック神学校を修了した翌年(1861年)に、バージニア出身のマーガレットと結婚し、直ちに夫妻で横浜に赴任している⁶⁷⁾。バラの娘2人は日本生まれであることから、これが人口センサスにも記されている。このほか、バラの父親宅には、未婚の5人の妹弟と聖職者1名がいたのである。

66) バラは、1832年9月7日生まれで、1857年にラトガース・カレッジを卒業した後、ニューブランズウィック神学校に進み、1860年に修了している（Corwin (1902), p.303及びCorwin (1922), p.243）。1861年、オランダ改革派教会から横浜に派遣され、ブラウンの下で種々の活動を行っている。1869年1月に横浜を出航しアメリカに一時帰国し、アメリカ滞在中には、数多くの教会を訪問している（Corwin (1902), p.303）。先の畠山の手紙は、バラのこの帰国中のエピソードである。なお、バラ一家の再訪日は、この人口センサス調査から数か月後の1870年11月25日である（川島 (1988), p.139）。

ブラウンも、1867年に自宅が焼失したためにアメリカに帰国し、1869年8月に再訪日していることから、バラの一時帰国（1869年1月）からフルベッキの東京移住まで（同年4月）のわずかな間ではあるが、オランダ改革派の横浜ステーションは宣教師不在だったことになる。バラの一時帰国の事実、フルベッキの1869年6月29日付のフェリス宛書簡や8月28日付書簡（『フルベッキ書簡集』, p.153及びp.161）に示唆されてことではあるが、Ballagh (2010) の『宣教師バラの初期伝道』の「年表」や『フルベッキ書簡集』の「年譜」にも、一時帰国の件は採録されていない。

67) Ballagh (2010) の年表では、「1861年5月15日 マーガレット・テート・キニアと結婚」となっているが、人口センサスでは、バラの妹のMargaretと区別するために「Maggie R.」と記載されている。人口センサスを見ると、バラ夫人本人も、5,000ドルの不動産を所有する資産家であった。彼女は幼少期に両親を失い、一人娘であったことから祖父の広大な農場を受け継いでいたのである（川島 (1988), pp.140-141）。

3 コーウィン牧師

コーウィン牧師は、1834年7月12日、ニューヨークの生まれであることから⁶⁸⁾、天保6年10月16日(1835年12月5日)生まれの富田鐵之助より、ほぼ1歳年長であったに過ぎない。コーウィンは、1853年にニューヨークのシティ・カレッジを卒業した後⁶⁹⁾、ラトガース・カレッジの上位教育機関であり、オランダ改革派と関係が深いニューブランズウィック神学校に進み、1856年に修了している。その後、パラマス教会(ニュージャージー州バーゲン郡)の牧師を経て、1863年から(1888年まで)ミルストーンのヒルズボロウ教会の牧師職にあった。コーウィンは、後に、改革派教会の歴史等に関する多数の著作を刊行し、神学博士の学位を授与され、改革派教会の最も卓越した歴史家として知られるようになる。

1891年には、オランダ改革派教会のPresident of General Synod(長老会議長・年次総会議長)にもなっている。

コーウィンの代表的な著作としては、*A Manual of the Reformed Church in America*をあげることができよう。本稿の「参考文献」に記載しているように、このシリーズの最初のバージョンは、1859年に*A Manual of the Reformed Protestant Dutch Church in North America*という書名で、オランダ改革派教会出版局から出版されたものである。コーウィン、25歳、パラマス教会牧師の時の著作であり、2,000部(166ページ)が発行された。この書の「付録(Appendix)」の「ノートD」が「外国伝道」の項である(pp.143-146)。日本関係の説明はまったくなく、この項の最後に付けられた「外国伝道の人名リスト」の最末尾に、ブラウンについてのみ

“Samuel R. Brown 1859 Appointed to Japan”

と1行のみが記載されているに過ぎない。

1863年、コーウィンは、ニューブランズウィック近郊ミルストーンのヒルズボロウ教会の牧師に転ずる。1868年9月7日には、息子チャールズ(Charles Edward Corwin)が生まれる。シリーズの第2バージョンは、チャールズ誕生翌年の1869年の刊行である。1,000部印刷されたが、オランダ改革派の歴史、聖職者名、組織形態、教会・神学校等を網羅したもので、総ページ数400という大著であった。

前年の1868年夏までには、これまで名前を挙げてきた横井兄弟、日下部、勝小鹿、富田、高木、薩摩藩の松村、畠山、吉田の9人がニューブランズウィックに居住していることから、コーウィンの息子の誕生の前後から日本人留学生との交流も生まれてきたように思われる。この著作の「日

68) コーウィン牧師の略歴は、Corwin (1902), pp.394-395及びCorwin (1922), p.290による。

69) 現在のニューヨーク市立大学(City University of New York)は数多くのカレッジ・大学院・コミュニティカレッジ等から構成されているが、シティ・カレッジ(City College of New York)は、その旗艦カレッジ(the flagship college)である。このカレッジは、ニューヨーク市の教育局長であったタウンゼント・ハリス(初代駐日総領事、後に初代駐日公使)によって、1847年にニューヨーク市のフリー・アカデミー(The Free Academy)として設立されたものである。シティ・カレッジのホームページ(<http://www.ccnycuny.edu/about/mission.cfm>)を見ると、ハリスが掲げた創立のミッションは、「すべての人に門戸を開け。金持ちの子も貧乏人の子もともに座らせよ。勤勉と善行と知性を除いては相違がないことを知れ。」である。

本伝道」の項は、彼らとの交流を通して、また、バラの帰国・交流を通して、正確に執筆したものと想定され、3ページに及ぶ説明になっている (pp.390-392)。「聖職者」の項では、伝道経験豊富なブラウンの紹介に半ページほどを使っているが、フルベッキ、バラ、スタウトは、それぞれの2行の紹介に過ぎない (順にpp.45-46, p.256, p.26及びp.224に記載)。

明治2年2月 (1869年3月)、富田と高木が日本からニューブランズウィックに戻るが、Corwin (1869) の序文末尾に「Millstone, May, 1869」と記載されていること、この年の8月 (和暦7月) に年600ドルの学資給付が決定したこと、1869年8月11日の畠山の友人宛の英文の手紙において、富田がミルストーン居住であることが示唆されていること等からすれば、コーウィンが、この *Manual* シリーズの第2バージョンを書き終えた直後の7月頃から、富田鐵之助をミルストーンの牧師館に住まわせ、富田に英語とアメリカやヨーロッパに関する学識を教えたものと推察されるのである。

富田 (数え35歳) としても、グラマースクールに通学し、20歳も年少の少年たちと机を並べ、学校教育の中で勉強するよりも、学識のあるコーウィンから英語や多様な知識を教えられ、教会に来る信者から世情を教えられ、コーウィンの娘のユーフェミアの子ども言葉や息子チャールズの幼児言葉を通して英語の発音練習をすることの方が、英語等の修得には有益であり効率的であった。こうして、富田は、ミルストーンの牧師館に15か月住まいし、1870年12月 (明治3年11月) には、ニューアークの「ブライアント・ストラットン・アンド・ホイットニー・ビジネス・カレッジ (Bryant, Stratton and Whitney Business College)」に入学する。

富田がミルストーンを離れる直前に牧師館に住まいし、コーウィンから英語等の指導を受けたのは、折田彦市 (当時数え21歳、後に旧制第三高等学校の初代校長) である。折田は、岩倉具視の息子の具定・具経兄弟に随行し、山本重輔や服部一三とともにアメリカに留学したが、随行者の中では英語力が不足していたのである (巖 (2008), pp.22-26)。折田は、岩倉兄弟一行とともに1870年夏までにニューブランズウィックに来着する。第3表は、1870年7月12日に実施された

第3表 1870年人口センサス：旭小太郎 (岩倉具定) と折田彦市・山本重輔

家屋番号	世帯番号	氏名	年齢	性別	カラー	職業	出生地	
1308	1858	Thomson Lucy	60	F	W	Boading House	New York	
		Warwick A.	9	M	W		New York	
		John F.	7	M	W		New York	
		Dustave W.	5	M	W		New York	
		(途中、4人省略)						
		Orite	20	M	W C	Collge-Student	Japan	
		Yamamoto	21	M	W C	Collge-Student	Japan	
		Asahi	19	M	W C	Collge-Student	Japan	
		Janeke Annie	34	F	W	Domestic Servant	Prussia	
		Smith Mary	13	F	W	Domestic Servant	Pennsylvania	

ニュージャージー州ミドルセックス郡ニューブランズウィック・シティタウンシップの人口センサスの調査結果から抽出した旭小太郎（岩倉具定）・折田彦市・山本重輔の記載である。

第3表のように、「Asahiの旭小太郎（岩倉具定）」、「Oriteの折田彦市」、「Yamamotoの山本重輔」は、主従ともども、1870年7月には、トムソン方に下宿していたのである。ルーシー・トムソンが営む下宿には、（13歳の女子を含めて）2人の家政婦をつかい、7人の下宿人を置いていたのである。

第3表の「カラー」欄は、いったんは「W」と記入されたが、先に説明したように「W:白人, B:黒人, M:ムラト（混血）, C:チャイニーズ, I:インディアン」に区分することが調査の原則であったためか、「W」に線が引かれ、その上から「C」が記載されている。また、「職業」欄には、いったん「College Student」と記載されたが、取り消し線が引かれている。

さて、折田は、富田がミルストーンを離れる直前に（1870年秋に）、ニューブランズウィックの下宿を出て、ミルストーンの牧師館に移る。さらに、翌明治4年3月17日には、「旭龍兩人」の留学生活も順調に行ったことから、山本や服部ともにその監督の任を解かれ、正式に「鹿児島藩折田権蔵外二名米国へ留学」が申し付けられたのである（『太政類典（第1編：慶応3年～明治4年）』、第119巻、件名番号075）。こうして折田は、ここで2年間、コーウィン牧師の薫陶を受けた後に、ニュージャージー・カレッジ（現在のプリンストン大学）に進むことになる（Griffis (1916), p.25）。

折田以外では、神田乃武（神田孝平の養子）も⁷⁰⁾、1871年の早々から半年間、この牧師館に住まいし、コーウインの指導や折田の世話を受けているのである（Griffis (1916), p.25）。この神田乃武は、大学南校生徒（渡米時は数え14歳）であり、森有禮に伴われての（「今度森少辨務使渡航ノ節召連候積り有之候」）自費でのアメリカ留学であった（「南校生徒神田乃武外一名自費米国留学ヲ許ス（明治3年閏10月、『太政類典』、第120巻、件名番号050）」）。

工藤精一（帰国後、札幌農学校教授）も、折田と入れ替わるように、折田がプリンストン大学に入学した後の1872年からミルストーンの牧師館に住み、コーウインの指導を受け、後に、オランダ改革派教会で洗礼を受けるまでになっている。工藤は、渡米当時は英語を話せなかったが（unable to converse in English）、1878年のラトガース・カレッジ卒業時には、成績順位一桁（9番以内の成績）で卒業するまでになっていたのである（Griffis (1916), p.24）。

このように、コーウインは、富田を筆頭にして、日本的な学識・学力が十分ながら、英語力が不足する留学生を牧師館に住まわせて教育し、富田をビジネス・カレッジに、折田をニュージャージー・カレッジに、また、工藤をラトガース・カレッジに進学させるだけの英語力・欧米の知識等を身につけさせているのである。

ところで、コーウインの代表的な著作*A Manual of the Reformed Church in America*は非常

70) 神田乃武は、その後、アーモスト・カレッジに進み、帰国後に（東京）帝国大学文科大学教授、（東京）高等師範学校教授、（東京）外国語学校校長等を歴任した後、（東京）高等商業学校教授となっている。富田鐵之助は、森有禮とともに「商法講習所」の設立に尽力したが、（東京）高等商業学校（現在の一橋大学）は、その後身である。神田乃武は、その高等商業学校の第5代校長（正式には、校長心得）を務めている。英語教育に尽力し、中学校教科書の編纂でも知られている。

に好評で、その後も、バージョン・アップしていく。1879年には、シリーズ第3バージョンが出版された。原稿が電動タイプで打たれたこともあってか、ページ数も第2バージョンの400ページから、700ページに増え、初刷り1,000部であった。「日本伝道」の項も5ページに増え (pp.144-148)、日本に派遣された宣教師も紹介されるようになる。分量的には、ブラウンの紹介にほぼ1ページがあてられているが (pp.198-199)、フルベッキは、この時でも、16行の紹介に過ぎない (p.533)。バラヤスタウトも、8行とか3行の紹介であるが (p.170及びp.470)、このバージョンから、Griffins (1900) やGriffins (1916) の著者であるグリフィスも登場し、20数行の紹介となっている (pp.289-290)。

さらに、1902年のシリーズ第4バージョンは、1,100ページにならんとする大作で2,000部が出版された。「第1部 改革派教会史」, 「第2部 聖職者」, 「第3部 教会」の3部構成であるが、第1部第19章の「外国伝道 (pp.230-281)」のうち、ほぼ4分の1は、「日本伝道 (pp.265-277)」についての記載であり、また、第2部の「聖職者 (pp.291-934)」では、バラについては10数行の、またグリフィスについても2ページほどの紹介であるが、ブラウンとフルベッキについては、「肖像写真付き」で数ページにも及ぶ紹介がなされている (順に、pp.303-304, pp.498-500, pp.343-347 及びpp.874-880を参照のこと)。

最後の出版が、1922年のシリーズ第5バージョンである。コーウィンが1914年6月22日に80歳で逝去したこと⁷¹⁾、息子のチャールズ・コーウィンが⁷²⁾、これを引き継ぎ編纂したものである (782ページで1,000部が発行された)。著書のボリュームが小さくなったことから、「日本伝道」, 「ブラウン」, 「フルベッキ」の記載もコンパクトになり、「グリフィス」に至っては、ほぼ半ページに圧縮されている (順に、pp.207-215, pp.267-269, pp.569-573及びp.351を参照のこと)。

4 日本留学生との別れ

富田は、ミルストーン滞在中、日本人留学生との別れと新たな交流を経験する。新たな交流については、章を改めて紹介することし、この節では前者のみをとりあげる。

(1) 横井大平の帰国

まず、富田がミルストーンに転居する直前には、幕末の緊急一時帰国の際に勝小鹿の後見を頼んだ横井大平 (横井兄弟の弟) が肺結核のために帰国する。この件は、高橋 (2014a) や (2014b) でも紹介しているので、詳細は省くが、1869年7月3日にサンフランシスコを出航し、横浜着は7月27日である。日本帰国後の勝海舟訪問は、明治2年7月13日 (1869年8月20日) である。また、フルベッキの8月28日付書簡に、「沼川 (横井大平) は江戸でわたしに会いに来ました。長崎でも

71) 改革派教会の歴史に関する多数の著作も著した父のエドワード・コーウィンは、アメリカ教会史学会会員でもあった。その学会誌 *Papers of the American Society of Church History* の新シリーズ第6巻 (1921年) では、1914年6月22日 (月)、ニュージャージー州のノース・ブランチで死亡となっている (p.238)。

72) 息子のチャールズ・コーウィンは、1892年にラトガース・カレッジを卒業した後、ニューブランズウィック神学校に進み1895年に修了した。その後、いくつかのオランダ改革派教会の牧師を務めている。

また会いました（『フルベッキ書簡集』、p.162）」とあることからすれば、帰国後の8月28日以前にフルベッキと東京と長崎で会っていることになる。その後、横井大平は、(郷里の)熊本で「洋学校」構想を推進するも、明治4年4月2日（1871年5月20日）、21歳で逝去する⁷³⁾。

(2) 吉田清成の転校

吉田清成は、畠山義成や松村淳蔵等とともに、薩摩藩第1次留学生（英国留学生）であった。薩摩藩第1次留学生は、慶応元（1865）年に日本を出航し、英国を経てアメリカに渡る。アメリカでは、数多くの苦難に直面しながら留学生生活を送る（詳細は、犬塚（1987a）を参照のこと）。1868年6月、畠山義成がオランダ改革派教会のフェリスの助言に従い、ニューブランズウィックで学ぶことを決めたとともに、吉田清成や（少し遅れて）松村淳蔵も来着する⁷⁴⁾。同年秋には、3人ともラトガース・カレッジの科学コースに入学する（Griffis（1916）、p.21）。

翌1869年、松村淳蔵は海軍兵学校入学のため、ニューブランズウィックを離れるが、その数か月前に、吉田清成も、マサチューセッツ州のウィルブラハム・アカデミーへ転校する。薩摩藩第1次留学生でアメリカ留学を続けていた松村・畠山等は、経済的困窮に陥り、オランダ改革派のフェリス等から借財をしながらの留学生生活であった⁷⁵⁾。高橋（2014b）で考察したように、明治2（1869）年2月、彼らには年600メキシコ・ドルの学資が支給されることになったが、薩摩藩留学生は、この学資給付の決定を、しばらくの間、知らずいたのであった⁷⁶⁾。実際に支給されたのは、翌年の明治3（1870）年6月のことであった。明治3年5月、外務省は、「学資配分担当（学費等配達方）」として、吉田清成（アメリカ留学生）と音見清兵衛（イギリス留学生：長州藩）を任命し、留学生の学資支給を実施したのであった⁷⁷⁾。しかしながら、これは1年後のことであり、1869年夏の時点では、吉田清成は知る由もなかったのである。

吉田清成は、1869年7月29日、ロング・アイランドのフラットブッシュ・アカデミーを立ち、

73) 横井大平の「洋学校」構想を示す（オランダ改革派外国伝道局の）フェリス宛書簡は、杉井（1984）のp.120に採録されている。また、逝去の日付は、杉井（1984）のp.124による。

74) 畠山義成から岩下方平・新納久脩宛の書簡（1868年7月8日付、犬塚（1987b）に採録）及び畠山義成から花房義質宛の書簡（1868年6月26日付、犬塚（1990）に採録）による。また、犬塚（1987a）、p.222も参照のこと。

75) 畠山義成から薩摩藩庁宛の書簡による（1869年5月付、犬塚（1987b）に採録）。

76) 註75)と同じ書簡（畠山から薩摩藩庁宛の書簡）による。畠山や吉田が経済的困窮にあったことは、アメリカ駐在の少辨務使・森有禮から特命全権大使・岩倉具視宛の書簡（明治5年2月23日付、犬塚（1990）に採録）からも知ることができる。すなわち、杉浦弘蔵（畠山義成）は、留学期間中にアメリカ人や日本人から多額の借財ができたが、今回、政府に勤務することになったので、これを精算してから帰国させることにしたい、ついては、一時、アメリカ紙幣1,000ドルを貸し与え、本人の俸給から返済させたいとの伺い書である。ちなみに、杉浦弘蔵（畠山義成）は、「岩倉使節団」に随行し、『特命全権大使米欧回覧実記』の編著者の久米邦武とともに、現地での筆録を担当した（p.392）。

77) 『太政類典（第1編：慶応3年～明治4年）』、第119巻の「(件名番号068) 三條公恭従英国留学戸田三郎へ学資ヲ賜ヒ并同国留学音見清兵衛米國留学永井五百介へ」による。

マサチューセッツ州のウィルブラハム・アカデミーに向かった⁷⁸⁾。すなわち、

「○Nagai left here for Wilbraham Aca. On last Tuesday 27th &

○永井生之proposal that

若シ又其レナクハ彼方ハ Wesl College ナレバ大方methodist people 何角之都合も宜敷尤諸先生等も親切ニ付旁彼方被好なりとの事なれハ尤至極之論なり」

である（畠山義成から種子島啓輔宛の書簡（1869年8月2日付）、犬塚（1987b）に採録）。

この学校は、1817年創立のメソジスト系の学校であった⁷⁹⁾。吉田は、この半年ほど前に、ニューブランズウィックのメソジスト派教会（セント・ジェームズ教会）においてティファニー牧師から洗礼を受けており⁸⁰⁾、メソジスト教会と濃密な関係をつくっていたのである。ウィルブラハムでは、聴衆に日本に関する講義を行い、何がしかの受講料を得ようとしたのである。

やがて、吉田は、ここでより高い教育レベルの学校を探し始める。ハーバード・カレッジ（Harvard College）進学も考慮したが、結局は、同じメソジスト系のコネチカット州ミドルタウンのウェスレイアン大学（Wesleyan University）に進み、1870年2月にコネチカット州へ移る（田中（1996）、p.15）。ただし、上の書簡の「Wesl College」の記述や、『吉田清成関係文書三』のpp.34-35に採録された同年7月19日付の書簡（吉田宛ての松村・畠山の連名書簡）の「Wesl. Univ.」の記述からすれば、吉田は、一時、ハーバード・カレッジ進学への迷いがあったとしても、当初からウェスレイアン大学に入るためのひとつのステップとして、ウィルブラハム・アカデミーに来たとも考えられるのである。

この件はともかくとして、吉田は、上述のように明治3年5月（1870年6月）、外務省から学費等配達方に任命され、翌月には、外務省から「洋銀9,405ドル」が送金され、これを伊勢佐太郎（横井佐平太）・松村淳蔵・杉浦弘蔵（畠山義成）・永井五百介（吉田清成）・大原令之助（吉原重俊）・吉田伴七郎（種子島敬輔）・長沢鼎・勝小鹿・高木三郎・富田鐵之助・井上六三郎・本間英一郎の12人に対して配分する⁸¹⁾。ところが、明治3年11月には、下記の事情から「米国留学永井五百介英国へ転学ニ付キ在米大原令之助へ手当ヲ給シ留学生ノ取扱ヲ為サシム」となり、責任者が吉原重俊に代わる（『太政類典（第1編：慶応3年～明治4年）』、第119巻、件名番号070）。

事実、この1870年秋には、イギリスに出張する特命辨務使の大蔵大丞上野景範（薩摩藩出身）

78) 畠山義成から種子島啓輔宛の書簡（1869年8月2日付）による。ただし、この書簡には、ロング・アイランドのフラットブッシュ・アカデミーの記載はなく、「ここ（here）」からと記載されている。畠山は、1869年の夏休みに小旅行を繰り返しているが、犬塚（1987b）に採録に採録された書簡や英文の手紙の日付と場所を追うと、8月上旬の居所は、フラットブッシュ・アカデミーである。畠山が夏休みの小旅行に出る前の1869年7月19日には、永井（吉田清成）宛に松村淳蔵との連名でニューブランズウィックから発信し（『吉田清成関係文書 書簡篇 3』, pp.34-35）、8月6日には、小旅行からニューブランズウィックに一度戻り、イギリス在留の長州藩士からの書簡を写し手元に保存している（犬塚（1987b））。

79) 田中（1996）、p.14による。

80) 吉田の受洗については、吉原（2013）及び田中（1996）による。受洗の時期は、1868年11月から翌年1月の間である。

81) 『吉田清成関係文書五 書類篇1』に採録された「留学生学費手控／外務省」及び「留学費用に関するメモ／吉田清成」による（pp.11-16）。高橋（2014b）も参照のこと。

がニューヨークに立ち寄った際に、吉田はその人物を見込まれ、イギリスへ同行することになり、アメリカを離れる（田中（1996），pp.15-16）。ロンドンでは、勉学の希望もあったが、翌明治4年1月（1871年2月）に帰国し、2月には「大蔵省出仕」となる。さらに、5月・大蔵少丞、7月・租税権頭、10月・大蔵少輔と昇進を続け、官界のトップに躍り出る。明治7年9月には、駐米特命全権公使に任じられ、ニューヨーク副領事の富田鐵之助やサンフランシスコ副領事の高木三郎の上司となっている（吉田の経歴は、「枢密院文書・枢密院高等官転免履歴書 明治ノ一（3吉田清成）」による。以後の吉田の履歴は省略する）

(3) 横井佐平太と松村淳蔵の海軍兵学校入学

富田がミルストーンに転居した後、横井佐平太と松村淳蔵も、1869年秋までに、アナポリスの海軍兵学校入学のために、ニューブランズウィックを離れる。すでに、高橋（2014b）で紹介したように、2人の海軍兵学校入学許可の日付は、1869年12月8日であるが、海軍兵学校では10月1日から授業開始されていたのである。兵学校生徒の厳しい日課（授業）の観点からすれば、また、前年の7月27日、日本人学生の海軍兵学校入学を認める法案が成立していたことから、2人は、正式の入学許可日の前から、實際上、兵学校に入校し、生徒としての生活を送っていたと思われるのである。

高木（2005）に採録された松村淳蔵から吉田清成宛て書簡によれば、兵学校生徒の日課は、6時起床、10時消灯であるが、昼は、基礎科目（数学・天文学・フランス語・スペイン語）から砲術・航海術等を学び、夕方から軍事教練に入る。学校の規則は、極めて厳しく、禁酒・禁煙が徹底され、違反者は放校処分となっていた。厳しい兵学校生活の中、松村淳蔵は、1873年5月に、順調に4年で兵学校を卒業するが、横井佐平太は、1871年10月24日、兵学校を退学する。1869-70年度のアナポリス海軍兵学校入学者94名のうち、1873年に卒業できたのは29名に過ぎず、卒業率比率は30%ほどであったのである⁸²⁾。

*Annual Register of the United States Naval Academy*は、教官名、生徒名（学年ごと、成績順）、学事歴等が記載された小冊子である。1870-71年版には、「合衆国上下両院の決議（1868年7月27日承認）によって受け入れた生徒」の欄が設けられ、松村淳蔵と伊勢佐太郎（横井佐平太）の名前が特別に注記されているが（p.20）、一般生徒のような成績の記載はない。1871-72年版では、松村は一般生徒と同等の取り扱いを受け、兵学校2年生の名簿の16番目（45名中16番の成績）に記載されているが（p.13）、横井は、この名簿から除籍されている。また、この冊子には、「勝小鹿」

82) *Annual Register of the United States Naval Academy* の1869-70年版では、1869年秋の入学予定者は92名（松村と横井を除く）であったが（pp.18-19）、1870-71年版に掲載された1年生の人数・成績（松村と横井を除く）は、87名であった（pp.16-18）。しかしながら、2年修了時には、45名（松村を含む）となっていたのである（1871-72年版，pp.13-17）。さらに、3年修了時には、29名（松村を含む）。松村の成績は22位）まで減少するが（1872-73年版，p.12）、卒業生は、この29名（松村の成績は28位）が維持される（1873-74年版，p.9）。

も⁸³⁾、次年度の入学予定者の名簿の中に、「日本帝国、1871年6月7日入学許可、16歳4か月」として記載されている (p.18)。

松村は、アナポリス海軍兵学校を卒業した年の明治6年12月には、海軍中佐に任官し、1876 (明治9) 年には初代の海軍兵学校長に任ぜられた。なお、海軍中佐任官の件については、海軍卿・勝安房 (勝海舟) から右大臣・岩倉具視宛の「海軍中佐」任官伺い (12月2日付) が出されて承認され⁸⁴⁾、松村は、8日付で『兵学寮勤務』となっている (「癸1套秘事大日記 太政官へ申出 松村淳蔵外2名任官の件」及び「癸3套秘事大日記 太政官へ申出 松村淳蔵外2名任官の件」による)。

他方、横井佐平太は、海軍兵学校退学後に、再度、渡米する。杉井 (1984) は、この渡米を海軍兵学校への復学と推測しているが (p.126)、高木 (2005) は、横井からフェリス宛の手紙 (1872年12月4日付) には、フェリスの復学のすすめに対する謝絶の姿勢が貫かれ、復学の事実を確認できなかったとしている。それはともかくも、明治8年6月、元老院権少書記官に就任するも、10月3日に30歳で逝去する⁸⁵⁾。

(4) 日下部太郎の死

すでに紹介したように、日下部太郎は、幕府の海外渡航解禁後に福井藩から派遣された正式の留学生である。長崎の済美館でフルベッキから英語をはじめとする洋学を学び、フルベッキが彼ほど明敏な日本人は数少ないと評価するほどの人物であった。慶應3年7月13日 (1867年8月12日) にニューヨークに着き、(横井兄弟が学んでいたグラマースクールを飛ばし) この年の秋にラトガース・カレッジに入学している。日下部が入学したのは、1865年に農業と機械技術の教育を目的として新設された「3年制」の「科学コース (科学学部 (Scientific School, 後にScientific College))」である⁸⁶⁾。このとき、Griffis (1916)、すなわち、*The Rutgers Graduates in Japan* の著者のグリフィスも、ラトガース・カレッジの「古典コース (4年制)」の3年生であった⁸⁷⁾。

83) 勝小鹿 (及び同期に海軍兵学校に入学した国友次郎) の3・4年生の成績は、『海軍省公文備考類 公文類纂』の (明治9年の) 「外乾23 米国留学生勝小鹿國友次郎試験表の件外務丞通知」と (明治10年の) 「外入124 米国留学生勝小鹿國友次郎試験表の件外務大丞通知」から知ることができる。彼らの成績は、アナポリス海軍兵学校校長から駐米全権公使・吉田清成に通知され、吉田から外務大丞を経て、海軍大少丞に届けられたものである。勝小鹿の成績は、さらに海軍大輔・川村純義から東京府権知事・楠本正隆に回付され、東京府下居住の「静岡縣士族勝安芳 (ママ)」に送達されている。国友次郎についても同じ手続きがとられたが、熊本県令代理からは国友次郎の成績を親元に間違いなく届けた旨の報告書も出されている。これらの資料は、海軍省派遣の国費留学生の成績管理の状況がよく分かる資料である。

84) 第2章第2節に登場した「谷元道之」は、この伺い書よって「海軍省七等出仕」として採用されている。

85) 杉井 (1984) に採録された「伊勢君墓」の拓本 (pp.131-132) による。

86) 科学コースの教育の目的は、Corwin (1902), p.156による。科学コースの設立の根拠は、1864年4月4日に成立したニュージャージー州議会法による。日下部の1867年の科学コース入学は、Griffis (1916), p.21及び高木 (2006) による。

87) 高木 (2006) は、グリフィスを4年生としているが、グリフィスは、1869年卒業なので、正しくは3年生である。グリフィスは、ラトガース・カレッジ卒業後に、ニューブランズウィック神学校に進み、1年間在籍した後、日本での教育活動に従事している (Corwin (1902), p.498)。当時は、古典コース (古典学部) のような伝統的なカレッジ教育を終えていることが、神学校進学重要な要件であった。

日下部の大学生活については、高木（2006）において詳しい紹介がされているので、本稿では省略する。日下部は、フルベッキの見立て通りに、ラトガース・カレッジで勉学に励み、全米の大学の成績優秀者で構成されるΦBK（ファイベータカップ）協会会員にも推薦されている⁸⁸⁾。

学業は順調であったが、日下部も、横井大平と同じく、肺結核にかかっていたのである。日下部は、1869年7月、転地療養を兼ねて、1週間ほどの小旅行に出る。「ニューヨーク～ナイアガラの滝～サウザンド・アイランド～モントリオール～キースビル」を経て、ニューヨーク州のレイク・ジョージ（Lake George）に至る旅行である。この行程が記載されたヴァン・アースデル夫人宛の手紙（1869年7月9日付）の末尾は、「あと5・6週間はここに（レイク・ジョージ）いたいと思います」で結ばれている⁸⁹⁾。

健康を取り戻したように見えた日下部であったが、この1か月後には、本章第2節で紹介した畠山の英文の手紙（1869年8月11日）のように、日下部の健康が悪化している。このため日下部は、（上の小旅行に同伴したか否かは不明であるが）それまでレイク・ジョージにいっしょにいた勝小鹿を残したまま、ロング・アイランドのフラットブッシュ・アカデミーへ転地する。そこで、富田鐵之助は、8月9日にミルストーンを立ち、勝小鹿を迎えに行きロング・アイランドに送り届ける。

畠山義成から横井佐平太宛の書簡（1869年8月24日付）では、日下部がロング・アイランドのフラットブッシュ・アカデミーに滞在しているが、壮健であること、勝小鹿もレイク・ジョージからここに来たことに加え、松村淳蔵も来たので賑やかであることが記載されている⁹⁰⁾。日下部の健康は、この書簡では、「壮健」となっているが、横井佐平太が日下部からの手紙を受け取り、これをもとにヴァン・アースデル夫人宛に書いた手紙（1869年8月25日付）では、「健康状態は決して良くはなく、レイク・ジョージには長くいられなかったようです。ニューヨークにもどり、現在はフラットブッシュ・アカデミーにいます。いまはそこが良いと思います」となっている⁹¹⁾。

9月から新学期が始まるが、日下部は、富田がいるミルストーンへ転居する。畠山義成から吉田清成宛ての書簡では、

「○日下部生には弱体保養之故を以て Millstone へ転宿、毎日懸て爰許え来校

○富田生には先づ暫時英語を学ばんと Bro Corwin 之許え混て勉強なり」

となっている。

この書簡は、『吉田清成関係文書三』からの引用であるが（p.33）、ここで書簡の日付が問題と

88) ΦBK（ファイベータカップ）協会は、全米で最も古い歴史をもつ「学生結社」である。高木（2006）によれば、ラトガース大学では、1869年に支部が置かれ、グリフィスもこの協会員に選ばれ、1870年には、日下部ほか8名が選ばれている。ΦBK協会会員に授与されるゴールド・キーは、1871年に、福井の明新館の教師となったグリフィスから日下部の父に渡されている。

89) ヴァン・アースデル夫人宛の手紙（1869年7月9日付）は、高木（2006）に採録されている。レイク・ジョージでの滞在先は、East Lake GeorgeのAllen Sheldan 方である。

90) この書簡については、すでに第3章第2節で紹介しているので、第3章を参照のこと。

91) この横井佐平太からヴァン・アースデル夫人宛の手紙（1869年8月25日付）は、高木（2006）に採録されている。

なる。書簡の末尾が「龍十月九日 井様 杉浦」となっていることから⁹²⁾、『吉田清成関係文書三』の編集者は、「慶応(4)年9月5日 [('68) 年10月9日]」の見出しをつけている。「龍」は、一般には慶応4年(明治元年)をさすが、この書簡の「龍」は、畠山の誤記の可能性が非常に大きい。第1に、この時期に富田と高木は日本への帰国途上であったことである。すなわち、慶応4年6月20日(1868年8月8日)、勝小鹿を横井兄弟に託して、ニューヨークからアラスカ号に乗船し、明治元年11月17日(1868年12月31日)、横浜到着である。第2に、畠山や吉田は、富田と高木が帰国する1か月ほど前にニューブランズウィックに来ており、しかも同じチャーチ・ストリートに居住していたから、帰国の事実(富田の不在)を知っていた。第3に、1869年7月頃に吉田がニューブランズウィックを離れたと推測されることである。これは、先に紹介した畠山から種子島宛の書簡(1869年8月2日付)に記載された次の文からの推測である。すなわち、

「○Nagai left here for Wilbraham Acad. on last Tuesday 27th & he had about 50\$. . .

○永井生之proposal that」

である。永井五百介(吉田清成)は、1869年7月27日にウィリブラハム・アカデミーに向けてロング・アイランドのフラトブッシュ・アカデミーを立てているのである。このような点から、1868年には、富田がニューブランズウィックを不在にしており、そもそもコーウィンから英語を学ぶことができないのである。「龍十月九日」の書簡の日付を1869年10月9日すれば、すべての点で整合的になる⁹³⁾。日下部は、1869年秋には体力が相当弱まり、保養を兼ねて、ミルストーンに転居し、そこから毎日、ラトガース・カレッジまで通学するようになったのである。すでに述べたように、ミルストーンの牧師館には、富田が住まいしていたことから(8月には、ここから勝小鹿をレイク・ジョージまで迎えに行く)、日下部は、改革派教会のゆかりの地ミルストーンで、「教会関係者の保護・看病ををうけ」ることになったが⁹⁴⁾、富田も、ちょうど10歳年下の日下部の精神的な支えとなったのである。

しかしながら、日下部の病状は好転せず、1870年4月には、

「○日下部生には追々病体に相成候処、就中近比に到り愈弱身、

丁度沼川(横井大平)之有様に少は似掛り」

という状態になっている(『吉田清成関係文書三』, p.36に所収の畠山義成から吉田清成宛ての書簡(1870年4月3日付))。この書簡には、病状が良ければ、17日のニューヨークを出航する船で帰国させたい旨が書かれていたのである。

日下部太郎は、この10日後の1870年4月13日(金)の12時30分頃、逝去した。葬儀は、4月15日に行われ、日下部の遺体は、ニューブランズウィックのウィロー・グローブ・セメタリーに埋葬

92) 「井」は、永井五百介(吉田清成)のことであり、杉浦(弘蔵)は、畠山義成の変名である。

93) 高木(2006)は、特段の理由を挙げずに(日下部の病状から整合性を考えてか)、1869年10月9日として考察を進めている。

94) 高木(2006)の7ページからの引用である。

された⁹⁵⁾。

翌4月16日には、日本人留学生が連署（ただし、同一人物の筆跡での連署）でラトガース・カレッジのキャンベル学長宛に、日下部に対する生前の厚情と葬儀に際しての温情に感謝する礼状を出している。高木（2006）の調査では、

島津（又之進）、丸岡（武郎）、杉浦（弘蔵）、勝（小鹿）、高木（三郎）、
富田（鉄之助）、平山（太郎）、橋口（宗儀）、白峰（駿馬）、津田（亀太郎）、
林（玄助）、永井（五百介）、児玉（淳一郎）

の13名であり、彼らが日下部の葬儀に参列した日本人留学生ということなる。

これまでに本稿に登場した人物の中では、横井大平は帰国し、横井佐平太と松村淳蔵は海軍兵学校生徒になっていたから、葬儀には、勝海舟関係の勝小鹿・富田鐵之助・高木三郎と薩摩出身の杉浦弘蔵（島山義成の変名）・永井五百介（吉田清成の変名）が参列していたのである。ところで、この日下部逝去の件は、小鹿を通じて勝海舟にも伝えられていたのである。すなわち、「海舟日記」の記載では、

[明治3年 6月25日] 「伊東友四郎<福井藩士>江日下部之事申遣す、妻木江届方頼ム」
である。

明治2年になると、日本の政情も安定し、外国留学者も増える。とくに、明治3年以降は、公費留学・私費留学を問わずに急増する。上の中では、残りの8名がこれにあたるが、次章では、彼らを含めた新しいアメリカ留学生について考察することにしよう。

なお、日下部の病死に関する公式記録は、「米国留学生福井藩日下部太郎病氣ニ付帰朝ヲ乞フ尋テ該地ニ於テ死亡」である（『太政類典（第1編：慶応3年～明治4年）』、第119巻、件名番号067）。すなわち、明治3年3月8日（1870年4月8日）、岡本晋から福井藩に日下部の病氣帰国願いが出され、さらに、これに表書きをつけたものが福井藩から外務省を経て、3月28日に太政官辦官宛に出されたが、4月29日（西暦5月29日）には、外務省から「ニウブンスウイキ」において3月13日（西暦4月13日）病死の旨の届けが出されている。

第4章 新たなアメリカ留学者

1 海外留学推進政策

前章の章末で述べた1870年4月16日の日下部太郎の葬儀には、これまでに言及してきたアメリカ留学生に加えて、島津又之進、丸岡武郎、平山太郎、橋口宗儀、白峰駿馬、津田亀太郎、林玄

95) この葬儀の模様については、高木（2006）を参照のこと。このセメタリーの一部には、環状に9つの墓石が建っている。1870年逝去の日下部から1886年のTatsuzo Sakatani までのもので、ほとんどが留学途中の20歳台の若さでの死去であった。この中の小さな墓石は、高木三郎・須磨夫妻の幼女のもので、1877年9月5日に死去している（Griffis（1916）、pp.28-29）。高木は、明治9（1876）年11月、サンフランシスコ副領事からニューヨーク領事に昇格・転任しているが、幼女の死去は、その1年後のことである。（『高木三郎翁傳』、pp.58-60）。

助、児玉淳一郎も参列している。明治政府が、指導的な人材を育て、新しい体制の指導者としての活躍することを期待し、海外留学を推進する種々の政策を、順次、実行に移したことから、明治3（1870）年からアメリカ留学生の数が増加し出したのである。実際、石附（1992）によれば、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスへの留学生は、明治3年に急増し、翌明治4年には、（フランスを除く）この3か国への留学がピークに達する（pp.203-207）。国別では、アメリカ留学がほぼ4割を占めていたが、明治5・6年には、欧米ともに、留学抑制策により激減する。

幕府は、開国とともに、緊急を要する海防問題に対処するために、軍事技術の修得を目的に、文久2（1862）年にオランダへ留学生を派遣する⁹⁶。慶應年間には、幕府留学生の留学先もロシア、イギリス、フランスと広がり、留学目的の軍事技術の伝習から普通学へ変わる。他方、幕府は、慶應2（1866）年4月に、条約締結国（アメリカ、オランダ、ロシア、イギリス、フランス、ポルトガル、プロシア）への藩費・私費等による留学を認める布達を出し、その準備作業に入る。本稿で紹介した薩摩藩第1・2次留学生や横井兄弟は、この布達前の留学であり、日下部太郎や勝小鹿・富田鐵之助・高木三郎は、この布達に従った初期の留学であった。明治に入ると、大久保利通によって、日本のトップリーダーとなる人材の育成のために海外留学の必要性が強調され、この考え方が岩倉具視にも受け入れられ、順次、具体化されていく。その第一歩が、高橋（2014b）で論考したアメリカ私費留学生に対する「学資給付」であった。明治2年4月には、渡航推進の一環としてパスポート発給の簡素化に踏みきり、「海外渡航規則」を定め、明治3年1月には、これを補足する「外国渡海之儀出願之規則」を定めた。明治3年6月には、外務省から海外留学に関する意見書が出され、これが同年12月の「海外留学規則」として結実する。明治4年になると、欧米先進国の軍事・兵制の導入や北海道開拓事業の推進のために、陸軍兵学寮、海軍兵学寮や北海道開拓使からも留学生が派遣されたのである。

2 新たなアメリカ留学者

このような海外留学推進策によって明治2（1869）年の後半からアメリカ留学生数も次第に増加し始め、1年後の明治3（1870）年秋には、アメリカに到着したばかりの大学南校からの留学生を含め、40名を越える。その3分の1がニューブランズウィック留学であった。すなわち、ニューブランズウィック（ミルストーンを含む）13名

勝小鹿、高木三郎、杉浦弘蔵（畠山義成）

旭小太郎（岩倉具定：岩倉具視の第三子、明治17年岩倉家家督相続）

龍小次郎（岩倉具経：岩倉具視の第四子）

服部一蔵（山口藩：岩倉兄弟に随行）、山本重輔（山口藩：岩倉兄弟に随行）、

南部英麿（盛岡藩前知事の弟）

奈良真志（盛岡藩：南部英麿に随行）

96) このパラグラフは、石附（1992）のp.29, p.44, pp.98-99, pp.178-185, pp.188-189及びp.192を手短かに整理したものである。

土倉正彦（岡山藩）、白峰駿馬（長岡藩）

富田鐵之助（ミルストーン在住）

折田彦一（彦市）（ミルストーン在住：鹿児島藩，岩倉兄弟に随行）

ブルックリン（ニューヨーク） 6名

東隆彦（華頂宮）

藤森圭一郎（華頂宮家臣，元盛岡の人）

野村一介（鹿児島藩），高戸賞士（福山藩），五十川基（福山藩）

柳本直太郎（元福井藩：大学南校小助教）

ニューヘブレン 6名

大原令之助（吉原重俊，鹿児島藩），湯地治右衛門（湯地定基，鹿児島藩），

丸岡武郎（佐土原藩主の二男），町田啓次郎（佐土原藩主の三男）

橋口宗儀（佐土原藩），児玉章吉（佐土原藩）

ボストン 7名

島津又之進（佐土原藩主の長男）

吉田彦磨（種子島啓輔，鹿児島藩），平山太郎（佐土原藩）

林源助（熊本藩），津田亀太郎（熊本藩），

井上六三郎（築前藩），本間英一郎（築前藩）

アナポリス（アメリカ海軍兵学校） 2名

松村淳蔵，伊勢佐太郎（横井佐平太）

ミドルタウン（コネチカット州） 1名

永井五百助（五百介）（吉田清成：アメリカ留学生の取り締まり）

イサカ（ニューヨーク州） 1名

長沢鼎（鹿児島藩）

フィラデルフィア 1名

手嶋誠一（菊間藩）

大学南校留学生（同行者を含む） 5名

目賀田種太郎（静岡藩）

松本壮一郎（大垣藩），長谷川雉郎（姫路藩），

高良之助（徳島藩：同行者），山口要吉（徳島藩：同行者）

である。さらに、上記以外にも、日下部太郎（死亡）、横井大平（帰国）、「久留米藩 山田何某」、さらに「右之外脱走ノ姿ニテ「ミチガン」杯ニモ留学セル本邦人アリト」である。

上の明治3（1870）年のアメリカ留学生名簿は、松本壮一郎の「亜行日記」の記載内容（瀬戸口（2010）に採録）と『男爵目賀田種太郎』, pp.24-26の記載内容をいくぶん補正したものである。『男爵目賀田種太郎』の当該箇所は、その冒頭の「松本壮一郎氏の「亜行日記」と先生の自記とを綜合すれば」にあるように、明らかに「亜行日記」を参照して執筆・編集されており、本稿で

の補正箇所も共通している⁹⁷⁾。なお、公式の名留学生名簿としては、明治3年6月に外務省から太政官辨官宛の上申「海外留学生姓名調査書」がある（『太政類典（第1編：慶応3年～明治4年）』、第119巻、件名番号069）。この名簿では、勝小鹿は「徳川新三位中将家来 勝安房惣領」、また高木三郎と富田鐵之助は「全 勝安房家僕」の肩書になっている。

上のアメリカ留学生に関する若干のコメントをする前に、やや余談になるが、松本壮一郎と本稿に関連する「亜行日記」の一部を紹介する。

明治3（1870）年8月、大学南校は、その生徒の中から、目賀田種太郎（静岡藩士）、松本壮一郎（大垣藩士）、香月経五郎（佐賀藩士）、長谷川雉郎（姫路藩士）の4人を選抜し、（当初の予定ではイギリス留学であったが、後に新興国アメリカへの留学が有益と判断され）アメリカ留学に出す。彼らが、文部省による最初の国費留学生である。

松本・目賀田・長谷川の3人は、明治3年9月29日に横浜からチャイナ号に乗船し、10月24日、サンフランシスコ着く。その後、鉄道でロッキー山脈を越え、閏10月4日のニューヨーク着であった。ニューヨークでは、アメリカ留学中の華頂宮（東隆彦）に随従の柳本・藤本や岩倉具視の息子2人に随従の服部・折田等と会う。また、オランダ改革派教会のフェリスにも会って、当時、大学南校教頭フルベッキからの紹介状を渡している⁹⁸⁾。高木三郎も、閏10月11日、12日の両日、松本壮一郎を訪ねてくる。11日には、高木に案内され、ハドソン川を渡り、ニューブランズウィックに行き、旭（岩倉具定）に会う。夜12時にホテルに戻る。12日は、龍（岩倉具経）の下宿先を訪問する。南部公にも会う。途中、折田・山本とも出会う。正午頃、折田とともに、勝小鹿の下宿先を尋ね、そこで杉浦（畠山義成）と会い、上のアメリカ留学の日本人名を聞きとったのであった。

さて、明治2（1869）年に入り最初にニューブランズウィックに来たのは、長岡藩の白峰駿馬と思われる。白峰は、海舟門下であったから、富田や高木とも旧知であり、富田・高木の緊急一時帰国の際に、偶然にも、香港で出会った人物でもあった（『高木三郎翁小傳』、p.29）。日下部

97) 『男爵目賀田種太郎』では、本稿と同様に、留学地の別の名簿の形式をとり、「亜行日記」では、身分別もしくは出身地別の名簿の形式をとっているが、補正すべき箇所は共通している。

後述するように、この名簿は、松本壮一郎が高木三郎に案内されてニューブランズウィックの勝小鹿の下宿先に行った際に、居合わせた畠山義成から聞き出した名前である。こうしたためか、これらに記載された名簿から、「高木三郎」が脱落している。また、ニューブランズウィック近隣のミルストーンは、アメリカの地勢をバード・ビュー的に見れば、同じ地区に区分されるべきであろうが、別地区として区分されている。しかも、松本壮一郎の筆づかい（ペンづかい）のためか、ミルストーンの「ミ」が「シ」や「モ」と判読されている（ちなみに、上のミドルタウンについては、「亜行日記」では「ミッドルトウン」であるが、『男爵目賀田種太郎』では、「シツドルトウン」となっている）。

『男爵目賀田種太郎』の執筆者・編者は、「高木三郎」の脱落に気付いたためか、次ページで高木の身分を「辦務使代理」としているが、これは明らかな誤りである。高木の外務省九等出仕（ワシントンの辦務使館書記）は、この1年数か月後の明治5年2月のことである。また、森有禮代理公使が一時帰国のために、高木に「臨時代理公使（辦務使代理）」を委嘱するが、これは明治6年3月のことである（『高木三郎翁小傳』、pp.47-48）。

98) このときの「教頭」の職は、事実上の「校長」の職にあたる。フルベッキ自身は、1870年7月21日のフェリス宛の書簡の中で、「数日前に文部卿と大学の当局者は、わたしを大学の校長に推挙したので、私の職務はさらに増し加わりました。」と記している（『フルベッキ書簡集』、p.179）。

の葬儀の後にいったん帰国するが、華頂宮（東隆彦）に随行して、再度、渡米する（第6章第3節を参照のこと）。

次は、鹿児島藩の支藩である佐土原藩の島津又之進・丸岡武郎・平山太郎・橋口宗儀と熊本藩の林玄助・津田亀太郎である。島津又之進は、藩主の長男、丸岡武郎は、藩主の二男であるが、彼らの弟の町田啓次郎が海舟宅に寄宿し教育を受けるなど、海舟とも昵懇であった。彼らは藩費による留学ということもあり、ニューブランズウィック居住等については、海舟が世話をしていたのである（第6章第2節を参照のこと）。

佐土原藩は鹿児島藩に隣接し、しかもその支藩でもあることから、世子である島津又之進等のアメリカ留学は、鹿児島藩士のあいだでは大きな話題となっていたのである。海軍兵学校在学中の松村淳蔵から吉田清成宛の書簡（1869年12月18日付）の

「佐土原世子君にも既に新約克（ニューヨーク）に御安着、即今新ブランジーキ（New Brunswick）にて御滞学（ママ）の哉に被仰聞候、さてさてプリンスの世子として、如斯かななかの遠国まで御航海被遊候事、実に古今未曹有（ママ）の事にて御同慶の至り御坐候・・・」は、これを示している（この書簡は、『吉田清成関係文書三 書簡篇3』、p.133に採録）。

なお、肥後藩（熊本藩）の林玄助・津田亀太郎は、同藩の横井佐平太等との縁で来着したと思われるが、この熊本藩の2人も、藩費による留学であった。

上で取り上げた留学生たちは、1869年12月までにはニューブランズウィックに来着しており、翌1870年4月の日下部太郎の葬儀に参列することになったのである。

さて、岩倉具定は、随行の山本重輔・折田彦市とともに、明治3年2月（1870年3月）に日本を出発する。1870年夏までにニューブランズウィックに来着し、先に紹介したようにルーシー・トムソン方に下宿するが、ほどなく、折田彦市は、コーウィン牧師がいるミルストーンに移る（なお、1870年の人口センサスからは、岩倉具経と服部一蔵に関するデータを未だ発見できないままである）。

明治3（1870）年7月には、華頂宮博経親王（変名：東隆彦）がひとりの書生としてアメリカに留学した旨を願い出て、皇族の海外留学第1号として許可され、翌8月には随行者とともに渡米する（石附（1992）、p.198）。すなわち、『太政類典（第1編：慶応3年～明治4年）』では、まず「華頂宮東京遊学ノ願ヲ允シ位階返上ノ願ヲ允サス（明治3年2月13日、第119巻・件名番号031）」に続き、「華頂宮米国勤学ヲ命ス（明治3年7月、第120巻・件名番号003）」である。しかしながら、当時のフェリスの思い出話では、もし日本人を下宿させるなら、この下宿を引き払うとか、アイルランド人の家政婦も暇をもらいたいとかの脅しを下宿の主人にかけていたことから、日本人がニューブランズウィックでの下宿先を探すのは極めて困難であった（Griffis（1916）、pp.33-34）。とくに華頂宮一行の場合は、礼儀正しい紳士であったにもかかわらず、フェリス自身が2日かけても不首尾に終わったのである。こうした事情もあってか、明治3（1870）年閏10月には、ブルックリンに滞在していたのである。

南部英麿（前盛岡藩主の弟）も、華頂宮一行とともに渡米し、ニューブランズウィックに来着

する。藤森圭一郎は、元盛岡藩士であったが、渡米時には華頂宮の家臣となっていた。この南部英麿には、奈良真志が随行していた⁹⁹⁾。後に南部英麿は、大隈重信の娘と結婚することから、ニューブランズウィックでは、「Nambu Okuma」と呼ばれるようになる (Griffis (1916), pp.26)。

この1870年夏には、岩倉兄弟一行に加えて、丸岡武郎の弟の町田啓次郎と随行の児玉章吉も渡米する。さらに、秋には華頂宮・南部英麿一行のニューブランズウィック来着が決まり、ニューブランズウィックは日本人留学生で溢れ、下宿探しがいっそう難渋することが確実にになると、渡米から1年近くたちアメリカの生活も慣れてきた先の佐土原藩一行は、この状況を避けるべき彼らの来着前に、ボストンに移る。1870年の人口センサスでは、島津又之進・橋口宗儀・平山太郎(及び氏名が特定できない日本人2名)が、ボストン第14地区に居住していたことが明らかになっている (菅 (2009))。

町田啓次郎・児玉章吉のアメリカ来着もあって、佐土原藩一行は、ボストンと薩摩藩 (鹿児島藩) 第2次留学生の吉原重俊・湯地定基のいるニューヘブントに分かれ、留学生を送ることになる。

上のアメリカ留学生名簿は、畠山義成から聞き取った名前を整理した名簿であることから、その多くが、ニューブランズウィックか薩摩藩 (鹿児島藩) のいずれかに関係している¹⁰⁰⁾。これと関連しない者は、ごく少数である。

畠山義成がまったく把握できていない人物は、上の「右之外脱走ノ姿ニテ「ミチガン」杯ニモ留学セル本邦人アリト」である。上の名簿には、アーモスト・カレッジに留学中の「新島襄」の記載がないことから、これが新島襄とも想定されるが、アーモスト・カレッジはマサチューセッツ州ハンプシャー郡アーモスト (ボストンの西150キロ) に所在していることや、吉原重俊と湯地定基がモンソン・アカデミー在学中にアーモスト大学の新島襄を訪ねており、新島襄の情報が畠山等にも伝えられていると推定されることからすれば、これが新島襄に関する記載である可能性は低い。なお、新島襄は、アーモスト・カレッジ学生寮で生活しており、1870年人口センサスでは、「Neesima Joseph, 27, M, WC, Student, Yeddo Japan」として記録されている。

99) 奈良真志は、一般には知られていないが、帰国後は、初代海軍主計学校長や海軍省主計総監を歴任した。明治27 (1894) 年には、彼の父の伝記である『奈良養齋傳 附 奈良孝齋傳』を著している。奈良養齋は、享和3 (1803) 年7月に尾去沢銅山近くの村で生まれ、25歳で銅山役人に取り立てられた後、36歳で盛岡藩藩士に列せられ、安政5 (1858) 年には盛岡藩勘定奉行になっている (高橋 (2009) を参照のこと)。

100) 1870年人口センサスではアメリカ在留日本人は55名とされていたが、菅 (2009) はこの55名をアメリカ国立公文書館マイクロフィルム版から特定するとともに、「出生地: Japan」の記載に着目し、新たに5名を追加している。この60名のうち留学生と思われる者は25名である。菅 (2009) の調査によって、富田鐵之助、高木三郎、大原令之助 (吉原重俊)、吉田彦麿 (種子島啓輔)、旭小太郎 (岩倉具定)、島津又之進、新島襄等の名前は特定されたが、勝小鹿、畠山義成、吉田清成、松村淳蔵、横井佐平太のアメリカ留学パイオニア組と龍小次郎 (岩倉具経)、服部一蔵、丸岡武郎等の1870年留学組については、そもそも、この60名の中にリスト・アップされていない。

第5章 ブライアント・ストラットン・アンド・ホイットニー・ビジネス・カレッジ

1 ビジネス・カレッジと鐵之助の英語力

明治3年秋、上で述べた新しいアメリカ留学生たちがニューブランズウィックやミルストーンにやって来る。富田鐵之助のアメリカ留学も3年が過ぎるが、数え36歳の鐵之助にとっては、学び始めて数年の英語は、まだ荷が重い。コーウィン牧師の下で1年以上も、英語や欧米の古典・教養を学んではいたが、アメリカの伝統的な由緒ある大学に入学するほどの英語力はなかった。このためアメリカ滞在の経験から実業界で活躍することこそが富国に寄与し、日本のためになると判断して、ビジネス・カレッジに入学し経済学的知識の修得する道を選んだのであった（先に紹介した『高木三郎翁小傳』、p.43を参照のこと）。この時点から、明治15年の日本銀行創立時に総裁となる吉原重俊と副総裁となる富田鐵之助とは、対照的であった。吉原は、富田よりも10歳も年少であるが、薩摩藩第2次留学生の中で、当時から英語のみならず種々の学識にも優れ、他の留学生の心配をものともせず¹⁰¹⁾、1869（明治2）年にエール・カレッジに入学したのである。

富田が入学したビジネス・カレッジは、ニュージャージー州ニューアークのブライアント・ストラットン・ホイットニー・アンド・ビジネス・カレッジ（Bryant, Stratton and Whitney Business College）である。このビジネス・カレッジは、ブライアント兄弟と義弟のストラットンによって1856年に創立された新しいカレッジである。しかも、全米各地で共同経営者を募る連鎖方式（フランチャイズ方式）のカレッジであった。1870年頃は、その最盛期にあたり全米で50校ほどが設置されていた。ビジネス・カレッジでの授業科目の標準化が徹底され、このフランチャイズに加盟するどのビジネス・カレッジでも、同じ内容のものが教えられ、授業料も、年間40ドルと安かった（先に紹介したように、グラマースクールの初級クラスでも100ドルの授業料であった）。

このビジネス・カレッジのニューアーク校は、ブライアント兄弟とウィリアム・C・ホイットニーとの共同経営であり、ホイットニーが校長を務めていたのである。富田鐵之助は、明治3年11月（1870年12月）、ビジネス・カレッジに入学する。富田は、ニューアークに来た最初の日本人で、快活で気が利くことから友人も多かったが、英語の力が不足していた¹⁰²⁾。そこで、ホイットニーは、富田を自宅に寄宿させ、妻アンナから英語を学ばせようとしたのである¹⁰³⁾。

表4は、1870年6月3日に実施されたニュージャージー州エセックス郡ニューアーク市第9区の人

101) 例えば、吉原と同じ薩摩藩第2次留学生の吉田彦磨（種子島敬輔）から第1次留学生の永井五百介（吉田清成）宛書簡（1869年8月16日付）には、「○大原令之助（吉原重俊）Yale行は六ヶ敷かりしが、けれども弥差越賦に決せり」ある（『吉田清成関係文書二 書簡篇2』、p.253）。

102) 『ドクトル・ホイットニーの思ひ出』、pp.7-17による。これは、W.C.ホイットニーの長男・ウイリスの妻・メアリーと妹・クララ（勝海舟の三男・梶梅太郎の夫人）が、ウイリスの思い出を語ったものとされている（ウイリスは、東京・赤坂病院を開き、英語圏に日本医学史を紹介した人物として知られている）。この『思ひ出』は、「ホイットニー夫人・梶夫人 共著」となっているが、全文が日本語で書かれ、翻訳者の記載もなく、（両夫人から聞き取り構成したものと思われる）実質的執筆者は不明である。

103) Whitney (1878) によれば、1873年のホイットニー家の住所は「711 Broad Street, Newark」である。

口センサスの調査結果から抽出したホイットニー家の家族構成である。Whitney (1878) では、ウィリアム・コグスウェル・ホイットニーは、1825年1月25日生まれとされているので (p.704)、人口センサスの年齢は、本来は45歳とされるべきものであった。妻アンナは、(富田よりも1歳年長の) 1834年のニューアーク生まれであるので、人口センサスにおいては、本来は、36歳 (もしくは35歳) と記載されるべきものであった¹⁰⁴⁾。

ホイットニーの出生地は、この表が示すように「Georgetown, D.C.」である (Whitney (1878) でも「Georgetown, D.C.の生まれ」とし (p.704)、日本語文献では『都史紀要8 商法講習所』が「首都ワシントンの郊外ジョージタウンに生れた」としている (p.27))。1870年まで「コロンビア特別区 (the Discript of Columbia, 一般にD.C.と略記) は、ワシントン市とジョージタウン等から構成されていた(1870年人口センサスにおけるコロンビア特別区は、ワシントン市第1～7区、ジョージタウン、7番ストロートの東方、(ワシントン郡) 西地域の10地域に区分され、調査が行われた)。1871年にジョージタウン等がワシントン市に編入され、現在では、これらを含めて「ワシントン, D.C.」と表記されるにいたっている。これらを踏まえると、ホイットニーの出生地は、いま風に言うと、「ワシントン, D.C.のジョージタウン」ということになる。

娘クララは、1860年生まれであり、第4表のように10歳であった (このクララは明治19 (1886) 年に勝海舟の三男・梶梅太郎と結婚する)。この人口センサスでは、クララの妹アディは7歳と記録されているが¹⁰⁵⁾、彼女は「1868年6月17日生まれ」である。渋沢 (1981) の「家系図 (p.10)」では、アディは「1869年生まれ」とされ、内田 (2015a) では「1868年生まれ」とされているが、『クララの明治日記 下』の1879年6月17日条の「今日はアディの11歳の誕生日なので (p.115)」の書き出しからすれば、内田 (2015a) の「1868年」説が正しい。クララの兄ウィリスは、1855年生まれであるが、人口センサスの個所には記録されていない¹⁰⁶⁾。彼は15歳であり、ホイットニー家か

第4表 1870年人口センサス：ホイットニーとその家族

家屋番号	世帯番号	氏名	年齢	性別	カラー	職業	出生地
4	6	Whitney Wm C.	44	M	W	School Teacher	Georgetown D.C.
		Anna L.	30	F	W	Keeping House	New Jersey
		Clara	10	F	W		New Jersey
		Addie	7	F	W		New Jersey

104) 妻アンナの出生年・出生地は、Whitney (1878) のp.704による。は、子どもの出生年は、渋沢 (1981) のp.10及び内田 (2015a) によるが、内田 (2015a) では、ホイットニー・ファミリー全員の生年月日、没年月日、婚姻年月日まで調査が行われていることを付記しておく。

105) 『クララの明治日記』では、クララは、妹の名前をつねに「アディ」と記しているが、翻訳者による「はしがき」では、「アディことアデレイデ (p.9)」であり、渋沢 (1981) では、「アデレード」である。

106) ウィリスは、1879年9月、最初のアメリカ人学生として東京大学医学部に通学し始める (内田 (2015c))。その後ペンシルバニア大学医学部を卒業し医師になっている。日本に戻った後、アメリカ公使館の通訳官を務めながら医師としての診療所を開いていたが、明治19 (1886) 年に、勝海舟から敷地を取得し「赤坂病院」を開院している (現在は、その一部が日本基督教団赤坂教会敷地となっている)。

ら離れて、中等教育を受けていたと思われるのである。なお、上の人口センサスの範囲を超えた「家系図」については、Whitney (1878)、渋沢 (1981) 及び内田 (2015b) を参照されたい。ちなみに、Whitney (1878) は、その著書名 *The Whitney Family of Connecticut* が示すように、ホイットニーの先祖が、17世紀にイングランドからコネチカットに移住以降の一族の家系を辿りまとめたものである。本稿のウィリアム・C・ホイットニーは、アメリカ移住の第7世代にあたり、3,873番目に記載されている（総数は、第10世代の20,361番までであるが、ウィリアムの子息については、著者（フェニックス・S）への報告がなかったことから、この著書から割愛されている）。

ウィリアム・C・ホイットニーは、ブライアント・ストラットン・ホイットニー・アンド・ビジネス・カレッジの経営に携っていたことから、この人口センサスでは、15,000ドル相当の不動産を所有していたことが記録されている。ニューアーク市中心部の居住者としては目立つほどの資産家ではないが、ニューアーク市近隣の居住者から見れば、相当の資産家であった。

富田鐵之助は、このような家族構成のホイットニー家に寄宿しながら、ホイットニーが校長を務めるビジネス・カレッジで学ぶことになる。しかしながら、アメリカに滞在し3年が過ぎたが、依然として英語力が不足していたことから、ホイットニー夫人アンナから英語を学ぶことになる。そして、富田は、コーウィン牧師から英語を学んでいたこともあってか、聖書は「最も純粋な英語」で書かれているとして、夫人に聖書の勉強まで申し出るようになる（『ドクトル・ホイットニーの思ひ出』, pp.8-9）。

ホイットニー家は長老派教会に通ってはいたが、ごくふつうの信仰心をもっていたにすぎなかったため、夫人はこの富田の申し出に衝撃を受けるが、これを契機に信仰を深める。富田に聖書を教えることを通して、「真の幸福を見出し」たのである（『ドクトル・ホイットニーの思ひ出』, p.10）。やがて、富田を通して日本にも関心をもち、夫のビジネス・カレッジの経営が悪化していたこともあって、1872（明治5）年12月頃には、日本に行き日本のために働くことを志すようになるが、実際に日本行きが実現するのは、1875（明治8）年8月のことである。森有禮と富田鐵之助が日本の商業教育のための教育機関の設置の必要性を説き、これが「商法講習所（一橋大学の前身）」として実現し、ホイットニーがこの講習所の教師として招かれたためである。

渋沢 (1981) は、「富田の語学力不足がこの物語の発端となったのはなんとも機縁というべきであった (p.16)」と述べているが、富田の英語力不足を端緒としたホイットニー・ファミリーの来日は、「海舟とホイットニー」の物語の発端となる、すなわち、「商法講習所（一橋大学の前身）」の開設、クララと勝海舟の三男・梶梅太郎と結婚、ウィリスによる赤坂病院の開院等の発端となったのである。

2 ビジネス・カレッジのカリキュラム

先に述べたように、富田鐵之助は、ホイットニー家に寄宿しアンナ夫人から英語を学んでいたが、留学先は、ホイットニーが校長を務めるビジネス・カレッジである。1870～1871（明治3～4）年頃のブライアント・ストラットン・ホイットニー・アンド・ビジネス・カレッジのカリキュラ

ムは、今のところ不明である。しかしながら、1875（明治8）年9月開学の「商法講習所」での講義は、ホイットニーのビジネス・カレッジの教育内容を取り入れ、ホイットニーが英語の教科書を使って英語で行われたとされていることや、連鎖方式のビジネス・カレッジの特徴である「模擬商業実践」も取り入れていたことから、大まかではあるが、明治7年11月の福澤諭吉の「商學校を建るの主意」や明治9年8月の「商法講習所略則」から、その内容を類推することができる。

森有禮が、代理公使在任中に¹⁰⁷⁾、商業教育機関の設置を発想し、富田鐵之助もこれに賛成し尽力したが、実際に商法講習所が開学するまでに3年以上を要している。森は、明治6年7月に賜暇帰国し12月には外務大丞に任ぜられる。帰国後、商業教育機関の設置に尽力するも実を結ばなかったが、転機は、明治7年の富田鐵之助の賜暇帰国である。「森有禮、富田鐵之助兩君の需に應じて¹⁰⁸⁾」、福澤諭吉が書いた「商學校を建るの主意」、いわゆる「商法講習所設立趣旨書」によるキャンペーンである。良く知られているように、「職業の軽重なし」とし、商業の重要性を説き、商業教育と商學校設立の必要性を力説し、その教師としてホイットニーの招聘を予告したパンフレットであった。

この福澤の「商法講習所設立趣旨書」には、「商法學校科目並要領」が添えられているのである（『福澤諭吉全集 第20巻』, pp.125-127に採録）。『福澤諭吉全集 第20巻』の編集者の註では、「恐らく福澤の筆に成つたものではないと思はれるが（p.125）」としているが、『叢書紀要8 商法講習所』では、「商法學校科目並要領」は開設前の計画書であり、アメリカにおけるチェーン・システムによる商業学校の規則書をそのまま移し植えたものと思われる（p.62）」として、この「商法學校科目並要領」を大いに評価しているのである。

第1の特徴は、ヨーロッパの商会や銀行では、主簿を備え付け、帳簿類をチェックしていることを紹介した上で、帳合法（簿記）には、「本式の帳合法（ダブルエンタリ）」と「略式の帳合法（シングルエンタリ）」があることを紹介していることである。もちろん、前者はdouble entry（複式簿記）、後者はsingle entry（単式簿記）のことである。

簿記の教科書としては、ブライアント＝ストラットンの共著のテキストが用いられた。これには、

Common School Book Keeping

High School Book Keeping

Counting House Book Keeping

の3種類があり、*Common School Book Keeping* が初心者向きのテキストであった（明治6年に福澤諭吉が翻訳した『帳合法』は、これを底本としていると可能性が高いのである（『商法講習所』, p.90-91)）。さらに敷衍すると、第2章第3節において、ラトガース・グラマースクールの「大

107) 森有禮は、少辨務使（明治3年閏10月5日）や中辨務使（明治5年4月18日）を経て、代理公使（明治5年10月14日）に任命されている（『森有禮全集 第2巻』, p.217）。他方、富田鐵之助は、ニューヨーク在留領事心得（明治5年2月2日）の後、ニューヨーク在勤副領事（明治6年2月20日）に任命されている（『東京府知事履歴書（富田鐵之助履歴）』による）。

108) 富田鐵之助は、賜暇帰国中の明治7年10月4日、「行禮人 福澤諭吉、證人 森有禮」の下で、杉田縫と婚姻契約書を取り交わし結婚している（吉野（1974）, pp.36-37）。「商學校を建るの主意」の日付は、そのほぼ1月後の11月1日である（『福澤諭吉全集 第20巻』, pp.122-127）。

学の科学部門 (Scientific) を目指すコース」では、「簿記 (Bryant, Strattonのテキスト)」を履修することになっていたことを述べたが、この3種類の中では、初心者向けの *Common School Book Keeping* であると思われるのである。

第2の特徴は、「模擬商業実践」方式の導入である。これについては、『商法講習所』でも強調され、実践に関連した「生徒用貨幣ひな形」の承認を大蔵省から受ける経過も含めて詳しく述べられているが (pp.59-62)、もともとの「商法学校科目並要領」では、「銀行」、「船問屋」、「製造品問屋」、「その他」の4つに分け、商業実践を行う旨が述べられているのである。

こうしたことから、富田鐵之助も、ブライアント・ストラットン・ホイットニー・アンド・ビジネス・カレッジにおいても、この2つの特徴をもつカリキュラムを学んだと推定できるのである。なお、「商法学校科目並要領」には、商法学校の生徒は、習字、筆算、読書も、当然に大事であること、また、具体的な授業科目・内容として、税関の事務、輸出入の方法、為替の取り扱い、掛合状・掛取状・仕入帳・積荷送り状、引受金内払方法、証書裏書の方法、証書調印の方法、書状の書き方・折り方・封印の方法、暗号を使った電信の送り方等々を学ぶことが記されている。

次に、ブライアント・ストラットン・ホイットニー・アンド・ビジネス・カレッジのカリキュラムについて傍証とすべき史料は、商法講習所の開学からほぼ1年後に定められた「商法講習所略則 (明治9年8月17日)」である (『商法講習所』, pp.62-65に採録)。これによれば、修業年限は18か月で3期に分けての教育が行われた。第1期は英語の基礎教育、第2期は簿記と商業教育、第3期は、ビジネス・カレッジの特徴でもある「模擬商業実践」教育である。第2期の具体的な授業科目としては、商用必要算法、証書式、物品目録式、為替手形式、約定書等への書入之法、受取書式金銀納出簿書式、定期預け金手形式、海陸運送物品受取書式、其外商売関係ノ諸事概略が記載されている。第3期の「模擬商業実践」では、特徴である「銀行其外市店雛形」のほかにも、銀行・物品問屋・物品仲買・保険会社・郵便局等の事務処理の方法も教育内容に入っている。

富田鐵之助のビジネス・カレッジ在学は、1年3か月と推定されるので、どの科目まで学んだかは、ホイットニー夫人から英語を学んだこと以外には¹⁰⁹⁾、まったく不明である。しかしながら、ブライアントとストラットンの連鎖方式のビジネス・カレッジの特徴が、2人の共著の前述の3種類の簿記教科書と、この2人の共著の商業用の算術書 *Practical Business Arithmetic* であったことから、富田鐵之助も、簿記・商業数学を学ぶことに加え、少なくとも商業の概略に関する知識を得たほか、「模擬商業実践」を通して貨幣の循環・物流等の実践的な知識を得たように思われるのである。

第6章 「海舟日記」に見るアメリカ留学者

前章で紹介した明治3 (1870) 年のアメリカ留学生は、勝海舟を介して富田鐵之助とも関係す

109) ホイットニーのビジネス・カレッジでも、ヨーロッパからの移民を対象に「英語」を授業科目として設けていた可能性は残る。

ることから、明治2・3年の「海舟日記」を中心に海舟と留学生等との人的関係を見ることにしよう。なお、「海舟日記」は、明治5年1月15日までを東京都江戸東京博物館版の『勝海舟関係資料 海舟日記 (一)～(五)』に依拠し、これ以降を勁草書房版の『勝海舟全集 第18巻～第21巻 海舟日記I～海舟日記IVほか』に依拠している。「海舟日記」の引用にあたっては、日記の本文記載の注記を()で、脚注を[]で、また筆者の注記を< >で表記した。

1 岩倉具視の子息の渡米

まず、高橋(2014b)で紹介したように、海舟は、慶應4(1868)年9月2日に、明治政府から静岡藩70万石の正式な承認を取り付け、同年の明治元年10月以降は、徳川慶喜の赦免嘆願のために、大久保利通等の政府首脳と折衝しているのである。この折衝の過程で岩倉具視とも面談し、その誠実さ・識見に感服・敬服している。すなわち、

[明治元年11月13日]

「今夕殿下[岩倉具視、議政官議定・行政官輔相]江可参旨之談り(ママ)、
夕刻公館江拜趨、殿公甚御誠実之御識量ニ感服し、心裡を歎願す、
公は実ニ敬服すへき美質之御方と奉伺、深夜迄酒食を賜はり、
御真率ニ 仰を蒙る」

[11月24日] 「本日、岩倉様江参館、御懇切之御話を蒙る」

[12月10日] 「早天、岩倉殿江参館、箱館并宮様[静寛院宮]御上京之事、
且当節困弊之情実等言上」

である。先に紹介したように、「海舟日記」の記載では、11月18日に富田・高木が緊急一時帰国し、12月13日に再渡米するのである。富田と高木の帰国は、海舟にとっては、まさしく徳川慶喜の赦免嘆願で多忙だった時期であったが、この時期に、岩倉具視とも面談し種々の歎願をしているのであった。

岩倉との面談(「深夜迄酒食を賜はり」)の中で、小鹿のアメリカ留学も話題となったと推測され、これが翌年7月の小鹿・富田・高木の学資給付の決定にも微妙な影響を与えたことが推測できるし、岩倉具視にとっても、小鹿の留學生活を知ること、長崎でフルベッキから英語等を学んでいた子息の岩倉具定・岩倉具経兄弟を、後にアメリカ留学に出すことに対する心理的安心感がもったとも推測されるのである。

その後、「海舟日記」での岩倉具視の記載は途絶えるが、明治2年7月、駿府処分問題に関連して、再び現れる。すなわち、

[明治2年7月6日]

「大久保殿より、岩倉様<岩倉具視(8日大納言に任ず)>江今日参館、心裡可申上旨来る、
即刻参堂、駿府所置之事申上ル」

[7月7日]

「浜口儀兵衛、同人大久保殿江参るニ付、愚存所置書付

御同人より岩倉様江差出す」

であるが、問題が解決すると、

[7月18日] 「◇外務大丞被 仰付」

である。しかし、この外務大丞もすぐに辞任する。この後も、

[10月8日]

「岩倉殿より御直書、帰藩候ハ、一応可申上旨、且兩三日会集御話可有之旨也」

[11月20日]

「岩倉殿様<「様」は「殿」のすぐ右側に並記>より御直書、夕刻参館、小臣御挙用之御内命、拙才不任用、一生書生是分と申事を述」

となるも、

[11月23日]

「海軍局其他之小事を記し、黒田氏と共に岩相<岩倉具視>江呈ス

十時登 営、兵部大丞被 仰付、即岩倉殿江兵部は不案内、・・・」

と、今度は兵部大丞に任ぜられる。

駿府（処分）の件、海舟の外務大丞や兵部大丞の件に関する引用（明治政府と海舟の役割と役職）の説明が長くなったが、本稿において最も重要な記載は、

[12月17日]

「岩倉様御子息御兩人留学之事御出問」

である。岩倉具定・岩倉具経兄弟のアメリカ留学についての質問があったが、海舟にとっては、渡米3年にもなる長男・小鹿に想いを馳せ、また、ニューブランズウィックでのこれからの岩倉兄弟と小鹿の交友に想いを馳せる幸福なひとときであったであろう。岩倉兄弟は、翌明治3年2月、大学南校教頭フルベッキのフェリス宛の紹介状をもって横浜を出航する。

2 佐土原藩知事・島津忠寛の子息の渡米

実は、海舟は外務大丞や兵部大丞に任ぜられる多忙な中、佐土原世子らの留学・渡航の手続き等の世話をしていたのである。外務大丞に任ぜられた翌日には、早くも佐土原藩知事が海舟を訪れ、数日後には、息子の海舟宅滞留を頼んでいるのである。すなわち、

[明治2年7月19日] 「佐土原藩知事<島津忠寛>来訪」

[7月22日]

「佐土原藩知事候来訪、御三男<島津（町田）啓次郎>、宅江滞留之事御頼ミ有之」

である。町田啓次郎は、当時、数え14歳であったことから、佐土原藩知事・島津忠寛が海舟宅での教育を頼んだのであった。

[7月28日] 「佐土原町田啓次郎・曾小川彦千代、宅江滞留」

[7月29日] 「曾小川実、子弟兩人之食領料（ママ）・金札持参」

と島津忠寛の三男・町田啓次郎が海舟宅へ長期滞在する中、海舟は、長男・島津又之進や二男・

丸岡武郎のアメリカ留学の世話をする。すなわち、

[9月18日] 「佐土原御二男留学之事ニ付種々御頼、ウラルス子江頼可申旨書翰、松田（屋）伊助方江認む」

[9月19日] 「佐土原藩兄玉江御二男并御家来米行ニ付、ウラルス氏之引受世話之事頼度旨、松屋伊助江一封出す」

[9月20日] 「梅沢太郎、ウラルス留学之事引請、世話可致旨答候由、猶跡々相頼度段申聞る」

である。ウラルスは、横浜のウォルシュ=ホール商会（横浜居留地2番区画：アメリカ一番館）の経営者の経営者のT. ウォルシュであり、松屋伊助は、その番頭である。なお、「海舟日記」の9月18・19日の上欄には、「佐土原藩 島津久之丞 丸岡竹之丞 梅沢太郎 橋口宋儀」と「トーマスワルス江一封」の書き込みがある。彼らの渡米は、岩倉兄弟よりも半年ほど早い明治2年9月下旬であった。すなわち、

[9月22日] 「佐土原世子初、本日横浜江行、直ニ米国江渡るニ付、ホーペス并悴・ウラルス氏江一封を詫（ママ）す」

である。

他方、島津忠寛の三男・町田啓次郎は、依然として海舟宅に滞在し続ける。すなわち、翌明治3年の「海舟日記」では、

[明治3年2月3日の上欄]「佐土原世子、御家臣壺人同居之旨申越」

である。

7月26日には、小松帯刀の病死の話を手井大平から聞くが（「海舟日記」の上欄に記載）、同日、兄玉章吉から町田啓次郎への連絡を依頼される。すなわち、

[7月26日] 「兄玉 来月英国江留学、啓殿へ話呉候様申聞」

である。8月になると、

[8月19日] 「佐土原候より縮緬目録（録）、・・・
佐土原三浦十郎弘郎西江留学ニ付、栗本江一封頼状渡す」

と御礼の目録が届き、数え15歳の町田啓次郎も、兄たちよりほぼ1年遅れの明治3年8月下旬に渡米する。すなわち、

[8月27日] 「兄玉章吉・町田啓次郎、本日横浜江出發、明日外国行悴并島津又之進殿江二封渡す」

である。ただし、海舟は、町田啓次郎と曾小川彦千代（時折、小曾川とも記載される）の勝宅での滞在費用のことも忘れてはいない。すなわち、

[9月5日] 「佐土原立山伊平、町田・小曾川の勘定請取、且彦子旅費三拾両預り置」である。

これらを『太政類典（第1編：慶応3年～明治4年）』、第120巻で確認すると、明治2年7月23日の「佐土原藩島津又之進外二名米国留学ヲ許ス（件名番号031）」、9月19日と翌3年7月21日の「佐土原藩丸岡武郎米国留学ヲ許ス（件名番号032・033）」である。件名番号031では、島津又之進・橋口宋

議・平山徳太郎の「アメリカ留学」が許可されているが、件名番号033では、当初は、児玉章治（章吉）と町田啓治（啓次郎）はイギリス留学の許可であった。

3 白峰駿馬の再渡米

「海舟日記」には、華頂宮や随行の南部英麿に関する記載は見当たらないが、南部英麿に随行した奈良真心については、

[明治2年6月21日] 「盛岡公用人奈良真心，織田，小田原書生留学之事申聞」の記載がある。この奈良の留学が叶うのは翌年のことである。すなわち、『公文録・明治元年』，第34巻の「奈良真志洋行願（明治3年7月28日，件名番号003）」、『太政類典』，第120巻の「盛岡県奈良真志米留学ヲ許ス（同30日，件名番号034）」である。南部家の費用負担でのアメリカ留学であった。

しかしながら華頂宮・南部英麿関連で記載が多いのは、海舟門下の白峰駿馬（坂本龍馬の海援隊にも参加）についてである。白峰は、一度、アメリカ留学の経験があり、明治3年3月（1870年4月）の日下部太郎の葬儀にも参列した後、日本に帰国している。「海舟日記」における白峰の記載は、幕末維新の変動期には見当たらず、明治3年7月28日が初見である。すなわち、

[明治3年7月28日] 「白峰駿馬，米国之話并宮様（華頂宮博経親王（東隆彦）

近々米国江御出ニ付御供可被仰旨内話也」

である。海舟は、白峰から（ニューブランズウィックの小鹿の話を含めた）アメリカの話の聞くとともに、白峰が華頂宮の随行を命じられことを聞いたのである。事実、明治3年8月下旬には、正式にアメリカ留学の許可が出る。『太政類典』，第120巻の「元小松玄蕃頭家来白峯駿馬米国へ留学ヲ命ス」である（件名番号005）。この文書には華頂宮に関する記載はないが、次節の湯地定基とともに政府からの学資給付が決定したのである。

海舟は、8月14日にも白峰と会っているが、18日には、白峰から鶴殿団次郎（白峰駿馬の兄、明治元年死亡）の追悼出版を依頼され、100両を預かる。すなわち、

[8月18日] 「白峰駿馬，小鹿江端物三疋届方頼む，

亦鶴殿団二草稿刻之儀被頼」

[8月24日] 「白峰駿馬，団次郎著書彫刻料百両預り」

である。また、その上欄には「鶴殿団二郎 養義蔵書は白峯駿馬蔵と認呉候様申聞」の書き込みがある。白峰駿馬は、まもなく、華頂宮に随行しアメリカに出発する。Griffisによれば、翌年（1871年）にラトガース・カレッジに入学する（Griffis (1916), p21）。

しかしながら、鶴殿団次郎の追悼集の出版は遅れる。1年以上もたった翌年9・10月でも、

[明治4年9月8日] 「今井・藤田，鶴殿之遺稿持参」

[10月24日] 「鶴殿之遺書校正頼む」

という状況であり、

[明治5年1月6日] 「鶴殿男外雄，団二著述出版之事ニ付東京より来る」

である。

4 湯地定基の再渡米

湯地定基は、種子島や吉原等とともに薩摩藩第2次留学生として渡米し、吉原重俊とともにニューヘブンをいたが、経済的困窮等から日本に帰国する。湯地は、高橋（2014a）で紹介したように、種子島や吉原と同様に、海舟門下であった（「海舟日記」の元治2（1865）年2月10・13日条及び慶應2（1866）年1月21日条を参照のこと）。一時帰国した湯地は、海舟を訪問し、アメリカの近況を伝えているのである。すなわち、

〔明治3（1870）年7月16日〕 「湯地次（治）右衛門、伊藤四郎左衛門」
である。人名のみで用件・面談内容の記載はないが、8月18日条の上欄には、「湯地次右衛門 上村彦之丞 洋行之事 必死之話」の書き込みがあり、

〔8月25日〕 「湯地次治右衛門、明日横濱江罷越、其俣米行、悴江伝言頼む」
となっている。

この翌日（明治3年8月26日）、海舟は、小鹿・（高木）三郎・（富田）鐵之助の3名宛の書状を出し、先の町田啓次郎の渡米や白峰駿馬・湯地定基の再渡米を知らせるとともに、8月18日条の白峰に依頼した端物三疋（三反）の件を伝えているのである。すなわち、

「一筆申入候。・・・・・・」

此度は島津殿御舎弟并白峰輩及び湯地氏も再渡、多分留学之諸君多く相成候、益憤発勉強之様、万相祈候、白峰氏江頼、端物三反、牡丹少々送り申候。夫々江御届致度候。扇子は白峰氏少々調候内相分候旨被申聞候間、分ち御もらる可然候。

欧羅巴洲もし程は戦争の旨種々之風聞相達候絵頼、・・・・

御国内兎角一静不致、彼是物議多之旨にて空奔而已に疲れ申候。此時に当ては、折角勉強專一と存候。別に手段も無之事と存候。又々後便に相附可申候。不備。」

である（『勝海舟全集 別巻 来簡と資料』, p.616）。

この湯地の再渡米は、高橋（2014b）で考察したように、8月に、湯地が学資給付者に追加されたことによる。湯地は、明治2年の英米留学生に対する学資給付者から何故か漏れていたが、この時の日本への一時帰国（明治政府高官へのアピール）が功を奏したのである。まさに、「海舟日記」の記載のように、湯地にとっては「洋行之事 必死之話」であった。明治3年8月28日には、正式に「鹿児島藩湯池治右門米国へ留学」を命じられ、政府からの学資給付により農政学専攻に専念することになったのである（『太政類典』, 第120巻, 件名番号006）。

湯地は、日本帰国中であったことから1870年のアメリカ人口センサスの調査からは外れたが（他方、大原令之助（吉原重俊）は人口センサスではコネチカット州ニューヘブンを第3区の居住者として記録された）、アメリカに戻ったことにより、松本壮一郎の「亜行日記」の明治3年閏10月12日条や『男爵目賀田種太郎』では、吉原重俊とともにニューヘブンを在住とされたのである。

湯地は、アメリカ留学に対する学資給付の決定により、マサチューセッツ州立農科大学に進み、クラークから農政学の指導を受けたとされている。帰国後は、農業試験場長・根室県令を務める

などして、北海道農業の振興に尽くしたのである¹¹⁰⁾。

5 グリーンバックの交換の効果

海舟に関係するアメリカ留学者も、このように明治3年頃から増え始め、翌年にはさらに急増する。留学者が増加する直前に、留学生の経済的状況と直接的に関連する書状がアメリカから届いていたので、これを紹介する。すなわち、

[明治3年3月16日の上欄]

「米国より来輸、正月十一日附千八百七（ママ）年二月十一日
云紙幣追々引替ニ付
紙幣高価ニ相成
其功追々下落と云」

である。

高橋（2014b）は、「アメリカ留学の経済学」を取り扱ったものである。ここで、これに少し言及する。アメリカでは、南北戦争（1861～1865年）の戦費調達のために、大量の不換紙幣（政府紙幣）「グリーンバック（Greenback）」が発行されたことから、「金」ドルと「グリーンバック」との交換相場が形成されるようになる。1864年7・8月には、バージニアで北軍が大敗北し、「金」ドル=100に対して「グリーンバック」は40以下の交換比率までで下落し、「金」ドルは「紙」ドルの2.5倍以上になったのである。

南北戦争も終わったものの、1868年は（海舟が小鹿・富田・高木の3人に対して最初の送金をした年は）1年間を通じて、「紙」ドルは「金」ドルのほぼ70%水準（70%±3%）で推移し、「金」ドルは「紙」ドルの1.43倍であった。

その後、アメリカでは、正貨兌換をめぐる、政界・経済界と問わず、正貨兌換による通貨収縮を危惧する考え方と経済発展のために潤沢な通貨供給を望む考え方とに分かれ、対立が起こるが、1871年1月14日、正貨兌換法（Resumption Act）が成立し、1879年1月1日から正貨兌換が再開されたのである（Nussbaum（1957）、日本語訳、p.133及び塩谷（1975）、pp.80-81）。

上の海舟日記の書状は、この正貨兌換法が成立する前年のアメリカの状況を報告したものであった。これをデータの的に確認すると、第4章で紹介した松本壮一郎の「亜行日記」の明治3（1870）年11月18日（和暦10月25日）条では、「（メキシコ洋銀百ドルニ付 合衆国金銀錢 百五六ドル…）合衆国紙幣 百十七ドル」である。これを、Mitchell（1908）のデータで見ると、この日の交換レートは、「金」ドル=1.125～1.133「紙」ドルであった。「紙」ドルは、最安値を付けた1864年7・8月に比して、2倍以上の貨幣価値をもつようになったのである。まさに「海舟日記」の「紙幣高価ニ相成」である。これとともに、物価も、幾分かラグを伴って、相対的に緩やかに下落し始めたのであった。

110) 湯地の妹静子が乃木希典夫人であることは、よく知られている。また、湯地は、海舟の葬儀の際に富田鐵之助・高木三郎・奈良真志とともに、その棺をかついだとも言われている。

アメリカ留学者が急増する時期は、アメリカは、まさにこのような経済状況にあったのである。

第7章 「海舟日記」に見る留学者関連の国内状況

前章では、明治2・3年の「海舟日記」に記載されたアメリカ留学生等を紹介したが、本章では、明治3・4年の「海舟日記」に記載された「富田鐵之助に關係する国内の状況」、「来日したアメリカ人教師の件」、「日本からの海外留学に關係する事項」等を紹介する。

1 富田鐵之助に關係する国内状況と福澤諭吉

この節では、「海舟日記」から富田鐵之助に關係する日本国内での2つの事項について簡単に説明する。

明治3年5月（1870年6月）、永井五百介（吉田清成）が外務省から学費等配達方に任命され、6月には外務省から送金された「洋銀9,405ドル」を勝小鹿・富田鐵之助・高木三郎等のアメリカ留学生12人に対して配分したが、この時期には、海舟が経済的困窮に陥った旧幕臣に対して自費で支援していたことから、海舟自身の経済状況も悪化していたのである。このため、海舟は、これまで立て替えていた富田鐵之助と高木三郎の留学費用を仙台藩と庄内藩（後に大泉藩に名称変更）に催促する。「海舟日記」では、

[明治3年8月2日]

「岡田斐雄 [庄内藩士]、太童 [大童信太夫] 之事、留学之金子之事談す」

[8月8日] 「仙台藩林権少参事、富田之礼として来る」

[9月25日] 「仙台・庄内江富田・高木、学費立替之事催促申遣」

[閏10月1日の上欄] 「仙台より富田之事問合返事遣す」

である。これに対して、大泉藩は、翌明治4年3月に200両、10月に300両の計500両を返済しているが、海舟日記には、仙台藩からの返済の記載はなく、富田鐵之助自身が8年後に返済しているのである。すなわち、

[明治11（1878）年12月23日]

「富田鉄より、先年留学立替金、二百五十円預り置く（勁草書房版）」

である。

ところで、上の明治3年8月2日条の大童信太夫は、仙台藩江戸留守居役として慶応3年に富田鐵之助をアメリカに送り出した人物であり、「海舟日記」にも、大童に関する多くの記載が見られる。大童は、仙台藩の内部分裂から戊辰戦争の責任を追及され、明治2・3年には、福澤諭吉の庇護を受け、東京で潜伏生活を送っていたのである（大童の潜伏生活については、『福翁自伝』（岩波文庫版、pp.235-236）や『福澤諭吉書簡集 第1巻』、pp.181-182を参照のこと）。

これに関する「海舟日記」は、

[明治3年9月7日] 「大童信太夫、国許より探索いたすニ付潜伏すと云」

である。さらに

[9月22日]

「仙台太童、松倉<松倉恂、後に初代の仙台区長>之事同人内話、召遣候様可然旨」と続くが、この条の前に、「奥州官県江話、頼遣す」の書き込みがあることから、「奥州官県江話、召遣候様可然旨頼遣す」という趣旨になる。すなわち、大童・松倉の就職斡旋ということになる。

富田の学費立て替えの催促の件も、大童信太夫の件も、明治3年9月下旬(1870年10月下旬)であったが、アメリカ在住の富田には、その詳細は伝えられてはいない。富田にとっては、ニュージャージー州ミルストーンのコーウィンの牧師館での勉学も1年を過ぎ、ニューアークのブライアント・ストラットン・ホイットニー・アンド・ビジネス・カレッジへの入学も決まり、入れ替わりに折田彦市がコーウィンの牧師館で勉学することが決まった時期でもあった。

明治3年閏10月頃から福澤諭吉による大童信太夫の助命運動も始まり、「自訴による80日の禁錮」と「家名断絶」の処分で見解が決着する。アメリカ留学中の富田鐵之助も、こうした大童信太夫を取り巻く状況を知ってか、福澤諭吉方の大童信太夫宛てに書状を出す¹¹¹⁾。すなわち、「海舟日記」の

[明治4年2月11日] 「富田が福沢江之書状等頼む」

である。江戸東京博物館版「海舟日記」の編集者の脚註は、[富田鉄之助(仙台藩士、アメリカ留学中)]と[福沢諭吉か]となっているが、大童家文書(仙台市博物館寄託)を見ると、明治3年から6年頃までに書かれた富田から大童信太夫宛て書状(当時の変名の岩手逸翁宛て書状)の封筒の裏には、(届け先として)「福先生」とか、場合によっては封筒の表に「福澤諭吉先生」の添え書きが見られるのである。こうしたことから、上の脚註は、[福沢諭吉か]ではなく、[福澤諭吉]と書き改めるべきであろう。安政7年(万延元年)に海舟が艦長を務めた咸臨丸に福澤が通訳として乗船したことを除けば、明治4年の段階では両者の交流は特になく、「海舟日記」では、おそらく、この2月11日条が福澤についての初めての記載になる。

このように富田鐵之助は、大童信太夫との関係から明治4年頃から福澤諭吉とも交流し始め、次第に緊密になっていく(ちなみに、富田の「師の海舟」と福澤との不仲は、明治25年の福澤諭吉の「瘦我慢之説」以降とする説も有力となっている)。後日談になるが、富田がニューヨーク副領事任中の明治7年10月に、杉田縫と結婚する。このときの婚姻契約約書に記された「行禮人」は「福澤諭吉」、また、「証人」は「森有禮」であった。また、先に紹介したように、福澤は、翌11月には「森有禮、富田鐵之助兩君の需に應じて」、「商學校を建るの主意(商法講習所設立趣旨書)」を書いているのである。富田がニューヨークに戻ると、新婚の縫を福澤宅に住ませている等の世話をし、富田も、慶應義塾・演説館建設(明治8年5月竣工、1967年に国の登録重要文化財に指定)のための建築資料をニューヨークから福澤に送っている¹¹²⁾。

111) 「海舟日記」記載の書状は、明治4年4月28日に岩手逸翁宛てに届けられた書状(封筒の裏に「福先生」の記載(大童家文書 整理番号 311))の可能性もあるが、海舟が静岡滞在中としても、岩手逸翁に届くまでに時間がかかっている。

112) 演説館は、慶應義塾の現存する最も古い建築物であり、パンフレット「慶應義塾大学三田キャンパス 建築プロムナード」や吉野(1974)、p.303-305等でも紹介されている。

2 グリフィスの来日

すでに紹介したように、日下部太郎は、小鹿・富田・高木よりも半年ほど前にニューブランズウィックに来着し、ラトガス・カレッジ（3年制の科学コース）に入学した。成績優秀でΦBK（ファイベータカップ）協会会員にも推薦されたが、卒業を目前にした1870年4月13日に逝去した¹¹³。

日下部太郎の葬儀には、小鹿・富田・高木も参列しており、逝去の報は、海舟にも伝えられ、さらに福井藩にも伝えられる。「海舟日記」では、先に紹介したように、

[明治3年6月25日]

「伊東友四郎<福井藩士>江日下部之事申遣す、妻木江届方頼ム」

である。

ラトガス・カレッジ在学中の日下部太郎を先輩学生として熱心に指導したのは、グリフィス（William Elliot Griffis）であった。グリフィスは、1869年にラトガス・カレッジ古典コース（4年制）を卒業し、ニューブランズウィック神学校に進んでいた。山下（2013）によれば、グリフィスは、生計を助けるためにグラマースクールでラテン語とギリシア語を教えていたが、ここで横井佐平太・大平兄弟には英語を教え、さらに大学生の日下部にはラテン語の個人指導をしていたのである（p.21）。

このグリフィスの来日について「海舟日記」では

[明治3年11月26日]「米国の倅先生 [W・E・グリフィス] 越前江被雇候旨一封来ル」

[11月27日] 「春嶽殿 [もと福井藩主] 江米国人之事、并同人江倅礼状差出」

[12月26日] 「昨越老公 <松平春嶽>より返書、米教師同断」

である。海舟の長男・小鹿もグリフィスから英語を教わったが、その小鹿から、グリフィスが越前（福井）の教師に雇われることが決まったとの書状が海舟のもとに届き、海舟は、旧知の（もと福井藩主）松平春嶽にグリフィスの人物等を知らせるとともに、グリフィスにも礼状を書いたのである。なお、「海舟日記」の明治3年11月27日は、西暦1871年1月17日にあたる。

松平春嶽は、若くして福井藩主になり、1862年には幕府の政治総裁職に就任し、幕政改革にも参加した。横井佐平太・大平兄弟の叔父・横井小楠は、熊本藩士であったが、松平春嶽に招かれ、その政治顧問となり¹¹⁴、福井藩に対しては「国是三論」の方針を打ち出し、幕府に対しては「国是七条」の建白を出している。小楠は、1852年の最初の福井滞在において「学校問答書」を出し「学政一致」の考えを提唱し、福井藩の学校教育の方針にも影響を与える。すなわち、福井藩では、安政2（1855）年に藩校明道館を創設し、西洋科学の振興を図るようになる。明治に入り、全国各地に新しいタイプの学校が設立され始めると、明道館を明新館と改称し、よりいっそう洋書（英書）・理学・化学等の教育を重視するようになる。

そして、こうしたことを背景に、松平春嶽は、日本滞在の外国人から英語教師を求めることと

113) グリフィスが福井・明新館で講義を開始する前日に、日下部太郎の父が会いに来たことから、ΦBK協会のゴールド・キーを渡している（Griffis（1876）、日本語訳、p.128）。

114) このパラグラフは、山下（2013）のpp.18-92を整理したものである。なお、小楠と福井藩との関係は、1852年から1863年まで断続的に続いていたのである（p.69）。

し、その斡旋をフルベッキ（長崎から大学南校教師へ転任）に依頼し、ルセーを採用した。福井藩は、これに続き、フルベッキを通じてアメリカからの理化学教師の招へいに乗り出す。一地方の藩が、外国から直接に教師を採用する最初のケースであった。フルベッキは、オランダ改革派教会外国伝道局のフェリス宛にその斡旋を依頼する手紙（1870年7月21日付）を書く。オランダ改革派教会において、キリスト教の信仰をもち日本のはるか裏側の地方において物理と化学を教えられる人物として候補者として選考されたのは、ほかでもないグリフィスであった。グリフィスは、1870年9月6日、ライリー（ラトガースのグラマースクール校長）から福井行きを薦める手紙を受けとり、4月に死亡した日下部太郎の郷里の福井行きを決心する。日本に渡航するまでの間は、杉浦弘蔵（畠山義成）から日本語を習い、一緒に化学実験を行う等の準備もする。こうして、グリフィスは、1870年11月13日、その郷里フィラデルフィアを立ち、前年に開通した大陸横断鉄道でサンフランシスコに向かう。12月1日、サンフランシスコを出航し、12月29日に横浜に着く。

グリフィスは、ほどなく、当時、築地にあった外務省に外務卿の寺島宗則を訪ね、「畠山義成からの手紙を出すと、ていねいに迎えられた（Griffis (1876), 日本語訳, p.92)」のであった。グリフィスは、岩倉具視の息子の手紙を持って来日する等、万事そつがない。東京では、もと福井藩主・松平春嶽のもてなしを受け、「首都の政治通語で「岩倉の手足」と呼ばれた」森有禮にも会い、アメリカでの友人の紹介状を渡している（前掲書, pp.92-93）。海舟は、「静岡にいて留守であったが、日本歓迎のうれしい手紙を送ってくれた（p.93）」のである¹¹⁵⁾。海舟は、明治3年 閏10月14日から4年8月28日まで静岡に滞在しており¹¹⁶⁾、このグリフィスからの引用文は、まさに「海舟日記」の明治3年11月27日条に対応する記述である。

3 グリフィスによる静岡学問所教師クラークの斡旋

静岡学問所は、明治元年10月、旧幕府開成所等の蔵書や教師を引き継ぎ、漢学・国学・洋学（英・仏・蘭・独）の教育機関として駿府場内に開設されたものであるが、（明治3年閏10月末頃から洋学（英学）の教師として外国人を雇う話が起きてきたのである（『勝海舟関係資料 海舟日記（五）』, p.131及びp.133）。すなわち、

[明治3年閏10月27日]

「中村敬介 [中村正直（静岡学問所一等教授)], 教師之事談」

である。先に紹介したように、このひと月後にアメリカの小鹿からグリフィスが福井の教師になることを知らせる書状が海舟のもとに届いたのであった。学問所では、福井藩の動向もあり、次第に外国人教師雇い入れのコンセンサスができてくる。すなわち、

[明治3年12月13日] 「中條隊中之者洋人御雇入ニ付異存者多分無之旨中條申聞る」

である。

115) このあと、Griffis (1876) は、第3章第3節で紹介した神田孝平と養子・乃武の話題にうつる。すなわち、「神田氏は英米文学の学徒であり、熱心な思想家であった。神田の息子 [乃武] は頭がよくて森氏について行くことになった（p.93）」のである。

116) 海舟の静岡滞在期間は、『勝海舟関係資料 海舟日記（五）』のp.128による。

この外国人教師をアメリカ人にするか、イギリス人にするかで議論も起こっている。すなわち、中村正直から海舟宛ての書簡では、

「教師の目的のみならば米利堅人可なるべく、天子、諸侯其外国政之鈞合を以て言へば英人可なるべし（『勝海舟全集 別巻 来簡と資料』, p.371）」

である。書簡には、この後に、イギリス公使のパークスに頼めば喜んで斡旋してくれるが、必ず高いものを押し付けてくるので、支出が増えて後でかえって面倒になることや、教師には当たりはずれがあり、良いときはよいが、悪いときはどうにもならないことのほかに、イギリス人とアメリカ人ひとりずつにしたらどうかの提案等も書かれていたのである。

このような静岡学問所の状況もあり、明治4年に入ると、海舟と福井藩やグリフィスとの書状往来が頻繁になる。まずは、

[明治4年2月 6日 (1871年3月26日)] 「○松平春嶽公より来翰」

に始まり、

[3月12日]

「越前福井藩御雇米人江写真・白絹一反、

村田巳三郎(村田氏寿・福井藩大参事)江一封、同藩飛脚江頼ミ遣す」

である。

海舟は、静岡からグリフィスに写真と白絹一反を贈り交際を深め、2か月後の5月には、

[5月25日] 「福井藩堤五一郎[堤正誼(福井藩権大参事), 米国グリュービス氏江

教師之事聞合せ方頼む」

である。これを「グリフィス日記」で見ると¹¹⁷⁾、

[1971年7月25日 (明治4年6月8日)]

「晴天が続いた。午後暑かった。気温95度。五大参議の一人が訪ねて来た。駿河の勝安房氏から伝言が届き外国人教師をアメリカから求めたいという。ゆっくり楽しく話した。」

である。この時の詳細は、Griffis(1876)の *The Mikado's Empire* にも記載されている。すなわち、

「7月25日 きょうの午後、県の役人の堤氏が・・・勝安房氏からの伝言を持ってきた。駿河の静岡の学校で、アメリカ人教師を求めている。勝氏の手紙によると、「私は正規の教育を受けた、それを職業とする紳士を望みます。生計をたてるために教えることになった職人や書記はこまります。できればあなたと同じ学校の卒業生を望みます」と言う。勝氏には真の教師とそうでない教師の違いがはっきりわかっているのだ。

わたしは、さっそくエドワード・ウォレン・クラーク文学修士に手紙を書き、その職につくように言った。クラークはかつての級友で、いっしょにヨーロッパを旅行した(日本語訳, pp.233-234)。」

である。

グリフィスは、クラークに静岡学問所の英語教師を薦める手紙を書くとともに、海舟にも、早

117) 「グリフィス日記」は、山下(2013)の第4章のpp.201-321に採録されている。

速、クラークの紹介とその適否を問う手紙を送っている。すなわち、

[明治4年6月15日 (1871年8月1日)]

「○越前米教師の吾藩雇入可然者有之早々否申遣候様申越す、浅野江右等談す」

[6月18日 (1871年8月4日)]

「○越前クリューフス江返答并答書等差出」

である。

これ以後の「海舟日記」には、クラークとの雇用契約や迎え入れの準備状況に関連する記載 (7月10・22日条, 8月14・22・24・25日条, 9月7・8日条) があるが、紹介を省略する。

クラークは、1871年10月25日 (明治4年9月12日) にアメリカ船グレートリパブリック号で横浜に着く (Clark (1878), 日本語訳, p.5)。「海舟日記」では、

[9月20日の上欄]

「夜ニ入、御雇之米教師クラーク<E・W・クラーク>来訪、仮条約和文渡す、小鹿并竹村・大久保其他書状持参、明日横浜江参り候由、バラ<ジェームズ・バラ>并方江尋候へは居申候旨申聞」

である。クラークは、数日、横浜に滞在した後、出迎えの中村正直等とともに、5日間の東海道の旅をし、静岡に着いたのであった (Clark (1878), 日本語訳, pp.5-31)。クラークの到着は、すぐさま、海舟からグリフィスにも連絡されたのである。すなわち、

[9月24日]

「越前グリューヒス氏江クラーク来着之事等申遣、

太田源三郎同断、伊藤友四郎江二通共届方頼」

である。

クラークとの正式の雇用契約の件も (9月21・22日条にも記載があり)、順調に進んだかのように見えたが

[9月27日] 「乙骨・名倉ニ条約書之事、教法ヶ条之処教師云々申聞之由承る」

[9月晦日] 「服部の大儀見已下文部省江可願旨外務省ニ而申聞られ候旨、

并米教師宗法之箇条抜き候旨等申越」

である。この件をクラークの立場から見ると、「三年間の契約書は、長文の十三条から成り、漢文、日本語文、英文の三通りのものが、三冊の堂々たる書物になっていた。その契約書に署名せんとした時、キリスト教の宣教を禁止し、三年間もわたしに宗教上の問題について沈黙を守ることを命ずる箇条が、太政官 (内閣) によって巧みにそう入されていることに気づいた (Clark (1878), 日本語訳, p.8)」である。クラークは、月300ドルの俸給との兼ね合いもあり迷いながらも、このキリスト教禁止条項の撤回を政府に申し送ったが、3日後に届いた返書には、意外にも、当該条項を削除する旨が述べられていたのである。この件の「海舟日記」の記載は、上で紹介した条に留まるが、(のちに紹介する) クラークの認識では、「勝と岩倉 (クラークがニューブランズウィックで彼らの息子たちに力を貸した) の尽力によってその一条が除かれた」のである。

この直後、クラークは、渡航費用等として500ドルの支給を受けとり雇用契約も完了する。すなわち、

[10月1日] 「人見勝太郎、昨日教師江五百弗渡す、跡三百弗なり」

[10月2日] 「矢田堀ヶ越前クリュービスの差越之定約英文并山田之手紙到来」

[10月9日] 「和田助三郎、教師定約書受取渡相済候旨、十七日頃静岡江出立、十一日邸江来ると云」

である。

クラークは、

[明治5年1月2日] 「米教師来訪、新聞之書冊六本、米国海軍歴史二本、歩卒訓練書一本、小児教本一冊、ギツタペルカ之团布等借遣す」

のように、海舟とも親交を深め、静岡学問所において2年間の教師生活を送ることになる（その詳細は、Clark (1878), 日本語訳, pp.35-90を参照のこと）。

クラークは、明治4年10月1日から3年の契約であったが、明治6年12月23日に、（この契約のまま）静岡学問所から東京大学（明治10年創設）の前身にあたる開成学校理化学教師に転じ、明治7年12月までの1年間、教師生活を送っている。当時の開成学校の校長は、畠山義成であった。クラークは、畠山義成がニューブランズウィックにいた時、杉浦弘蔵と名乗っていたために、開成学校での再会の際、最初はその名前に気づかなかったが、ラトガース・カレッジ在学中からの知り合いであった（Clark (1878), 日本語訳, pp.129-131）。畠山は、クラークが静岡学問所に赴任する直前に、ニューヨーク・オルバニーのクラークを訪ねているが、その後、クラークは西（日本）に行き、畠山は岩倉使節団に随行して東（ヨーロッパ）に行ったのであった。

本筋から離れたクラークの逸話がいくぶん長くなったので、最後に、クラークが1904年に、Katz Awa “*The Bismark of Japan*” を刊行したことを紹介し、この節を終えたい。この書の第1章の書き出しは、

“Who is Katz Awa?” you ask.

から始まっているが (p.7), この数行後には、

My answer, in the first place is, HE IS

THE MAN I LOVE - the man to whom personally I owe more gratitude and respect than to any individual I ever met, and I have met great men both in hearthen and in Christian lands.

と「日本のビスマルク」海舟を最大限に賛辞する人物評価がなされている。なお、先に紹介した雇用契約書のキリスト教禁止条項の撤回の件は¹¹⁸⁾、

Katz Awa and Iwakura (whose sons I had befriended in New Brunswick) knew this, and by their combined influence the Dai Jo-Kan receded, and the objectionable clause was

118) この箇所の内容は、Clark (1878), 日本語訳の解説 (p.238) において示唆されてはいるが、本稿では、この箇所の原文を採録した。

withdrawn.

である (pp.76-77)。

このクラークの人的関係や業績も、静岡学問所や開成学校の教師を退くこと50年もすると、次第に忘れられていく。大正デモクラシーの覇者・吉野作造でさえ、1872 (明治5) 年刊行の中村正直 (訳) の『自由之理』の英語序文の筆者 (E.W.C) を探して¹¹⁹⁾、クラークにたどり着き、その業績を再認識するに至っている (吉野 (1927))。クラークの話は、本稿のメイン・ストーリーから離れているが、この点も踏まえ、いくぶん長くした次第である。

4 静岡藩 (県) からのアメリカ留学者

(1) 明治四年未年九月迄各国留学生調

明治2・3年の新たなアメリカ留学については、すでに第4章と第6章において詳述したが、明治3年秋や明治4年になると、留学生数が増加し、海外留学をめぐる状況が大きく変わる。

第3章第4節において、ニューブランズウィックに住まいした経験をもつ吉田清成が、明治3年5月、外務省から「学資配分担当 (学費等配達方)」に任命されたことを紹介したが、『吉田清成関係文書五 書類篇1』には、「明治四年未年九月迄各国留学生調／大蔵省」が採録されている (pp.199-219)。これによれば、文部省が留学を認めた留学生数は、281人 (イギリス107人、アメリカ98人、プロシア (プロイセン) 41人、その他35人) である。第4章で紹介したように、「亜行日記」のアメリカ留学生数は、40数名であったから、少なくともアメリカ留学生については、倍増していたのである。

しかも、留学費用は、官費 (国費) が153人、県費が91人にのぼり、自費留学生は、37名に過ぎなかったのである (アメリカ留学生は、官費が46人、県費が28人、自費が24人であった)。第4章で紹介したアメリカ留学生の多くは、官費留学生であったが、海舟が留学の世話をした佐土原藩 (県) の橋口宗儀、平山太郎、丸岡武郎、島津又之進、児玉章吉、町田啓次郎の6人は、佐土原県の県費留学生であったし、林源助 (林玄助) と津田亀太郎、高良之助と山口要吉も、それぞれ、熊本県と徳島県の県費留学生であった。さらに、盛岡県の南部英麿と彼に随同行した奈良真志は、自費留学に区分されている。また、手嶋誠一も自費留学とされている¹²⁰⁾。

明治2年にすでに学資給付が決定していた勝小鹿・富田鐵之助・高木三郎も、当然に、官費留学に区分されているが、大学南校から派遣された目賀田種太郎とともに、「静岡県」出身の留学生とされている。勝小鹿は、ともかくとしても、富田鐵之助は仙台藩から、また、高木三郎は庄内藩から「海舟に貸し出されて」、小鹿とともにアメリカ留学を果たした経緯によるものと思われる。

なお、この「明治四年未年九月迄各国留学生調／大蔵省」には、新島襄も「安中県 新島七五三太」として「官費留学生」の欄に記載されている。新島に関する公式記録は、明治4年5月25日の「安

119) 原著は、1859年刊行のジョン・スチュアート・ミルの *On Liberty* である。

120) 手嶋誠一の自費留学の事情は、渡辺 (1982), pp.291-292を参照のこと。

中藩新島七五三太米国へ留学」である(『太政類典』, 第119巻, 件名番号078)。新島は, 慶応元(1865)年に密航して渡米したが, 明治4(1871)年に少辨務使森有禮の尽力により, パスポートが発給され, 留学免許状も交付されたのであった(『新島襄全集8』, pp.33-78)。外務省から太政官辦官宛の文書(件名番号078)でも, 「森少辨務使ヨリ別紙ノ通申越右新島七五三太」としてこの経緯が記載されているが, この文書は, 他の留学生同様に学資を支給することの伺い書でもあった。

この森有禮は, 前年の明治3年に少辨務使として渡米するが, このときには, 第8章補論で述べられるように, 旧仙台藩の新井常之進(新井奥達)等を同伴していたのである。森が新井奥達(常之進)の渡米費用を負担したことはよく知られているが(『森有禮全集 第2巻』, pp.824-825), 「明治四年未年九月迄各国留学生調／大蔵省」では, 「荒井常之進」と記載され「自費留学」に区分されている。新井常之進に関する公式記録も, 明治3年11月20日の「仙台藩荒井常之進自費ヲ以テ米国へ留学ノ願ヲ許ス」である(『太政類典』, 第120巻, 件名番号051)。

(2) アメリカ留学者

第4章の冒頭で紹介したように, 海外留学生は, 明治政府の留学促進政策により, 明治3年に急増し, 翌明治4年には留学生数がピークに達する(国別にみても, フランスを除きピークに達する)。留学生の増加に起因する財政負担の増加を危惧した大蔵省や留学生の修学状況を見た外務省が, 次第に留学生の抑制する方向に舵を切り始めたことから, 明治5・6年からは, 明らかな留学生数が減少したのである(留学生政策の変更については, 第8章を参照のこと。この時期の海外留学生に関する先行研究としては, 石附(1992)や渡辺(1977)が卓抜しているので, これらを参照のこと)。

この政策転換の予兆は, 『太政類典』, 第119巻からも見て取れる。すなわち, 「南校専門生徒各国へ留学并教官質問ノ為メ洋行ノ規則ヲ定ム(明治3年閏10月, 件名番号058)」, 「外国留学ノ輩華族ト雖モ従者ノ召連レシメス(同11月5日, 件名番号059)」, 「大学教官等質問ノ為洋行ノ者ハ留学中官禄三分ノ一ヲ賜ヒ路費学費ハ生徒ニ準シ給与(同12月, 件名番号060)」に続く, 明治3年12月23日の11条からなる「海外留学規則」の布告である(件名番号061)。さらに, 同日, 私費留学生を対象とした7条からなる「私学留学規則」も布告されたのであった。

政府のこの政策転換は, 静岡藩(県)派遣の海外(アメリカ)留学にも影響を及ぼすのである。この影響の変化の過程を「海舟日記」から見ていく。

まず, 明治3年の秋には, イギリス留学の東伏見宮に随行する河島醇の件(明治3年10月25日条), プロシア留学の伏見宮に随行する寺田弘の件及び黒岡帯刀のイギリス留学の件(同11月25日条), 黒田清隆に随行する最上五郎の件(同11月27・28日条)のように, 皇族や北海道開拓使の随行者として留学する者も出てくるが, 彼らは, 「いずれも鹿児島藩士で海舟とも縁が深かった(『勝海舟関係資料 海舟日記(五)』, 解説, p.136)」のである。当時の海外留学生は, ほぼ7割が西日本の出身とされ, 維新政府の薩長土肥の藩閥的性格を反映しているとされており(渡辺(1977), p.265), 随行員の人選にもこの傾向が如実に表れているのである。

ところで、イギリス留学の東伏見宮やプロシア留学の伏見満宮に対しては、書生の心得をもって勉学に励むことや辨務使の指揮下に入ることが伝えられている（「東伏見宮外国勤学ノ願ヲ許シ英国へ差遣并留学中ハ尋常書生ヲ以取扱（明治3年10月7日、『太政類典』、第120巻、件名番号008）」及び「伏見満宮李国勤学ヲ命ス（明治3年11月、『太政類典』、第120巻、件名番号013）」）。しかしながら、東伏見宮には、鹿児島藩の川島新之丞（河島醇）等7名（宮家の同行者・家従等を含む）が随行し、伏見満宮にも、鹿児島藩の寺田平之進（寺田弘）等8名が随行することから、留学費用も多額に上った。このため、伏見満宮の当主や家令からは、渡航支度料1,500両の拝借願いも出され、このことが、「外国留学ノ輩華族ト雖モ従者ノ召連レシメス（明治3年11月5日、『太政類典』、第119巻、件名番号059）」となり、次第に留学生全体の抑制策につながっていく。

なお、イギリス留学の黒岡帯刀の件は、明治3年11月9日の「第120巻、件名番号014」に記録されている。国立公文書館のデジタルアーカイブのタイトルは「鹿児島藩黒岡帯刀李国勤学ヲ命ス」となっているが、本文を参照すると「英国勤学申付候事」となっており、タイトル作成上のミスが見られる。

このように海舟は、旧薩摩藩士との縁は深いが、「海舟日記」には旧長州藩士との関係はさほどでもない。こうした中、旧長州藩士の富田貞次郎は例外に属するが、その富田の海外留学（イギリス留学）が決まる。すなわち、

[明治3年12月3日] 「富田貞二郎<富田貞次郎>の来状、同人洋行出来可致旨
荒木卓爾の来状、南校教師洋人式人先月下旬暗殺之事ありと云」

[明治4年1月6日] 「○富田貞次郎の来状、刑部省より留学被仰付候旨段々礼申越」
である。

さらに、西園寺公望や万里小路通房等のイギリス留学も決まる。海舟とは縁が薄かったことから、「海舟日記」の記載（明治3年12月17日条）は、

「聞く、当月三日西園寺殿・万里小路殿・東久世御子息・岩野殿等、英国江留学出発と云」
にとどまっている。この西園寺や万里小路の留学は、留学抑制が始まる前に「事実上」決定していたのである。これを『太政類典』、第120巻で確認すると、公式の決定は「万里小路従四位外一名英国留学ヲ命ス（明治3年閏10月29日、件名番号012）」、「西園寺公望仏国留学ヲ命ス（同11月20日、件名番号015）」であった。

海舟の静岡藩では、明治3年10月に学問所一等教授から外務省辨務少記に転じた外山正一（外山捨八）がアメリカに赴任することが決まると、海舟が東京から静岡に居を移したこともあって¹²¹⁾、大儀見元一郎や木村熊二も、外山に同行し留学することを望むようになる。すなわち、

[明治3年閏10月17日]
「外山捨八 [外山正一] 米国江被遣候ニ付 出府被仰渡す有之旨也
大木美 [大儀見元一郎] 并木村熊吉 [木村熊二]、心情を歎願す

121) 海舟は、明治3年閏10月14日～明治4年8月28日の期間と明治4年12月末以降、静岡に滞在している（『勝海舟関係資料 海舟日記（五）』、解説、p.128）。

松造米国江行くニ付悴〔勝小鹿〕方一封頼ミ且・・・〕

〔明治3年閏10月18日〕

〔外山捨八、明十九日東京江出立、米国行被仰付へく旨

なりといふ、大木美・木村并黒塚之事内談

○・・・且木村・曾谷〔曾谷言成〕・大木美米行致させへむ旨内談、同夜三子来ル、

明朝東京江出立之旨、六百兩渡す〕

である。静岡藩大参事・服部常純や権大参事の織田信重・戸川安愛とも相談の上で、大儀見元一郎や木村熊二のアメリカ留学を認め、600兩を渡したものではあったが、翌年2月には、海舟は俸給の一部を返納しこの2人の留学費用を負担としているのである。すなわち、

〔明治4年2月3日〕

〔宮田江附シ、俸金之内式百兩木村・大木美留学科として差引呉候様申談、八十五兩

返納す、但五ヶ月分也〕

である。

こうした留学熱もあって、明治4年早々から、竹村勤吾もアメリカ留学を望むようになる。すなわち、

〔明治4年1月5日〕〔竹村勤吾米行之内談、可然と答〕

である。竹村に続き、1月9日には川村清雄、11日には浅野辰夫、12日には大久保三郎（後の東京府知事・大久保一翁の子息）もアメリカ留学を望むようになり、2か月後には竹村はじめ7人がアメリカに出発する¹²²⁾。すなわち、

〔3月8日〕〔瀧村小太郎、当三日竹村初七人出帆、ワルス并松屋厚世話相成候

旨書状、并駒井・神保地所之事〕

である。

ここで、静岡藩士のアメリカ留学に関して注目すべきは、松屋伊助（熊谷伊助）とワルス（トーマス・ウォルシュ）である。順を追ってみると、

〔1月14日〕

〔竹村勤吾・小野 明日東京江出立ニ付、柳原殿并宮木鳴、松屋伊助江ワルス子江頼遣旨等之書状、且八田知起之一封共頼む〕

〔2月1日〕

〔竹村・大久保〔大久保三郎、大久保忠寛（一翁）の子息〕兩人帰郷、

ウォルス方にて留学之万事受合候旨松屋伊助厚く周旋之趣也、宮木乃返書来る

溝口江ワルス并松屋江遣し候物之事談〕

〔2月9日〕

〔竹村・大久保・浅野、明日東京江出立米国行ニ付、松や伊助并ワルス氏江端物礼状并悴方江

122) 海舟日記には、小野弥一（1月14日条）、名倉弥五郎（3月13日条）のアメリカ留学に関する簡単な記載も見られる。

白紹二反・書状等附託す

である。慶應3（1867）年7月の勝小鹿・富田鐵之助・高木三郎のアメリカ留学に際し、ウォルシュ＝ホール商会（亜米一商会）の経営者トーマス・ウォルシュやその番頭の松屋伊助（熊谷伊助）に渡航の世話を依頼して以来、懇意な関係にあったのである。

アメリカへ出発後には、2人に対する礼として

[3月15日] 「ウォルス氏并松田（ママ）伊助江瀬戸物・反物等遣す」
である。

静岡藩の留学生派遣を『太政類典』、第120巻で確認すると、まず、明治3年閏10月の「静岡藩菊地大麓英国遊学ヲ命ス（件名番号010）」、同年12月20日の「静岡藩曾谷言成外一名英米国へ留学ヲ命ス（件名番号021）」、翌4年2月2日の「静岡藩浅野辰夫等亜国へ留学ヲ許ス（件名番号060）」である。「件名番号010」は、静岡藩菊地大麓の大学南校への出仕と東伏見宮に関係してのイギリス遊学の件である。「件名番号021」は、官費による静岡藩曾谷言成、山口藩富田貞次郎のイギリス留学と山口藩児玉淳一郎のアメリカ留学の決定である。「件名番号060」は、浅野辰夫（静岡藩権大参事・浅野氏祐の子息）、静岡藩知事家僕の竹村勤吾・大久保三郎・川村清雄・小野彌一の5名のアメリカ留学の許可に関するものであるが、留学費用については、浅野辰夫は父の負担、他は静岡藩知事の個人負担が明記されているのである。

このように静岡藩関係のアメリカ留学の多くは、「徳川家（静岡藩ではない）と海舟の金銭援助があってこそ、行われたものであった」ことから、徳川家と海舟の経済的負担は大きかった（『勝海舟関係資料 海舟日記（五）』、解説、p.137）。折しも、明治4年7月14日には、「廢藩置県」が断行され、9月には海舟も静岡から東京へ居を移したこともあって、海舟は、私費留学から官費留学への転換するための折衝を始める。すなわち、

[9月16日]

「寺島外務太（ママ）輔〔寺島宗則外務大輔〕江、外国江私ニ行き候者所置相談」

[9月17日] 「屋敷江行く、服部江外国留学印章願下案之事談す」

[9月18日] 「服部<服部常純（静岡県大参事）>より留学生之艸案差越」

[9月19日]

「寺島江留学生之艸案為持遣す・・・○寺島ハ返書、何れ、参朝之節可伺旨」

[9月20日] 「寺島ハ留学生之事外務局江可願旨申来る」

[9月晦日] 「服部ハ大儀見已下文部省江可願旨外務省ニ而申聞られ候旨」

[10月1日]

「神田好平<神田孝平> 大儀見已下之事、文部省江願出す御周旋頼手紙認、服部江渡す」
である。この神田孝平は、第4章第3節で紹介した神田乃武の養父である。

大儀見元一郎等の私費留学から官費留学への切り替えは、寺島宗則外務大輔や外務省の了承も得られるが、文部省との折衝は続く。すなわち、

[10月6日] 「町田〔町田久成（文部大丞）〕江行く、留守ニ付置手紙」

[10月7日]

「服部より文通, 外国留学人之事等田辺 [田辺太一 (外務大丞)], 受合云々申越」

[10月8日] 「町田文部大丞へ返書, 服部江為持遣す」

[10月18日] 「町田文部大丞江留学生之談す」

である。しかしながら, 財政負担の増加を危惧した大蔵省の意向を反映してか,

[10月25日]

「大久保殿<大久保利通>江訪ふ, 留守

町田大丞ニ逢, 留学費用願之事願書引返可申旨話有之候」

[11月5日] 「浅野へ文通, 留学生之事, 文部省江書付出版旨」

であり, 結果は芳しくなかったのである。

5 その後の横井佐平太

横井佐平太については, 第2章第3節の「横井兄弟の留学事始」で詳しく紹介したように, 新島襄に続くアメリカ留学生であり, ニュージャージー州ニューブランズウィックに住まいした最初の日本人留学生である。ラトガース・グラマースクールで学んだ後, 1869年12月に, アナポリスの海軍兵学校に入学している。

第3章第4節で紹介したように, *Annual Register of the United States Naval Academy* (1870-71年版) の「合衆国上下両院の決議 (1868年7月27日承認) によって受け入れた生徒」の欄には, 「松村淳蔵と伊勢佐太郎 (横井佐平太)」の名前が特別に注記されていたが (p.20), この1871-72年版では, 松村のみが兵学校2年生修了の名簿の16番目 (45名中16番の成績) に記載され (p.13), 横井は, この名簿から除籍され, 代わり勝小鹿が次年度の入学予定者の名簿に記載されているのである (p.18)。

松村淳蔵は, 4年でアナポリスの海軍兵学校を卒業しているが, 横井佐平太は, 希望に満ちた入学あったにもかかわらず, 2年生修了の前に退学していたのである (高木 (2005) によれば, 1871年10月24日の退学である)。

横井佐平太の弟・大平は, 第3章第4節で言及したように, 肺結核のために1869年7月に帰国したが, 明治4年4月2日 (1871年5月20日) に21歳で逝去する¹²³⁾。「海舟日記」では,

[明治4年5月9日] 「横井 病死ヲ聞」

である。

横井佐平太は, このような弟・大平の早すぎる逝去や海軍兵学校退学等からこの年に帰国する。すなわち,

[明治4年12月15日] 「○横井先生甥元塾生伊勢佐太郎, 米利堅へ帰りニ付話有之」

である。

123) 『勝海舟関係資料 海舟日記 (五)』の脚註 (p.54) では, 4月3日逝去としているが, 4月2日逝去は, 杉井 (1984) の「墓碑銘」調査による (p.124)。

杉井（1984）は、こうした弟・太平の夭折もあって、明治4年に、佐平太が一時帰国したが、翌明治5年に、政府の命により再び渡米し、アナポリス海軍兵学校に復学したとの説をとるのに対して（pp.125-126）、高木（2005）は、横井佐平太のフェリス宛の書簡（1872年12月4日付）からは海軍兵学校への復学の意思が見られず、また、海軍兵学校の史料からも復学の実を確認できないことから、復学はなかったと結論に達している。確かに、高木（2005）に採録されたフェリス宛の書簡においては、日本人の海軍兵学校入学の道を開いたフェリスに感謝しつつも、海軍兵学校復学の意思はもはやないこと、また、日本には陸海軍に関する法制に通じた人がいないので、さらに英語と軍事・政治制度を学び、可能な限り早く帰国し、国に貢献したい旨を明確に述べているのである。

横井佐平太は、高木（2005）が示唆するように、再渡米後には、マサチューセッツ州ウエスト・ニュートンのジョセフ・アレンが経営する私立学校において英語等を学んだと思われる。しかしながら、再度のアメリカ留学は2年ほどであり、帰国して間もなく、明治8年6月には元老院権少書記官に任ぜられたが（合わせて正七位にも叙せられたが）、同年10月3日、逝去したのである（再渡航後の略歴は、杉井（1984）、pp.131-132に採録された「伊勢君墓」拓本による）。

第8章 岩倉使節団と官費留学規則取調

1 岩倉使節団の派遣

日米修好通商条約は、安政5年6月12日（1858年7月29日）に江戸で調印され、万延元年4月3日（1860年5月22日）にワシントンで批准書が交換されたものであるが、条約改正の交渉については、第13条により、「凡百七十一箇月の後（即千八百七十二年七月四日に當）」（英語条文では「After the (4th of July, 1872) fourth day of July, one thousand eight hundred and seventy-two」）から、1年の事前通告をもって可能となる旨が規定されていたのである¹²⁴⁾。このため、外務省では、明治3・4年から改正のための準備作業に入っていたのである。

岩倉使節団は、欧米諸国との修好通商条約の改正（領事裁判権の撤廃・条約関連条文に明記された日本の関税条項の削除等）の予備交渉のための外交使節として、明治4年11月12日（1871年12月14日）に横浜から出帆し、サンフランシスコに向かった¹²⁵⁾。予備交渉の使命を帯びた岩倉使節団ではあったが、留学生を帯同したこともあり、出発直前には大人数に膨れ上がり「大規模視察隊」として出帆したのであった。

この外交使節派遣の議を軌道に乗せたのは、参議（外務省条約改定担当）の大隈重信であった¹²⁶⁾。これは、明治4年8月頃と推定されるが、当時は、「薩長の軋轢」「官吏の衝突（保守派の大久保らと進歩派の大隈らの衝突）」と激しく、政務処断が困難を極めていた。当初は、発議した

124) 日米修好通商条約の条文は、『舊條約彙纂 第一卷第一部』による。

125) 本節のこのパラグラフ以降は、大久保（1976）の「第1章 岩倉使節の派遣について（pp.15-107）」及び「特命全權大使米欧回覧実記 年譜（pp.325-361）」を参考にし整理したものである。

126) 大久保（1976）、p.30による。

大隈が使節の任に当たることで準備が進んだが、その後の大隈からすれば、政務処断の迅速化を促進するためには、障害となる人物を外国に派遣し、「その間にいわゆる「鬼の留守に洗濯」という調子で、十分な改革をする」ことも選択肢のひとつとなっていたのである。政府内部での確執もあり、最終的には、岩倉具視が使節に決まり、また、(障害を取り除く目的から) 多人数の外国派遣となったのである。

『岩倉公實記』には「事由書」と呼ばれる文書に掲載されており、この外交使節派遣の基本構想は、この「事由書」に依拠しているものとされている¹²⁷⁾。この文書の起草者や起草の時期は、不明とされているが、外国視察論に関しては、フルベッキの「ブリーフ・スケッチ」がもととなっている。「ブリーフ・スケッチ」は、条約改正論を展開したのではなく、外国人のフルベッキは、条約改正の問題には一切触れていない¹²⁸⁾。「ブリーフ・スケッチ」の外国視察論は、政治、経済、学校、軍事及びキリスト教に関連した施設の訪問先とその調査方法等を提案したものであったが、「事由書」には、キリスト教関連を除いた4項目が記載され、その内容も「ブリーフ・スケッチ」と酷似していたのである。

フルベッキは、1864年8月に、長崎奉行管轄の英語所(後の「済美館」)の校長(兼)教師となっていたが、1866年には、佐賀藩が長崎に開いた「致遠館」の教師も務め、ここでは、大隈重信や副島種臣を教えていたのである。さらに、1868(明治2)年には、大隈の尽力により東京に招聘され、開成学校(のちに大学南校)の教師になっていたのである。こうした人的関係もあり、「ブリーフ・スケッチ」は、明治2年5月20日(1869年6月11日)、大隈重信に対して意見書として提出したものであった¹²⁹⁾。

ところで、岩倉は、明治4年9月ごろに大使に内定するが、内定とともに、使節団の組織や各国との交渉の方法等についての準備に入る。その準備中に、フルベッキの「ブリーフ・スケッチ」の存在に気づき、明治4年9月13日(1871年10月26日)、フルベッキを招き、これを確認する¹³⁰⁾。すなわち、

“ Did you not write a paper and hand it to one of your chief officers ? ” was his first question (Griffis (1900), p.259).

である。フルベッキは、2年前のことだったので忘れかけていたが、3日かけて、これを復元し、岩倉に提供したのであった。その後、二人は、この問題で話し合う機会を数回もったのであった。なお、すでに述べたように、岩倉具視の子息の岩倉具定・岩倉具経兄弟も、長崎でフルベッキから英語等を学んでおり、明治3年2月、フルベッキのフェリス宛の紹介状をもって、随行の服部、山本、折田とともにアメリカに渡り、ニューブランズウィックで留学生活を送っていたのであった。

127) 大久保(1976), p.34による。なお、「事由書」は、pp.160-165に採録されている。

128) 大久保(1976), p.41による。

129) Griffis (1900) の手による *Verbeck of Japan* のp.188には、1869年6月11日に使節団派遣と視察先の具体的な内容を提案した旨が記載されているが、「ブリーフ・スケッチ」についての言及はない。

130) 大久保(1976), p.54-55によるが、詳細は、Griffis (1900) のpp.258-263を参照のこと(なお、この書のpp.255-262は、大久保(1976), p.252-259にも採録されている)。

上の経緯はともかくとして、岩倉使節団（大副使・随員・（専門分野の調査研究に従事する）理事官・理事官随員の50名、随員の華士族48名、女子留学生5名等）は、明治4年11月12日（1871年12月14日）、アメリカ号で横浜を出帆し、12月6日にサンフランシスコに到着する。

ここで、本論から少し離れて、アメリカ号でのエピソードを挿入する。1860年4月に来日したアメリカバプテスト自由伝道協会のゴープルは、横浜で宣教活動をしていたが、このアメリカ号に同船していたのである¹³¹⁾。病気の妻エリザと子供二人を1871年12月に帰国させ、ゴープル自身は『摩太福音書（マタイ福音書）』の聖書翻訳に傾注し、1872年1月にこれを刊行し¹³²⁾、さらに12月にはバラとの領事裁判にも勝訴し143ドルを手にし¹³³⁾、13年ぶりにアメリカへ帰国するためであったが、「何らかの使節団への働きかけを意図して」、使節団の日程に合わせてアメリカ号に乗船していたのである。実際、使節団の先導役として乗船していたアメリカ公使デ・ロングを通じて岩倉の要請を受け、岩倉と「神祇官」の役人2人に対してキリスト教独特の教義と慣例・儀式を教えることになったのである。岩倉の意図は、条約改正の予備交渉の場において交渉相手から持ち出されると想定されるキリスト教問題（キリシタン禁制の掟の廃止問題）に対する下準備であった¹³⁴⁾。ゴープルは、使節団歓迎の呼びかけをサンフランシスコの「イヴニング・ブリティン」や「ニューヨーク・タイムズ」に寄稿したほか、機関誌「アメリカンバプテスト」にも手紙を掲載し、使節団歓迎ムードを高めようとしたのである。しかし、こうしたゴープルの努力にも関わらず、川島（1988）によれば、アメリカ号の船上の事柄は、「ゴープル側の記録があるだけで、使節団関係文書にはなにも見出すことはできない（pp.97-98）」のである。

こうした宣教師に関するエピソードは、ともかくとして、使節団一行は、サンフランシスコに2週間ほど滞在した後、鉄道をつかって¹³⁵⁾、シエラネバダ山脈を越え、12月26日、ソルトレークに着く。ここでは、モルモン教の礼拝堂の見学もしている。さらに、ロッキー山脈を越え、ネブラスカ州・アイオワ州を経て、イリノイ州に入り、明治5年1月18日、シカゴに到着する。ワシントン着は、1月21日であり、アメリカ駐在の少辨務使森有禮やアメリカ政府の接伴掛ゼネラル・メヤーの出迎えを受けている。ワシントンでは、グラント大統領との謁見、ホワイト・ハウスへの招待等の公式行事を執り行われた。条約交渉の一方で、使節団一行は、ナイアガラ、フィラデルフィア、ニューヨークにも行き、造幣局や海軍兵学校等の公的施設の見学のほか、観光・観劇

131) 川島（1988）、pp.95-103及びp.145による。

132) ヘボン・ブラウン・奥野昌綱（共訳）の『馬可伝福音書（マルコ福音書）』、『約翰伝福音書（ヨハネ福音書）』の刊行は、1872年秋である。ゴープルは、プロテスタント諸派の聖書翻訳において先陣を切ったことになる。

133) バラとの領事裁判の件については、川島（1988）、pp.131-210を参照のこと。

134) 川島（1988）、pp.96-97による。なお、高橋（2014a）では、富田の郷里・宮城県で起こったハリストス教徒（ロシア正教）捕縛事件に言及し、これが岩倉使節団にも伝えられた旨を述べたが、岩倉使節団は、「耶蘇書類」を携帯しており、この中にはこの記事も入っていたのである（山崎（2006）、p.122）。しかしながら、この事件は、岩倉使節団出発後の明治5年に起きているので、この事件の使節団への伝達・記録方法等については、今後の課題としたい。

135) 『特命全権大使米欧回覧実記 一』の表現では、「[カリホーニヤ] 太平洋社ノ蒸気車ニ上ル、○米國ニテハ、昼夜兼行ノ蒸気車イ、[スリピンカール] ト名ク車アリ（p.113）」である。

もしているのである。そして、7月3日には、ボストンから「英国ノ「キュナルト」会社ノ郵船、「オリンハス」号」ノ汽船ニ乗込メリ（『特命全権大使米欧回覧実記 一』, p.368）, イギリスに向かったのである。

アメリカ留学生関連では、使節団がイギリスに向かう直前の1872年8月2日（明治5年6月29日）、Griffis (1916), ボストンの日本大使館（原文：The Japanese Embassy）において、オランダ改革派教会のフェリスに対して、岩倉具視と大久保利通の連名で「公式」の感謝状を贈っている。これは、留学生に対する支援と奨励に対する感謝を示すものであった（原文は、Griffis (1916), p.36, すなわち、*The Rutgers graduates in Japan*の最後のページに採録されている）。

また、本稿の第2章では「ニュージャージー州ニューブランズウィック」の日本人留学生について説明したが、『特命全権大使米欧回覧実記 一』では、岩倉具視の二子がここに居住していることや、この『実記』の記録係の畠山義成がかつて居住していたこともあってか、5月5日にワシントンからニューヨークに向かう途中の記事の中で、ニューブランズウィックについての簡単な説明があることを附言しておく。すなわち、「「ニューデェルセイ」州ノ「ニューブンスウィーキ」ニテ天明トナル、此ハ有名ナル学校ノアル一都邑ナリ（p.255）」である。

2 「海舟日記」

「海舟日記」にも、使節団の岩倉具視・大久保利通や随員に関する記載があるので、この節で紹介することにしよう。前節で述べたように、明治4年9月ごろに、岩倉が使節団の大使に内定し、使節団随員の人選が始まる。海舟は、8月に東京から「御用召状」が届いたことから、住まいを静岡から東京に移しているので、静岡藩が派遣した留学生の費用負担の要請等で政府事務方の要人とも折衝することになる。この件は、すでに前章第4節で紹介しているが、使節団関係を、再度、紹介すると、

[明治4年10月7日] 「服部より文通、外国留学人之事等田辺受合云々申越」

である。この条の「田辺」は、田辺太一外務少丞であり、翌8日に使節団の一等書記官に任命されている。この10月8日の発令は、特命全権大使として岩倉具視、特命全権副使として木戸孝充・大久保利通・伊藤博文・山口尚芳の4名、一等書記官として田辺太一・塩田篤信・福地源一郎の3名、二等書記官3名の計11名であった¹³⁶⁾。

田辺太一以外の使節団関係者としては、

[11月5日]

「村田新八殿江暇乞ニ行く

浅野ハ文通、留学生之事、文部省江書付候旨・・・・

安場一平、洋行ニ付暇乞

肥田浜五郎、竹村江一封悴江一封届方頼遣す」

136) 以下の岩倉使節団に関する発令事項及び日付は、特に言及がない場合には、大久保（1976）に採録された「特命全権大使・副使以下使節団人事関係」, pp.166-173) による。

である。

村田新八は、東久世通禧侍従長が「理事官」として派遣されることに伴う随行である（「宮内大丞 村田経満」として10月22日発令）。村田は、西郷が「傍らに居た桐野や村田に進撃中止の命令を伝へた（『氷川清話』、p.376）」とあるように西郷の側近であった。これが、海舟のほうから村田を訪ね、惜別を惜しんだ理由かもしれない。しかしながら、帰国後、村田は、西郷軍に加わり、桐野利秋とともに西南戦争で戦死する。

安場一平も、使節団随行である¹³⁷⁾（「租税権頭 安場保和」として11月3日に随行の発令）。海舟からアメリカ留学中の竹村謹吾と勝小鹿への封書の届け方を依頼された肥田浜五郎は、「理事官」としての派遣である（「造船頭 肥田為良」として10月23日発令）。肥田は、当時は横須賀造船所技師長の任にあったが、幕臣・幕府長崎海軍伝習所の第2期生（海舟は第1期生）・咸臨丸の蒸気方（機関長）と、青年時代の海舟と似た経歴をもち、その後も親しく交際していたのである（肥田は、「海舟日記」にも頻繁に登場するので、ここではその紹介を省略する）。

海舟は、薩摩藩出身の大久保利通（大蔵卿）とも、政務上の関係から親密に交際していたのである（明治元年10・11月については、高橋（2014b）を参照のこと）。明治4年10・11月については、

[明治4年10月13日] 「本多敏三郎、外国行いたし度ニ付大久保殿江申込候様申聞」

[10月25日] 「大久保殿江訪ふ、留守」

[11月4日] 「大久保殿江暇乞ニ行く、烟艸入呈上」

である。使節団の出帆のほぼ1週間前には、大久保利通を訪れ、餞別として煙草入れを贈っているのである。これに対して、大久保も

[11月9日] 「大久保大蔵卿殿、洋行暇乞として御出、国内御所置之内話」

である（この日の条には、「川村兵部少輔、人員之事内話 榎本釜次郎已下近々御免之趣内話有之」も記載されている）。翌10日には、使節団一行が東京から横浜に向かうが、その多忙の中、大久保の方から海舟を訪ね、内政上の種々の話をしているのである。

「海舟日記」には、使節団派遣決定の前後の時期に、岩倉具視に関する記載はみられない。岩倉に関する記載は、第6章第1節で紹介したように、明治元年10・11月以降の徳川慶喜の赦免嘆願、明治2年7月の駿府処分問題（解決直後に海舟が外務大丞に任ぜられる）、明治2年11月の海舟の兵部大丞任命に関する事項等である。すでに紹介したように、本稿で重要な事項は、岩倉具定・岩倉具経兄弟のアメリカ留学についての記載である、すなわち、

[明治2年12月17日] 「岩倉様御子息御兩人留学之事御出聞」

である。海舟の長男・小鹿がニューブランズウィックで学んでいることを知っての質問であり、岩倉具視をこれにより二人の子息をアメリカ留学に送り出す安心感を得たものと思われるのである。この時には、ニューブランズウィックでの勉学の様子ほかに、小鹿がアナポリス海軍兵学

137) 安場一平の件は、明治4年5月9日条、9月晦日条と10月1日条にも記載がある。なお、10月1日条には、第7章第4節ですでに紹介したように、第3章の神田乃武の養父・神田孝平も、「神田好平」として記載されている。

校に進学することや小鹿とともに渡米した富田鐵之助・高木三郎のことも、話していたものと推察されるのである。

使節団が派遣される明治4年では、

[明治4年2月2日] 「大久保公、岩倉殿御昼休可罷出旨申来候由申越」

[2月3日] 「岩倉御通過、知事殿御達、都合宜敷旨也」

である。岩倉具視と大久保利通は、京への途上にあり、海舟は、静岡在留中のことであった。

3 官費留学規則取調の任命と海外留学制度の整備

第1節で述べたように。岩倉使節団は、明治5年1月21日（1872年2月29日）、ワシントンに着く。25日にはグラント大統領に謁見し、27日には国会議事堂を見学しているが、そのかわり、使節団は、勅旨に従いアメリカ留学生に関する任務に着手する。

明治4年11月4日の勅旨（特命全権大使の使命に関する勅旨）は、「一 使命の大旨国書ヲ体シ」から始まるもので、9項目の具体的な行動指針・注意事項を示したものである。その第7項目の後半部分は

「各国ニ官費ヲ以テ留学スル生徒ノ分科修業ヲ検査案定シ、

失行無状ノモノハ帰国ヲ申渡スヘシ

但留学生徒ノ費用ヲ裁省シ其方ヲ検定スヘシ」

である¹³⁸⁾。岩倉使節派遣に先立ち、各省は10月に使節への依頼事項を太政官正院に提出したが、大蔵省（井上馨大蔵大輔）も、留学生の取り扱い・学資の取り扱い監督方法・学資引受人に関して意見具申を行い、勅旨にはこの大蔵省の意見も盛り込まれていたのである（渡辺（1976）、p.300）。

アメリカに到着した特命全権使節は、明治5年2月、この勅旨を実行するために、

平賀義質、杉浦弘蔵、大原令之助、外山捨八、富田鐵之助、山本重助、

服部一三、高木三郎、新島七五三太、松村淳蔵、名和緩、白峰駿馬

の12名を「官費留学規則取調」に任じ、森少辨務使と田中文部大丞をこの会議の主宰者に任じたのである¹³⁹⁾。さっそく会議が招集され、会議を運営するための「留学生規則取調規律」が定められたのである。この会議は、3分の2の出席で成立し、多数決による決定であったが、より重要な決定は、「一 主宰兩人ノ内一人ハ必ス會議之日出席ノ事」である。これは、単に会議運営のための事務的事項というよりも、会議の決定事項を実行するための担保措置であった。1872年3月8日には、「取調」が処理すべき具体的事項を決定するとともに、役割分担も決めている。すなわち、「留学生進学之次第云々」は、（席頭）外山捨八、（書記）服部一三、大原令之助、新島七五三太、松村淳蔵の5名であり、「方今在留生徒行跡病身又ハ修業ニ堪ヘ難キ者等取調之事」は、（席頭）杉浦弘蔵、（書記）名和緩、白峰駿馬、山本十介（重輔）、高木三郎の5名であった。また、この

138) この勅旨は、大久保（1976）、pp.180-181に採録されているので、これを参照のこと。

139) このパラグラフは、杉浦弘蔵が残した「ノート」に基づいている。犬塚（1987b）には、「翻刻杉浦弘蔵ノート」として採録されている。

会議の決定として最も重要な「学費ノ数ヲ進業ノ体ニ従ヒ區別スル事」は、(席頭)高木三郎、(書記)富田鐵之助、平賀義質、杉浦弘蔵の4名であった。

1872年3月8日に、新島襄がジョージタウン、D.C.からハーディ夫妻に宛てた手紙では、

Twelve Japanese students in the States were summoned to meet him to give him some advice. The power was granted them to make any motions or give any advice to him, and the motions would be carried by the vote of majority.

であり(『新島襄全集 6』, p.96), 上の「翻刻 杉浦弘蔵ノート」の記載のように、会議は12名による多数決での決定であった。この手紙の「him」は、「田中文部大丞」のことである。さらに、3月10日のハーディ夫妻宛の手紙には、

Several topics for discussion were given out by Mr. Mori. The parties divided the topics and met in different rooms to discuss their own topics. This morning we met together and brought our separately discussed topics into the general assembly.

とあり(同上書, p.98), この会議の具体的な進め方が分かる。後には、新島が「遺言」を富田に残すまでの深い信頼関係で結ばれることになるが、ともかくも、この会議が、新島と富田の最初の出会いであった。

ところで、この「取調」は、単なる取調ではなく、非常に有能でアクティブな集団であった。外山捨八(外山正一)と名和緩(名和道一)は、明治3年に森少辨務使に従って、それぞれ、「辨務少記」、「辨務権少記」として辨務使館に赴任していたが、明治5年2月までには「外務権大録」や「中録」に昇格していたのである¹⁴⁰⁾。

富田鐵之助も、明治5年2月2日(1872年3月10日)、特命全権大使から「ニューヨーク領事心得」に任じられる。すなわち、

「明治五年二月二日 紐育在留領事心得ヲ以テ諸事取扱可申

勤候内一ヶ月貳百元下賜候事

特命全権大使」

である(『東京府知事履歴書(富田鐵之助履歴)』)。さらに、高木三郎も、2月16日に外務省9等出仕(辨務使館書記)に任じられる¹⁴¹⁾。「海舟日記(勁草書房版)」では、この任命から3か月遅れて

[明治5年5月5日]

「富田鐵之助、米国ヨールク<ニューヨーク>の領事館心得、

高木三郎、華聖頓(ワシントン)九等書記官拜命の旨申し来る。」

である。海舟にとっては、うれしい待ちに待った知らせであった。

アメリカ在外公館勤務のこの4名は、「取調」ではあったが、「取調」の業務は、副次的な業務に過ぎず、主たる業務は、明らかに使節団の受け入れへの対応であり、辨務使の指揮に従って使節団との応接にあたることであった。

140) 『官員録 明治五年二月改』による。辨務少記及び辨務権少記の件は、渡辺(1977), p.235による。

141) 『高木三郎翁小傳』, p.47による。高木の外務省9等出仕の件は、『官員全書 外務省 壬申五月改』にも記載がある、なお、外務省9等出仕は、外務権大録と同等の職位である。

他方、杉浦弘蔵（畠山義成）と大原令之助（吉原重俊）は、2月9日（西暦3月17日）に使節団三等書記官に任じられ、新島七五三太（新島襄）も、三等書記官心得に任じられていたのである。畠山義成は、岩倉具視の信任が厚く、久米邦武とともに、つねに岩倉に随行し通訳・記録係を務めたのである（周知のように『特命全権大使 米欧回覧実記』は、久米邦武の執筆・編集による）。吉原重俊の最初に仕事は、一時帰朝する大久保利通に随行することであった。岩倉が条約改正の全権を委任されたものではないと明言したことから、アメリカ側から全権委任状を求められ、副使の大久保利通・伊藤博文がこれを取りに日本に戻ることになったためである。7月にはその役目も終り、その後は使節随行心得をもって「外政事務取調」の任にあったのである。新島襄は、文部省理事官（田中不二磨文部大丞）随行を命じられ、田中の通訳としてアメリカ・ヨーロッパの教育制度・教育行政の調査や教育施設の視察に同行したのである。この3名は、いずれもアメリカの大学進学経験者であった。平賀義質（司法少判事）は、司法省理事官（佐々木高行司法大輔）の随行を命じられて（明治4年10月22日発令）、ワシントン到着とともに、「取調」にも任じられたのであった。

こうした中であって、任命当初の「官費留学規則取調」の中心となったのは、おそらく杉浦弘蔵（畠山義成）であろう。杉浦弘蔵（畠山義成）は、「取調」に任じられる直前の1871年12月18日（明治4年11月7日）、「英國留学生ノ義ニ付陳述書」を提出しているのである（犬塚（1990）に採録）。この意見書はイギリス留学生を対象としたものではあったが、留学を円滑に進め留学成果を上げるためには、日本国内には専門の官吏を置きイギリスにはイギリス人の生徒監督者を置くこと、イギリス側には英文に翻訳した7項目の必要事項を連絡すること、語学・数学に通じていることを留学条件とすべきこと、生徒監督者の職掌の10の条件を定めること等の意見を述べていたのである。こうした経験から杉浦が「修業ニ堪へ難キ者等取調之事」の「席頭」に推されたと思われるのである。しかしながら、このような見識をもった杉浦であったが、7月には、岩倉使節団の記録係としてイギリスに向かう。

さらに第3章第4節で紹介した吉田清成の動きにも注目しなければならない。吉田清成は、明治3年5月、外務省から「学資配分担当（学費等配達方）」に任命されたが、この年の秋には（同じ旧薩摩藩出身の）上野景範大蔵大丞に見込まれ、アメリカを離れイギリスへ同行し、明治4年2月には「大蔵省出仕」となる。さらに、5月・大蔵少丞、7月・租税権頭、10月・大蔵少輔とスピード出世し、（大蔵卿大久保利通が使節団副使として渡米中の）大蔵省内では、井上馨大蔵大輔に次ぐ、実質的にナンバー・ツーの地位にまで昇っていたのである。しかし、その吉田清成も大蔵省理事官として使節団に加わることになり、渡米の際、井上馨大蔵大輔との間で「吉田清成宛米國派遣に際しての廉書（明治5年2月14日）」の形で打ち合わせが行われたのである（『吉田清成関係文書五 書類篇1』, pp.219-223に廉書の原文採録）。この廉書には、アメリカでの公務（カリフォルニア銀行との間で取り決めた二分判精練の清算方法・アメリカでの公債発行条件等の20項目ほど）の確認・注意事項が記されているが、この中には

「一 生徒取締向は整然相届候哉、森弁務使へ御聞糺之上又々御打合有之度事。

一 生徒之内病身又は老人にて往々御用立兼候者は帰朝候様取計之事。」
と留学生関係の事項も記されていたのである。

イギリスでも、アメリカと同様の動きがあり、「5年3月、監督者の在英寺島大弁務使からその整理が全権大使に上申（大久保（1976）, p.94）」され、「生徒取締」の件も順調に進むと思われた。しかしながら、アメリカの「取調」は、使節団の行程が進むに従って、メンバーが次第に減っていく。まず大原令之助（吉原重俊）は、「取調」に任ぜられた直後の明治5年2月9日には「三等書記官（令之助儀ハ今般利通随従帰朝致候）」の辞令を受ける¹⁴²⁾。2月12日には大久保利通がワシントンからニューヨークに向かっているの、これに随行したものと思われるのである。新島七五三（新島襄）も、この会議の主宰者のひとり、文部省理事官田中不二磨の通訳として、使節団に先行し、1872年5月11日（明治5年4月5日）、教育制度の調査研究のため、ジャージー・シティからアルジェリア号でイギリスへ向かう¹⁴³⁾。使節団記録係の島山義成は、使節団に随行し、明治5年7月にはイギリスに向かい、平賀義質も司法省理事官佐々木高行に随行し、司法制度の調査研究のためにヨーロッパに向かう。さらに、山本重輔も、6月19日にイギリスでの鉄道研究を願い出て許可され、使節団に随従してイギリスに渡る¹⁴⁴⁾。こうして、2月に「官費留学規則取調」に任じられた12名のうち、使節団との関連で5名が不在（主宰者の任にあった田中不二磨文部大丞を含めると6名が不在）となり、「取調」は、辨務使館を中心として実務的に処理されていく。

短期間ではあったが集中的に開かれたと思われるアメリカでの「取調」会議の議論・結論等も踏まえ、国内的には、海外留学の制度が整備される。すなわち、明治5年8月には、明治3年の「海外留学規則」を「学制」の「海外留学生規則ノ事」として改正・整備し直し、留学生はすべて文部省管轄とすることと官費留学生の資格・年限・学資等の詳細を定めたのである（渡辺（1977）, p.305）。

明治6年3月には、「海外留学帰朝ノ生徒試業法」により、帰国後の海外留学生が文部省に報告すべき事項と帰国者へ学力試験を課すことを定めるとともに、「学制」の不備を補うために細則を追加したのである（渡辺（1977）, p.306）。さらに、文部省が留学生の主管官庁となったことから、明治7年6月には、文部省によって「留学生監督章程」が定められ、外務省を経由して、これが各国在留の公使・領事等に伝えられたのである（渡辺（1977）, p.312）。この内容は、文部省の管轄の下で海外留学生監督を設置すること、留学生に対する監督要領を定めること、監督は文部省との報告を密にすること等であった。これは、後述の官費留学生全員引き上げ後の「新しい官費留学制度の実現を期して」の「具体化の第一歩」であった（石附（1992）, pp.25-251）。

実は、こうした海外留学の制度整備は、財政問題とも密接な関係があったのである。石附（1992）に従えば、各省の財政事情は、次の通りである（pp.213-230）。大蔵省は、これまで藩から出されていた留学費を、廃藩により、肩代わりしたことから、明治5年には、留学生（330名余、うち

142) この大原令之助の辞令は、大久保（1976）, p.172に採録されている。

143) 『新島襄全集 8』, p.92による。

144) 巖（2008）, p.34による。

旧藩100名余)のための学資負担が41万円超となり、留学生の減員と整理を要請していたのである。外務省も、日本からの学資給付金の送金が安定しなかったことから、これを立て替える必要があり、そのわずらわしさを痛感していたし、留学生の修学態度にも問題があるとの認識に立っていたのである。文部省も、予算要求を大幅に削られ、122万円ほどの予算となったが、先の41万円(「学制」によって、各省からの派遣者分を除き、学資給付金は文部省予算での支出に変更)はこのほぼ3分の1を占めるまでになっていたのである。

この官費留学生の削減問題は、緊縮財政とも関係して、政府の重要な政策課題・財政課題になっていく。使節団は明治6年9月に帰国するが、11月の参議会議では官費留学生の一括引き上げが決定され、12月には太政官布達によって官費留学生全員に帰国の命令(のちに陸軍省関係・女子留学生関係除外)が出されるに至ったのである(石附(1992), pp.230-231)。

4 官費留学規則取調の人々

前節の「吉田清成宛米国派遣に際しての廉書」には、留学生関係以外にも、注目すべき打ち合わせ事項がある。すなわち、

「一 留学生徒之内本省へ撰任すべき人物有之候は、御銓撰被成、
其長所と品等とを略記し御差遣有之度事。

但高木・富田兩人は森弁務使へ御催促之上御遣し有之度候事。」

である。大蔵省は、留学生の経費削減のために(成績が思わしくない)生徒の取り締まりを主張しながら、有為な留学生を積極的に任用する方針を固めていたのである。具体的には、森少辨務使の理解と助力を得て、高木三郎と富田鐵之助を任用することを考えていたのである。(明治4年7月には、維新前後に海外留学した者を帰国させ、学校や官庁において採用するために、候補者16名がすでにリスト・アップされていた、すなわち、「海外留学生採用ノ為メ帰朝セシメン事ヲ請フ・附姓名書(『太政類典』、第119巻・件名番号081)」であるが、これには、富田や高木のほか、勝小鹿の名前も見られるのである)。

前章で見たように、海舟と大蔵卿大久保利通とは政務以外でも懇意であったから、このふたりの件は、当然に海舟から大久保に伝えられていただろし、また、本稿の第2章や第3章で見たように、吉田清成も、ニューブランズウィックに住まいしていたから、このふたりの見識・人格等を十分に把握していたのである。結果は、森少辨務使による外務省での任用(大使岩倉具視、副使木戸孝允・山口尚芳の承認を得ての使節団による富田のニューヨーク領事心得と高木の辨務使館書記としての任用)であったが、東京の大蔵省には未だこの報が伝わっていなかったのである。

この例が示すように、留学生の人的関係が錯綜するので、この節では「官費留学規則取調」等の略歴について整理しておく。まず、使節団の岩倉や大久保と海舟との人的関係では

〔岩倉具視〕 山本重助(山本重輔)・服部一三 <ともに岩倉の二子に随行>
名和緩(名和道一)
<3名とも旧長州藩士>

- [大久保利通] 杉浦弘蔵（畠山義成）・松村淳蔵
 吉田清成・森有禮 <以上、4名はいずれも薩摩藩第1次留学生>
 大原令之助（吉原重俊） <薩摩藩第2次留学生>
- [勝海舟] 富田鐵之助（旧仙台藩士）、高木三郎（旧庄内藩士）
 白峰駿馬（旧長岡藩士）
 外山捨八（外山正一）（旧幕臣・静岡学問所一等教授）
 新島七五三太（新島襄）（旧安中藩士）

とに区分できるであろう。

このうち、畠山義成・松村淳蔵・吉田清成については、すでに、第3章や第4章において、山本重輔・服部一三については第3章において、また、白峰駿馬と外山正一については、第6章第3節や第7章第4節において紹介した通りである。吉原重俊も、第6章第4節で紹介したように、薩摩藩でありながら海舟門下でもあった。

新島襄は、万延元（1860）年11月に幕府軍艦操練所に入り、2年ほど学んだ経験をもっていたのである。幕末維新时期には、海舟との直接的な交流は無かったと思われるが、明治10年代に入ると両者は親密な交際（時には一時的な断絶）をする。幕末には新島の妻八重の兄・山本覚馬（会津藩士）が政務上の問題で頻繁に海舟を訪れていることや、明治10年代には先に紹介した横井兄弟の従兄弟にあたる横井時雄（横井小楠の長男、最初の妻は山本覚馬の次女、時雄は後に同志社第3代社長）が海舟宅によく出入りしていたこと、さらには新島と富田鐵之助との親交等が、海舟と新島の人的な結節点であった。

名和緩（名和道一）は、幕末の志士（長州藩士）であった。元治元（1864）年の禁門の変に連座し、終身禁錮に処せられたが、高杉晋作によって禁錮を解かれ（名前の緩は縄緩（なわゆるむ）に由来）、その参謀となり、明治に入ってから岩倉具視に仕えたのであった（『春城筆語』、pp.17-18）。「海舟日記」では

[明治2年5月18日]

「大久保一蔵殿 [大久保利通]・山岡江一封差出す
 岩倉殿御内名和緩江一封、共ニ関口江届方頼遣す」

である。この後、水原県参事や新潟県参事を経て（同上書、p.18）、明治3年には森有禮に従って¹⁴⁵⁾「辨務権少記」として渡米し、その直前の明治3年12月2日には、森有禮との連名で岩倉具視宛に「私共も明三日四字出帆之積ニて諸事整頓仕候」の挨拶状を出していた（『森有禮全集 第2巻』、p.733）。

「取調」の中で上のリストに記載がないのは、もうひとりの主宰者の田中不二磨と平賀義質であるが、平賀義質（旧福岡藩士）は、「長崎海軍伝習所などに藩から派遣された藩随一の洋学者（塩崎（2001）、p.107）」とされている。これが事実とすれば、長崎海軍伝習所の第1期生で（この伝習所に残って第2・3期生の指導にあった）海舟とも接点があったことになる。「海舟日記」では、

145) 『森有禮全集 第2巻』、p.83には、森から名和宛の書状（明治2年7月9日付）が採録されている。

[明治3年12月12日]

「米国より十月廿日出之書状并写真・本等，筑前平賀磯三郎帰朝持参之旨ニ而東京より着」である。平賀義質は，明治3年秋には海舟の長男・小鹿から書状・写真・本等を依頼されて帰国したのである。使節団には，司法少判事として司法省理事官（佐々木高行司法大輔）に随行し，再度の渡米であった。

次に，留学年と主たる留学地について整理すると，最初の留学年（最初の留学先に到着した年）は，

[慶応元（1865）年]

新島襄，畠山義成・松村淳蔵・吉田清成・森有禮

[慶応2（1866）年]

吉原重俊，外山正一

[慶応3（1867）年]

富田鐵之助・高木三郎，平賀義質

[明治元（1868）年]

白峰駿馬

[明治3（1870）年]

山本重輔・服部一三

であり，主たる留学地は

[ニューブランズウィック]

富田鐵之助・高木三郎・畠山義成・松村淳蔵・吉田清成（いずれも同時期に滞在）
白峰駿馬・山本重輔・服部一三

[アメリカ東部]

新島襄（マサチューセッツ州アーモスト）
吉原重俊（コネチカット州ニューヘブン）
平賀義質（マサチューセッツ州ウスター（ボストン近郊）¹⁴⁶⁾

[イギリス]

外山正一（幕府イギリス留学生）

であった。

また，大学等の卒業・退学については

新島襄（アーモスト・カレッジ1870年卒業，アンドーヴァー神学校1874年卒業¹⁴⁷⁾
吉田清成（ラトガース・カレッジ1869年退学）
吉原重俊（エール・カレッジ1871年退学¹⁴⁸⁾

146) 菅（2009）の「1870年アメリカ人口センサス」に基づく調査による。

147) 『新島襄全集8』，p.67及びp.120による。

148) 吉原（2013）による。吉原（2013）は，*The Yale Library Magazine*, Vol.36に基づいて1871年11月，大原令之助が普仏戦争観戦武官・大山弥助（大山巖）に従ってヨーロッパに派遣されることになっ

畠山義成（ラトガース・カレッジ1871年卒業）

松村淳蔵（アナポリス海軍兵学校1873年卒業）

である。

こうしてみると、「官費留学規則取調」は、その多くが、明治元年以前に留学し、主としてニューブランスヴィックで留学生を送った経験がある者たちであったが、これに、アメリカ留学生の中でも俊秀として知られた新島と吉原も加わり、非常に有能な集団になっていたのである。さらに、留学経験をもつ現役官僚や辨務使館勤務者が入ることで実効性を確保し、また、岩倉具視との関連においては、留学年数が比較的短い旧長州藩士が入ることで、岩倉との連絡役となっていたのである。

5 官費留学規則取調の人々：その後

第3節で見たように、岩倉使節団の渡英とともにこの「官費留学規則取調」のメンバーもほぼ半減する。富田鐵之助にとっては、短時間ではあったが、このメンバーと知遇を得たことは、後々、仕事上においても個人的にも、非常に有用であった。とりわけ、森有禮、吉田清成、吉原重俊、新島襄とのその後の人的関係は、注目すべきものがある。本稿の紙数にも制約があるので、富田鐵之助と彼らとの人的関係について、ここで簡単にふれておく¹⁴⁹⁾。

森有禮は弘化4（1847）年生まれであったから、天保6（1835）年生まれの富田からすれば、12歳も年下の上司であった（富田は、明治5年2月、ニューヨーク駐在領事心得、翌年2月、ニューヨーク駐在副領事であったが、森は、明治5年4月、中辨務使に、また10月には代理公使に任ぜられている）。両者の公務外の私的な行動、すなわち、「商法講習所」提案の件、富田と杉田縫の婚姻契約書（証人：森有禮）の件については、すでに紹介した通りである。

この他にも、森は、帰国後の明治6年に「明六社」を創っている。社員（会員）としては福澤諭吉や西周等が著名であるが、これまで紹介した田中不二麿や畠山義成も会員であったし、アメリカ在住の富田鐵之助と高木三郎は、グリフィス等とともに、この明六社の「通信員」となっていた。

また、先の「商法講習所」は、明治8年に、形式的は、森の私塾としてスタートし、その後は、東京会議所委託、東京府所管、農商務省所管（東京商業学校と改称）と変遷したが、明治18年5月には文部省所管に変わる（『一橋大学百二十年史』、pp.2-41及びpp.276-277）。森は、同年、「東京師範学校監督」「東京商業学校監督」の後、明治18年12月22日、初代文部大臣に任ぜられる。明治20年には、やむなく私塾として始めざるを得なかった学校を、自らの手で、「高等商業学校」に昇格させたのである。富田鐵之助は、日本銀行副総裁のかたわら、明治17年から洪澤栄一（第一国立銀行頭取）や益田孝（三井物産社長）とともに、東京商業学校の「校務商議委員」を務め

たことから大学を去ったものと判断しているのである。大原は、武官随行の後、フランクフルトで紙幣印刷に関する仕事もしたとされているので、明治5年2月（1872年3月）の「三等書記官」任命は、この直後ということになる。なお、吉原（2013）の著者・吉原重和は、大原令之助（吉原重俊）の曾孫にあたる。

149) この節は、『森有禮全集 第2巻』、『新島襄全集8』、『都史紀要8 商法講習所』、『東北学院百年史』、吉野（1974）及び吉原（2013）等を参考にして整理したものである。表記の複雑さを避けるために、直接に引用した箇所を除き、参考文献名・根拠となるページ等は、表記しない。

ていたが、明治19年12月24日、この職務により商業教育の振興に尽くしたと者して文部省から表彰される。森の文部大臣就任からほぼ1年後のことであった。

富田鐵之助は、使節団理事官に追加発令され渡米した大蔵少輔吉田清成とは、第1章第2節や第3章第4節で述べたように、慶応4（1868）年6月頃から明治2年7月頃までの1年間（ただし、富田は半年ほど緊急一時帰国）、ともにニューブランズウィックのチャーチ・ストリートに住まいし、旧知の間柄であった。吉田は、明治7年には大蔵省から外務省に転じ駐米全権公使として赴任し、ニューヨーク駐在領事の富田の上司になる。（吉田は弘化2（1845）年生まれなので）富田の方が10歳ほど年長であった。最初の頃の富田から吉田宛ての書簡では、「吉田公使閣下 富田鉄之助拜」あるいは「吉田公使閣下 富田鉄之助」のように職務上の上下関係を表したものになっているが、吉田が逝去する直前の明治24年頃には、直接の上下関係から離れたこともあって、「吉田子爵閣下 鉄」といった表現に変化しているのである（『吉田清成関係文書 二 書簡翰篇2』、pp.308-311）。

富田は、薩摩藩士でありながら海舟門下でもあった吉原重俊とは、渡米以前から面識があった可能性は残る。明らかなことは、「取調」任命を契機に、官界においてほぼ同様のコースを歩んだことである。すなわち、吉原は、帰国後に大蔵省に入るが、富田も、その後、イギリス公使館一等書記官を経て大蔵省に入る。明治15（1882）年、日本銀行創立にあたり、ともに創立委員となった後、吉原が初代日本銀行総裁、富田が初代日本銀行副総裁に任じられる。吉原が病気がちのために富田が事実上の総裁を務めるが、吉原の逝去に伴い、明治21年、第2代総裁に就任する。

その吉原は、薩摩藩第2次留学生として慶応2（1866）年に渡米しているが、翌1867年以降は、時には一人で、時として湯地定基等とともに、アンドーヴァーの新島襄を訪ねている。その年の秋には夜遅くまで、聖書（マタイによる福音書28章）を読み、「三位一体」を論じたのであった。新島の1867年12月1日付のプリント宛の手紙の表現では、

We read together 28th chapter of St. Matthew. I think they understood the chapter quite well, but they found trouble to understand the Trinity; so I explained to them far as I know.

である（『新島襄全集6』、p.26）。また、その日、新島がキリスト教の祈り方を英語で教えたりもしたのである。新島の評価では、モンソンで学ぶ薩摩藩第2次留学生の中では、大原（吉原）と工藤（湯地）が優秀であり、彼らは、まだ英語は自由に話せないが、英語をよく理解しているとの印象をもったのであった。

明治に入っても新島が密航状態になっていることが¹⁵⁰⁾、（たぶん）吉原等を通して元薩摩藩士の森有禮少辦務使の耳に入ったものと思われ、森は、明治4（1871）年3月、新島のパスポート発給に尽力する。これが、翌年の新島の「取調」任用、田中文部省理事官の通訳・欧米随行につながるが、明治6年1月、ベルリンで田中理事官随行を辞し、ヨーロッパ周遊の後、9月にアンドー

150) 新島は、1868年7月頃から横浜のバラとも連絡を取りはじめる。さらにバラ経由して父・民治との手紙のやり取りをしている。明治7年2月、アンドーヴァー神学校卒業を控えた新島に対して横浜海岸教会は新島の牧師就任を要請するが、この連絡が新島には届かず、バラからこれを知らされ、謝絶している（『新島襄全集8』、pp.116-119）。

ヴァー神学校に復学する。このころ富田はニューヨーク駐在副領事に任じられていたから、交際の濃淡はともかくとして、明治7年7月の富田の賜暇帰朝（新島は10月に帰国の途に着く）までのほぼ1年間に、業務上（邦人保護）の交信は行われていたと思われるのである。

明治19（1886）年、仙台では男子普通教育のための学校設立をめぐる対立が起こっている。富田・新島¹⁵¹（さらにデフォレスト（アメリカン・ボード宣教師））が推進する「同志社の分校」設立と押川方義（明治5年、横浜でバラから受洗）・ホーイ（アメリカ・ドイツ改革派宣教師）が推進する学校設立をめぐる対立であったが、新島・富田の男子普通教育のための「宮城英学校（翌年、東華学校と改称）」設立、押川の神学教育のための「仙台神学校（現在の東北学院）」設立で決着する¹⁵²。押しの強い押川に対して逡巡の色を示す新島を激励・リードしたのは、8歳年長の富田であった。当時、日本銀行副総裁の富田鐵之助は、数回にわたり新島と同行して、宮城英学校設置を「時の文部大臣森有禮」に陳情する。森からは上京した宮城県令松平正直に対して学校設置の内話をした旨を知らされたりもする。第7章1節で言及した松倉恂（明治19年当時は、仙台区長）からは、仙台のホーイの動向も伝えられるなどしている。学校設置をめぐる環境は、現職の文部大臣や宮城県令・仙台区長の後ろ盾があり、明らかに富田・新島の側に圧倒的に有利であったのである。

新島は、上京の際、日本銀行に総裁・吉原重俊を訪ねたりもしているが、副総裁・富田とは、富田宅に宿泊するなど、より親しく交際していたのである。しかしながら、明治21年、吉原が逝去し、翌22年2月11日（大日本憲法発布の日）に森が刺殺され、病状が思わしくなかった新島は、明治23年1月23日、富田ほか数人に「遺言」を残し逝去する。富田への遺言は、

「是迄種々御厄介ニ預リ特ニ昨年病気の節ハ非常ナル御世話ヲ辱ふし此段厚ク謝スル所ナリ、

151) 明治42年の『慶應義塾学報』の142・143号には「所謂基督教界の名士」と題する評論が掲載されている（『新井奥邃著作集 第8巻』, pp.488-507に採録）。明治のキリスト者の人物評をテーマにしたものである。横井小楠の長男・横井時雄（同志社第3代社長を経て、当時、衆議院議員）が日糖疑獄事件で検挙されたことから、横井批判がこの評論中心であるが、それとともに青山学院の本多庸一批判が展開され、この比較で新島・押川の称賛がなされている。すなわち、「峻烈直ちに人の肺腑を刺す押川氏の雄弁」、「而かも新島、押川諸氏が、よく短日時の間に、忘る可かざる深き印象を学徒の胸臆に刻し得たるに反し、本多氏は」、「氏には、新島氏の熱誠なく、押川氏の修養なし」、「押川方義氏は今の基督教界にはあまり大き過ぎる人物なり」である。一般に、押川の評価は、東北学院院長を辞した後、衆議院議員（愛媛県選出）に当選したほか、キリスト教棄教の噂等もあって、批判者と擁護者の二極に分かれるが、この評論では、「氏が耶蘇を廃業して実業界入りしは、敵人適所を得たるものなり」である。

152) 仙台での男子普通教育のための学校の設立に挫折した押川は、山形にこれを求め、県当局の支援を受けて、山形英学校の設立に尽力する。明治20年11月、山形英学校が開校し、押川は校長に就任する（『東北学院百年史』, pp.316-323）。森有禮は、明治18年4月から学事巡視を実施したが、文部大臣就任後も、国民への教育の啓蒙と教育の普及を目的としてこれを継続し、最後が明治21年11月初旬の山形・福島の学事巡視であった（鎌田（2010））。日時は不明だが、その一環として山形英学校も視察している。視察先のどの学校でも、生徒を門外に整列させて出迎えるが、山形英学校には視察の事前連絡がなく、通常通りに授業を行っていたことから、森文部大臣が「不快の顔色を呈し」、押川を詰問したことから、両者の言い争いの寸前となったところで、同行の知事が間に入ったとのエピソードも残されている（川合（1991）, pp.68-71に採録された山形英学校教頭松村介石の手記による）。もしこのエピソードが真実とすれば、森の頭の中に、宮城英学校設立をめぐる富田・新島vs押川の影響が残っていたことによるためかも知れない。

今や病重し再び見るを得ず

富田鉄之助殿 』

であり、また、伊藤博文・大隈重信・松方正義・井上馨・陸奥宗光・勝海舟・児嶋惟謙・洪澤栄一・富田鐵之助等15名の連名宛の遺言は、

「是迄同志社大学の為ニ不一方御高配の儀感佩仕候、

行末長く富田（ママ）御尽（ママ）高配被成候儀乍此上懇請申上候」

であった（『新島襄全集 4』, p.408及びp.412）。

前述のように翌24年には吉田も逝去し、富田のアメリカ留学・ニューヨーク勤務をきっかけに親交があった3人を失うが、富田は、この年に東京府知事に任じられる。明治26年には、府知事として、東京の水問題解決のために三多摩（北多摩郡・西多摩郡・南多摩郡）を神奈川県から編入したのである。

6 補論：森有禮の富田鐵之助・認識ルート

森有禮と富田鐵之助の関係は、すでに述べたが、森有禮は、複数のルートから富田鐵之助の存在を知り、彼の人格・識見等を把握していたと思われるのである。その第1は、薩摩藩ルートである。富田・高木・小鹿は、薩摩藩の畠山・松村・吉田とともに、ニューブランズウィックのチャーチ・ストリートに住まいしていたから、在米の薩摩藩留学生には彼らの存在が周知のものとなっていたのである。森の帰国後も、森と在米薩摩藩留学生との関係は維持され、このネットワークを通して米英留学生の情報を得ていたと考えるべきなのである。

第2は、あまり知られていないが、仙台藩に関係する2つのルートである。富田の従者・通訳修業の名目で渡米した高橋是清・鈴木知雄ルートと箱館戦争生き残りの金成善左衛門・新井奥達ルートである。森は、慶應3年にサンフランシスコ経由で帰国するが、サンフランシスコで仙台藩の後藤常と鈴木知雄とに出会う。後藤常、高橋是清、鈴木知雄等4人は、明治元年12月に帰国するが、仙台藩等からの捕縛を恐れ、サンフランシスコでの縁を頼りに外国官権判事の森有禮にすがり思いで庇護を求め、森宅で書生生活を送る。その後、3人とも、大学南校教官3等手伝を務めることになるが、後藤常が仙台藩に捕縛され、森が仙台藩に掛け合っこれを取り戻すと事件も起きる（『高橋是清自傳』, pp.75-85）。このように見ると、高橋是清・鈴木知雄ルートが、森が富田の渡米を知る契機となる仙台藩のひとつ目のルートになる。これに加えて、森が廃刀論を主張したところから刺客に襲われる可能性もあったことから、高橋是清や鈴木知雄も護衛にあたる（『高橋是清自傳』, p.95）、さらに後藤との縁で箱館戦争生き残りの元仙台藩士の金成善左衛門が森の護衛にあたる（播本（1996）, p.21）。森は、少辨務使としてアメリカに赴任する際に金成を同行しようとしたが、金成からは、やはり箱館戦争生き残りでハリストス教（ロシア正教）に改宗した元仙台藩士の新井常之進（新井奥達）を推薦され、森は私費で彼を同行する（工藤（1984）, pp.17-18, 『森有禮全集 第2巻』, pp.824-825及び『新井奥達著作集 第9巻』, pp.144-145に採録された奥達から新井一郎宛書簡（1871年2月17日付書簡））。このように、金成善左衛門・

新井奥邃ルートが仙台藩のふたつ目のルートになる。実際、このとき森は、すでに紹介した外務省関係者の外山正一・名和緩（名和道一）に加え、「外務大令使」の矢田部良吉（前大学南校中助教）を同行し、さらに従者として新井奥邃と内藤誠太郎も渡米させたのであった。森にとっては、（第3章第3節で紹介した神田乃武を含む）大学南校と大学東校から米・英・独・仏に派遣された留学生31名を率いての渡米であり（渡辺（1979）、p.235）、監督補助者も必要だったのである。同行の矢田部良吉は、高橋是清の推薦によるものとされ、また、内藤誠太郎は是清の書生仲間であった（『高橋是清自傳』、pp.95-97）。

新井奥邃は、明治32（1899）年、30年ぶりに帰国したが、帰国後の最初の訪問先は富田鐵之助宅であった（永島（1991）、p.40）。郷里仙台では「明治の浦島太郎」と新聞で報じられるなど、歓迎ムード一色であった（『新井奥邃著作集 第8巻』、pp.83-112）。その後、奥邃は、東北学院教授・山川丙三郎による『ダンテ 神曲』の一連のシリーズ（「地獄」・「浄火」・「天堂」）の翻訳（日本最初の翻訳）の冒頭にコメントを寄せる等の評論・文化活動も行っている（同上書、pp.71-81に採録）。奥邃の思想は、足尾銅山事件の田中正造等にも、大きな思想的影響を与えたとされており、現在では、奥邃語録が、ポケット版（『おうすいポケット 新井奥邃語録抄』）として刊行されるまでに至っている。

第3は、当然に、外山正一ルートである。すでに述べたように、外山は、辨務少記として森とともに渡米し、森の部下として辨務使館に勤務したが、旧幕臣で、維新後は静岡学問所一等教授を務めていた。海舟の側近であったから、小鹿・富田・高木のことは十分に知っていたのである。

森から富田宛ての書簡（1871年7月1日付、ワシントンの辨務使館から発信）は、富田から森少辨務使に出された書簡への返信であり、富田が田邊はじめ6名に対して600ドル立て替えをしたことに対する確認や、立て替え金を富田宛に為替手形で送ったこと、森が6名の所持金を預かっていることを伝えた書簡である（『森有禮全集 第2巻』、p.85に採録）。事務的な用件を記した手紙ではあるが、明治4年には互いの存在を認識し、信頼して要件を頼める間柄になっていたことを示す書簡にもなっているのである。

参考文献

< 論文・著書等（著者名（発表年）の形式で引用のもの：配列は、アルファベット順 >

土肥昭夫（1980）『日本プロテスタント・キリスト教史』新教出版社

海老沢有道・大内三郎（1970）『日本キリスト教史』日本基督教団出版局

海老沢亮（1959）『日本キリスト教百年史』日本基督教団出版局

播本秀史（1996）『新井奥邃の人と思想』大明堂

本多繁（1991）『米国のプロテスタンティズムと日本人』丸善

犬塚孝明（1985）「仁礼景範航米日記」『研究年報（鹿児島県立短期大学地域研究所）』第13号、pp.61-90.

犬塚孝明（1986）「仁礼景範航米日記（その二）」『研究年報（鹿児島県立短期大学地域研究所）』第14号、

pp.1-36.

犬塚孝明 (1987a) 『明治維新対外関係史研究』 吉川弘文館

犬塚孝明 (1987b) 「翻刻 杉浦弘蔵ノート」『研究年報 (鹿児島県立短期大学地域研究所)』 第15号, pp.95-129.

犬塚孝明 (1990) 「翻刻 杉浦弘蔵メモ」『研究年報 (鹿児島県立短期大学地域研究所)』 第18号, pp.31-54.

石附実 (1992) 『近代日本の海外留学史』 中央公論社 (中公文庫) (初刊: ミネルヴァ書房, 1972年)

鎌田佳子 (2010) 「森有礼の学事巡視 —その行程をめぐって—」『立命館文學』 第618号, pp.199-211.

片子沢千代松 (1957) 『日本新教百年の歩み』 日本YMCA同盟

川合道雄 (1991) 『武士になったキリスト者 押川方義 管見 (明治篇)』 近代文藝社

川島二郎 (1988) 『ジョナサン・ゴープル研究』 新教出版社

工藤直太郎 (1984) 『新井奥邃の思想』 青山館

三谷博 (2003) 『ペリー来航』 吉川弘文館

大江満 (2000) 『宣教師ウィリアムズの伝道と生涯 —幕末・明治米国聖公会の軌跡—』 刀水書房

岡部一興 (2015) 「オーバン神学校に学んだ人々」『明治学院大学キリスト教研究所紀要』 47号, pp.407-448.

大久保利兼 (編) (1976) 『岩倉使節の研究』 宗高書房

坂井達朗 (2000) 「大童信太夫と福沢諭吉」, 『福澤手帖』 106, pp.5-15.

瀬戸口龍一 (2010) 「松本壮一郎「亜行日記」」『専修大学史紀要』 第2巻, pp.90-110.

渋谷輝二郎 (1981) 『海舟とホイットニー』 TBSブリタニカ

塩野和夫 (2005) 『19世紀アメリカンボードの宣教思想 I』 新教出版社

塩谷安夫 (1975) 『アメリカ・ドルの歴史』 学文社

塩崎智 (2001) 『アメリカ「知日派」の起源—明治の留学生交流譚—』 平凡社

菅 (七戸) 美弥 (2009) 「55名の「ジャパニーズ」 —1870年米国人口センサスの調査票 (population schedule) への接近—」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ』 第60集, pp.137-151 (東京学芸大学リポジトリ)

杉井六郎 (1984) 『明治期キリスト教の研究』 同朋舎出版

高橋秀悦 (2009) 「江戸期尾去沢の銅の道 —平成19年度東北産業経済研究所公開シンポジウムに触発されて—」『東北学院大学東北産業経済研究所紀要』 第28号, pp.73-103.

高橋秀悦 (2014a) 「「海舟日記」に見る「忘れられた元日銀總裁」富田鐵之助 ~戊辰・箱館戦争後まで~」『東北学院大学経済学論集』 第182号, pp.93-124.

高橋秀悦 (2014b) 「幕末・明治初期のアメリカ留学の経済学~「海舟日記」に見る「忘れられた元日銀總裁」富田鐵之助(2)~」『東北学院大学経済学論集』 第183号, pp.1-39.

高橋秀悦 (2015a) 「幕末・横浜洋銀相場の経済学 ~「海舟日記」に見る「忘れられた元日銀總裁」富田鐵之助(3)~」『東北学院大学経済学論集』 第184号, pp.1-36.

高橋秀悦 (2015b) 「幕末・金貨流出の経済学 ~「海舟日記」に見る「忘れられた元日銀總裁」富田鐵之助(4)~」『東北学院大学経済学論集』 第185号, pp.7-86.

- 高木不二 (2005) 「横井佐平太・大平のアメリカ留学生活 —アメリカ側の史料から—」『大妻女子大学紀要 (文系)』第37巻, pp.233-248.
- 高木不二 (2006) 「黎明期の日本人米国留学生 —日下部太郎をめぐって—」『大妻女子大学紀要 (文系)』第38巻, pp.198-218.
- 田中智子 (1996) 「幕末維新期のアメリカ留学 —吉田清成を中心に—」(山本四郎 (編)『日本近代国家の形成と展開』, 吉川弘文館, 1996年のpp.2-36に所収)
- 内田和秀 (2015a) 「横浜山手病院について 解説編:15 ホイットニー一家(1)」『聖マリアンナ医科大学雑誌』Vol.42, pp.275-279.
- 内田和秀 (2015b) 「横浜山手病院について 解説編:16 ホイットニー一家(2)」『聖マリアンナ医科大学雑誌』Vol.43, pp.55-59.
- 内田和秀 (2015c) 「横浜山手病院について 解説編:17 ウィリスと赤坂病院(1)」『聖マリアンナ医科大学雑誌』Vol.43, pp.93-97.
- 内田和秀 (2015d) 「横浜山手病院について 解説編:18 ウィリスと赤坂病院(2)」『聖マリアンナ医科大学雑誌』Vol.43, pp.99-102.
- 山下英一 (2013) 『グリフィスと福井 増補改訂版』エクシート
- 山崎渾子 (2006) 『岩倉使節団と宗教問題』思文閣出版
- 嚴平 (Yan Ping) (2008) 『三高の見果てぬ夢 —中等・高等教育成立過程と折田彦市—』思文閣出版
- 吉原重和 (2013) 「新島襄と吉原重俊 (大原令之助) の交流」『新島研究』第104号, pp.3-31.
- 吉野作造 (1927) 「静岡学校の教師クラーク先生」『新舊時代』2月号, pp.18-23 (国立国会図書館デジタルコレクション)
- 吉野俊彦 (1974) 『忘れられた元日銀總裁—富田鐵之助傳—』東洋経済新報社
- 渡辺實 (1977) 『近代日本海外留学生史 上』講談社
- Ballagh, James H. (2010), *Shinonome, Day-Dawn, or The Beginning of the Kingdom of God in Japan* (バラ, 井上光 (訳)『宣教師バラの初期伝道 しのめ 夜明け 日本における神の国のはじまり』, キリスト教新聞社, 2010年)
- Cary, Otis (1909), *A History of Christianity in Japan*, vol.2, Fleming H. Revell Company (O・ケーリ, 江尻弘 (訳), 『日本プロテスタント宣教史 最初の50年 (1859-1909)』, 教文社, 2010年)
- Clark, Warren E. (1878), *Life and Adventure in Japan*, American Tract Society (E・W・クラーク, 飯田宏 (訳), 『日本滞在記』, 講談社, 1967年)
- Clark, Warren E. (1904), *Katz Awa "The Bismark of Japan" : Or the Story of Noble Life*, B.F.Buck & Company (Internet Archiev).
- Corwin, Charles E. (1922), *A Manual of the Reformed Church in America (Formerly Ref. Prot. Dutch Church), 1628-1922, Fifth Edition, Revised and Enlarged*, Board of Publication and Bible-School Work of the Reformed Church in America, New York (東北学院大学図書館蔵)
- Corwin, E.T., J.H.Dubbs and J.T.Hamilton (1894), *A History of The Reformed Church, Dutch, The*

- Reformed Church, German and The Moravian Church in the United States*, The Christian Literature Company (東北学院大学図書館蔵)
- Corwin, Tanjore E. (1859), *A Manual of the Reformed Protestant Dutch Church in North America*, Board of Publication of the Ref. Prot. Dutch Church, New York (Internet Archive)
- Corwin, Tanjore E. (1869), *A Manual of the Reformed Church in America, Second Edition, Revised and Enlarged*, Board of Publication of the Reformed Church in America, New York (Internet Archive) .
- Corwin, Tanjore E. (1879), *A Manual of the Reformed Church in America (Formerly Ref. Prot. Dutch Church), 1628-1878, Third Edition, Revised and Enlarged*, Board of Publication of the Reformed Church in America, New York (HATHI TRUST Digital Library)
- Corwin, Tanjore E. (1902), *A Manual of the Reformed Church in America (Formerly Ref. Prot. Dutch Church), 1628-1902, Forth Edition, Revised and Enlarged*, Board of Publication of the Reformed Church in America, New York (東北学院大学図書館蔵)
- Griffis, William E. (1876), *The Mikado's Empire*, Harper & Brothers, Publishers(グリフィス, 山下英一(訳), 『明治日本体験記』, 平凡社 (東洋文庫430), 1984年)
- Griffis, William E. (1900), *Verbeck of Japan: A Citizen of No Country*, Fleming H.Revell Company (Internet Archive)
- Griffis, William E. (1916), *The Rutgers graduates in Japan: an address delivered in Kirkpatrick Chapel, Rutgers College, June 16, 1885*, the second edition, Rutgers College (Internet Archive)
- Loetscher, F. W. (1921), *Papers of the American Society of Church History*, Second Series Volume VI, G.P.Putnam's Sons, New York. (東北学院大学図書館蔵)
- Mitchell, Wesley C. (1908) *Gold Prices and Wages under the Greenback Standard*, University of California Press (Reprinted 1966 by Augustus M. Kelley · Publishers)
- Morrison, Samuel E. (1967), "OLD BRUI" *Commodore Mathew C. Perry 1794-1858*, Little, Brown and & Co. (サミュエル・モリソン, 後藤優 (訳), 『ペリーと日本』, 原書房, 1968年)
- Nussbaum, Arthur (1957), *A History of the Dollar*, Columbia University Press (A.ヌスバウム, 浜崎敬治(訳), 『ドルの歴史』, 法政大学出版局, 1967年)
- Pineau, Roger (ed.) (1968), *The Japan Expedition 1852-1854: The Personal Journal of Commodore Matthew C.perry*, Smithsonian Institution Press. (ピノオ (編), 金井圓 (訳), 『ペリー 日本遠征日記』, 雄松堂出版 (新異国叢書第Ⅱ輯1), 1985年)
- Williams, Samuel W. (1910), *A Journal of the Perry Expedition to Japan 1853-1854* (ウィリアムズ, 洞富雄 (訳), 『ペリー 日本遠征随日記』, 雄松堂出版 (新異国叢書8), 1970年)
- Whitney, S. Phoenix (1878), *The Whutney Family of Connecticut, and its affiliations, Vol. 1 ~ 3*, privately printed, New York (HATHI TRUST Digital Library)

< 全集・史料等 (『全集名』の形式で引用のもの：配列は、アルファベット順) >

- 『新井奥邃著作集 第8巻』, 新井奥邃著作集編纂委員会 (編), 春風社, 2003年.
- 『新井奥邃著作集 第9巻』, 新井奥邃著作集編纂委員会 (編), 春風社, 2005年.
- 『太政類典 (第1編: 慶応3年~明治4年)』, 第119巻 (国立公文書館デジタルアーカイブ (太政官・内閣関係
「第6類 太政類典」))
- 『太政類典 (第1編: 慶応3年~明治4年)』, 第120巻 (国立公文書館デジタルアーカイブ (太政官・内閣関係
「第6類 太政類典」))
- 『男爵目賀田種太郎』, 故目賀田男爵傳記編纂會 (編), 故目賀田男爵傳記編纂會, 1938年 (復刻版: ゆまに
書房, 2002年)
- 『ドクトル・ホイットニーの思ひ出』, ホイットニー夫人・梶夫人, 基督教書類會社, 1930年 (復刻版: 大空社,
1995年)
- 『福澤諭吉書簡集 第1巻』, 慶應義塾, 岩波書店, 2001年.
- 『福澤諭吉全集 第20巻』, 慶應義塾, 岩波書店, 1963年.
- 『ヘボン在日書簡全集』, 岡部一興 (編)・高谷道男・有地美子 (訳), 教文館, 2009年.
- 『ヘボン書簡集』, 高谷道男 (編訳), 岩波書店, 1959年.
- 『氷川清話』, 勝海舟, 江藤淳・松浦玲 (編), 講談社学術文庫, 2000年.
- 『一橋大学百二十年史』, 一橋大学学園史刊行委員会, 一橋大学, 1995年.
- 『フルベッキ書簡集』, 高谷道男 (編訳), 新教出版社, 1978年.
- 『海軍省公文備考類 公文類纂 (明治6年 巻2 本省公文 礼典部)』 (国立公文書館アジア歴史資料セン
ター・デジタルアーカイブ)
「癸1套秘事大日記 太政官へ申出 松村淳蔵外2名任官の件 [ref. C09111325100]」
「癸3套秘事大日記 太政官へ申出 松村淳蔵外2名任官の件 [ref. C09111325300]」
- 『海軍省公文備考類 公文類纂 (明治9年 巻21 本省公文 學術部)』 (国立公文書館アジア歴史資料セン
ター・デジタルアーカイブ)
「外乾23 米留學生勝小鹿國友次郎試験表の件外務丞通知 [ref. C09112210400]」
- 『海軍省公文備考類 公文類纂 (明治10年 前編 巻27 本省公文 學術部)』 (国立公文書館アジア歴史資
料センター・デジタルアーカイブ)
「外入124 米留學生勝小鹿國友次郎試験表の件外務大丞通知 [ref. C09112384600]」
- 『官員録 明治五年二月改』 (国立公文書館デジタルアーカイブ (太政官・内閣関係「第5類 官員録・職員
録」)), アジア歴史資料センター [ref. A09054278600]
- 『官員全書 外務省 壬申五月改』 (国立公文書館デジタルアーカイブ (太政官・内閣関係「第5類 官員録・
職員録」)), アジア歴史資料センター [ref. A09054277600]
- 『海舟全集 第9巻』, 勝安房 (海舟全集刊行会 (編)), 改造社, 1928年 (国立国会図書館近代デジタルライ
ブラリー [永続的識別子: ndjp/pid/781222])
- 『勝海舟関係資料 海舟日記 (一)~(五)』, 東京都江戸東京博物館都市歴史研究室 (編), 東京都・(財)
東京都歴史文化財団・東京都江戸東京博物館, 2002~2011年.

- 『勝海舟全集 別巻 来簡と資料』, 勝海舟全集刊行会, 講談社, 1994年.
- 『勝海舟全集 第18巻～第21巻 海舟日記Ⅰ～海舟日記Ⅳほか』, 勝部真長・松本三之助・大口勇次郎(編), 勁草書房, 1968～1972年.
- 『慶應義塾大学三田キャンパス 建築プロムナード — 建築特別公開日』, 慶應義塾大学アート・センター(パンフレット), 2015年11月27日.
- 『公文録・明治元年』, 第34巻(庚午・各県公文10(盛岡県・山形県)), (国立公文書館デジタルアーカイブ(太政官・内閣関係「第1類 公文録」))
- 『クララの明治日記(上)(下)』, クララ・ホイットニー, 一又民子(訳), 講談社, 1976年.
- 『舊條約彙纂 第一巻第一部』, 外務省条約局, 1928(昭和5)年5月(『旧条約彙纂 第一巻(各国之部) 第一部』, 国立公文書館アジア歴史資料センター・デジタルアーカイブ [ref. B13090769000])
- 大童家文書(仙台市博物館寄託資料)
- 富田鐵之助から大童信太夫宛て書状(慶應4年1月3日付及び同年1月26日付)
- 富田鐵之助から岩手逸翁宛て書状(明治4年4月28日付)
- 『おうすいポケット 新井奥達語録抄』, 三浦衛/コール・ダニエル(編), 春風社, 2015年.
- 『森有禮全集 第2巻』, 大久保利兼(編), 宣文堂書店, 1972年.
- 『奈良養斎傳 附 奈良孝斎傳』, 奈良眞志, 1894年(岩手県立図書館所蔵: 図書名は『奈良養斎伝』)
- 『新島襄全集 4 書簡篇Ⅱ』, 新島襄全集編集委員会(編), 同朋舎, 1989年.
- 『新島襄全集 6 英文書簡篇』, 新島襄全集編集委員会(編), 同朋舎, 1985年.
- 『新島襄全集 8 年譜編』, 新島襄全集編集委員会(編), 同朋舎, 1992年.
- 『春城筆語』, 市島春城, 早稲田大学出版部, 1928年(国立国会図書館近代デジタルライブラリー [永続的識別子: ndjp/pid/117503])
- 『指路教会の百年の歩み』, 横浜指路教会創立百周年記念事業実行委員会(編), 日本基督教団横浜指路教会, 1974年.
- 『新訂 福翁自伝』, 福沢諭吉(富田正文校訂), 岩波書店(岩波文庫), 1978年.
- 『S・R・ブラウン書簡集』, 高谷道男(編訳), 日本基督教団出版部, 1965年.
- 『枢密院文書・枢密院高等官転免履歴書 明治ノ一(3 吉田清成)』(国立公文書館東アジア歴史資料センター・デジタルアーカイブ [ref. A06051165700])
- 『高橋是清自傳』, 高橋是清, 千倉書房, 1936年.
- 『高木三郎翁小傳』, 高木正義, 高木事務所, 1910年(国立国会図書館デジタルコレクション [永続的識別子: ndjp/pid/781603])
- 『東北学院百年史』, 東北学院百年史編集委員会(編), 学校法人東北学院, 1989年.
- 『特命全權大使米欧回覽実記 一』, 久米邦武編(田中彰校注), 岩波書店, 1985年.
- 『都史紀要8 商法講習所』, 東京都公文書館, 東京都, 1960年.
- 『東京府知事履歴書(富田鐵之助履歴)』(東京都公文書館所蔵)
- 『横井小楠關係史料 一』, 日本史籍協會(編), 東京大學出版會, 1938年(東京大學出版會, 1977年覆刻)

- 『横井小楠関係史料 二』, 日本史籍協會 (編), 東京大學出版會, 1938年 (東京大學出版會, 1977年覆刻)
- 『吉田清成関係文書一 書簡篇1』, 京都大学文学部日本史研究室 (編), 思文閣出版, 1993年.
- 『吉田清成関係文書二 書簡篇2』, 京都大学文学部日本史研究室 (編), 思文閣出版, 1997年.
- 『吉田清成関係文書三 書簡篇3』, 京都大学文学部日本史研究室 (編), 思文閣出版, 2000年.
- 『吉田清成関係文書四 書簡篇4』, 京都大学文学部日本史研究室 (編), 思文閣出版, 2008年.
- 『吉田清成関係文書五 書類篇1』, 京都大学文学部日本史研究室 (編), 思文閣出版, 2013年.
- Annual Register of the United States Naval Academy for the Academic Year 1869- '70* Government Printing Office, 1870 (Internet Archive (USNA Digital Collections))
- Annual Register of the United States Naval Academy for the Academic Year 1870- '71*, Government Printing Office, 1871 (Internet Archive (USNA Digital Collections))
- Annual Register of the United States Naval Academy for the Academic Year 1871- '72* Government Printing Office, 1872 (Internet Archive (USNA Digital Collections))
- Annual Register of the United States Naval Academy for the Academic Year 1873- '74* Government Printing Office, 1874. (Internet Archive (USNA Digital Collections))
- Population Schedules of the Ninth Census of the United States 1870*,
National Archievs Microfilm Publications, Microcopy No.593,
Reel 888 : Somerset County, New Jersey (スライド番号 463/610 : コーウィン牧師と富田鐵之助)
Reel 852 : Bergen County, New Jersey (スライド番号 246/ 784 : バラとその家族)
Reel 873 : Middlesex County, New Jersey
(スライド番号 413/615 : Bartle Isaac , スライド番号 431/615 : 旭小太郎 (岩倉具定) ほか)
Reel 881 : Essex County, New Jersey (スライド番号 479/ 856 : ホイットニーとその家族)
Reel 620 : Hampshire County, Massachusetts (スライド番号 57/ 465 : 新島襄)
Reel 109 : City of New Haven, Connecticut (スライド番号 598/ 650 : 大原令之助 (吉原重俊))
Reel 123 ~ 127 : Discript of Columbia
- The Illustrated London News* (1853年5月7日号, 横浜開港資料館・リプリント版)